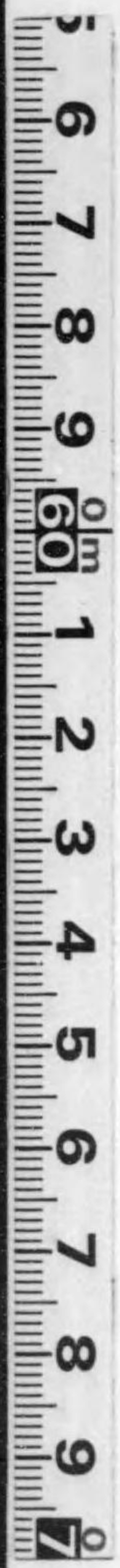


328

374



始



31262

328-39



珍  
書  
刊  
行  
會  
叢  
書

第  
五  
冊

大正  
5.1.14  
購求

Handwritten vertical text on the left edge of the cover, possibly a library or collection identifier.

紫文あまのさへづり摘趣

序



鼻をいどなむ燕子の翠簾を汚し、臭にあつまる小蠅の淨衣に點する、これ皆にくむべきの  
たぐひ也、しかはあれど、花にたゝすむ山賊あり、月にもたどる海士の子あり、明鏡も塵の  
ために曇り、白圭の物にふれて玷るなどの、わりなきためしをさへ、ひたすら世のわざの  
常ぞと見る心ならひに、身のきはの拙きをわすれ、事のはゞかりにもたへぬ物から、かく  
つかぬかき筆を棹となして、かの底井なき詞の海にさしくだせし事は、さらに玉の枝を折  
らむとの好みならねど、たゞ蚤のしわざのくづをれをもまぎらはすべく、かつは、我どひ  
としき交らひの、かたらひぐさにもやど、ひがくしき口にまかせて、そこはかどなくさ  
へづりなす物ならし。

干時享保六つとし中秋三五の夕

甲陽山梨岡のふもと

忘川のほとりにをいて

釣酔子書

趣向

一源氏物語は大和ぶみの最第一、無上の至寶なるよしにて、なべてたうとひこよなき物なるを、賤しき口にかけて、みだりに書ちらすべき事ならねば、佛神の御とがめも恐れおほきながら、しりてひそかに、俗語をもつて引なしたる趣向は、曾て中人以上のためにはあらず、下つかたの人といへども、此物語に心をよせて、おもひたざる人又おほし、しかれども、その言葉の優艶なるにまよふて、その意を得ざる人もすくなしとせず、尤諸抄物に委しといへども、其冊数繁多なれば、或は貧窮にして、ことごとく集め見る事の得がたき人あり、あるひは世路にいとまなうして、心をどごめて見がたき人あり、又は病身にして、つらくみるに物うきもあり、且又遠境邊土の人は師の傳を求る事成がたくて、いたづらにさとし得ざるもありて、此たぐひまらくなる程に、耳ちかき俗語をもつて本文の詞を解し、その言葉の趣きをわかまへなば、それによつて、本文の意味の大概をも、尋ね知るべきにもやどなん、朱子曰、未有不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>於<sub>一</sub>辭、而能通<sub>二</sub>其<sub>一</sub>意者、はともあり、又下學して上達すとあれば、今此野卑なる下學より、かの優艶の上達にもいたるべき物ならん歟、又この物語の内、閑談私語おほきがゆへに、止事なき御かたの

御前、又は親子兄弟などの間にては、講談斟酌の事なきにしもあらず、左あれば、師傳を得る事の成がたきにいたるも又おほし、しかあれば、右のたぐひの、獨り見てひとり得る事あるかたにも、若は便りあらんかと、かれこれにつけておもひより綴りたり

一此書の言葉つゞき、もとより俗語なるゆへに、ふつゞかにしてき、苦し、もつとも文筆堪能なる人にあつらへなばき、よき様もあるべけれども、是は本文の句つゞき文字どもに、随分其座をうごかさず残さず、たゞ直解にするまでにて、潤色するに及ばざる事とおもひよりて其固陋なるをばかへりみず

一たとへば、衣服に衰晴の差別のあるがごとし、その和歌連俳に取り用る處の言葉は、則本文にて晴着也、此書はたゞ、よこれ鹽垂れてつぎはぎあてたる衰着也、しかるゆへ、ことごとく俗語をひろひあつめ、その文つゞきも卑賤なるを詮に用ひ、且題號をも、紫文あまのさへづりと名つけたり

葉文登は、葉式部の文章物といふ心をされり、海士のさへづりさは、明石の巻に、あやしきあまごもなごのたかき人おはする所まであつまりまいりて、きしり給はぬ事ごもなさへづりあへるとあるをされり

一此物語はたゞ、好色煙風を書あらはしたる様なれば、人の見てよからぬかたへ心もうごさぬべきよしを、うたがひし人のあるに、その答へに、尤表には好色をのみいふたるや

うなれども、さにはあらず、孔聖の撰び給ひし詩經は、關雎益斯の徳、王道治世の始めなるを詮とし給ふ内にさへ、邪曲好色の詩を載せ、其外世々の經書の中にも、よからぬ行跡どもを書き出したるは、これをよき事とおもひて書のせたるにはあらず、此様なることはよからぬ儀ぞと、後人へ異見のために、其悪行をわざとあらはして、畢竟は勸善懲惡の筆法也、しかれば此物語も、勸善治世のかたのために、よきをこなひをしるし、懲惡不道のかたのためには、不届なるしかたどもをかき出したるものなれば、下の心は好色を誘りて、その人に恥をあたへ、後世の人をみちびきをしへむとの筆跡なるのよしを古抄物にくはしく断りをき給へり、しかるに今俗語に引なをして、人の耳にちかくなめげにかきなしたるにつけては、猶更好色をすゝむる媒にもやどの、うたがひもあるべければ、その善惡の行跡を、謹而批判をくはへみるに

- 先源氏の君の御身の上にて申さば
- 御父帝を、したひうやまはせ給ふは、孝心也
- 朱雀院へ、したがひしたしませ給ふは、君臣の義、長幼の序也
- 冷泉院の叙慮を、辭し申させ給ふは、辭讓の誠也
- 弘徽殿の暴惡に、報ひせさせ給はざるは、以直報怨也

- 葵の上へのお心ざし、常はそごくしき様なりしかども、實には御厚情なりしは、
- 恩愛の徳をふくみて、夫婦の別ある也
- 秋好中宮を御ねんごろにうしろみ申させ給ふは、報情のあつき也
- 花ちる里、末摘花などを、見捨させ給はざるは、哀憐のふかきにして、仁の端也
- 頭中將との交懐は、朋友の信ある也
- 女三宮、柏木右衛門督などを、うとませ給はぬは、和氣のひろき也
- 夕霧を、下位よりなしたてさせ給ひしは、謙退の至り也
- かくのごとくなるかたにて見れば、よき所おほくおはせし御方とはみゆれども
- 藤壺の女御への密通は、不義無道の至極、言語道断の横行也
- 六條の御息所をすかしおとさせ給ひ、権の齋院を、さまへとそこのかし給ふは、
- 無法の手はじめにして、あげくのはては神慮をさへ恐れたまはず
- 臘月夜の御事は、不敬放肆の醉まざれにて、終には御身のひしとなりし也
- 夕顔の宿への、微服賤行の手編笠は、後の難儀を引かぶり給ふ也
- 空蟬の君へのお不義は、沙汰のかぎりなる大いたづら也
- 軒端の萩へのおしがたは、不屈のうは塗也

- 明石の上や、玉かつらの君などの事は、さして好色といひつべき程のことにもあら
- ねど、父入道が媒せしもの物也、養ひ娘への密事もすまぬ事なり
- 外には又
- 弘徽殿の太后の妬心は、畢竟、治國齊家の大魔障也
- 藤壺の女御の、御實志はおはしながら、ちとおうしろ暗きなされぞこなひに
- 六條の御息所の、御分別ちがひのうへに、猶更の恪氣までさへふかき
- 紫のうへの、端正なる
- 空蟬の君の、貞節なる
- 臘月夜の、あさはかなるうかれ心
- 女三宮の、お品に似あはぬ不行儀
- 王命婦が、おとなしげもなき中酌に
- 源内侍が、歳不相應の姪行
- 明石の上のまたうご
- 近江の君の、氣軽る
- 惟光が、志を一にせし忠勤

- 臧人右近衛將監が、節を守りし強意
  - 豊後介が、元をわすれざる厚志のあるに
  - 小君が、恩を顧みざる不忠もあり
  - 筑紫の監か頑愚
  - 紀伊守が、失意
  - 此外舉て計ふべからず、又
  - 夕霧のやうに、内氣なるもおはするに
  - 柏木の様に執着なるもあり
  - 句薫のおせりあひなどは、もつとも宜しからぬ事ながら、いづれはお若氣の一通りまてなれば、さして批判に及ぶほどの事ともみえず
  - 手習の君のなれのはてなどは、移りかはる世の理りにて、且は煩惱即菩提の因ともいふべきにや
- 皆これ勸善懲惡のいましめぞといはむからに、今此俗解の淺くしきかきまにつけても猶更右の數件のよしわるしをは、心ひとつにおもひわくべき物にもかとてなん

凡例

- 一 毎卷一續の章意をきりて、何々より何々までと、本文の一段の口と奥とを出す
- 一 是は、本文をことごとく出しては、冊數大分になるによりて、本文をば本書にゆつりをく也
- 一 本文に、句を縮めて餘意をふくみたる所をば、別に俗語を添て其意をたし
- 一 此趣きは總ておほくこれあり、猶更ましてといひ、いとゞなご、あるやうの、所には餘意をふくみたるかたおほし
- 一 又轉語なる所をば、直語に取り直して解する類おほし
- 一 是は後にいふべき言葉を前へかき出しあるたぐひ也
- 一 本文の内、詩文引歌等の出書などは諸抄物にことごとく出たるうへ、もつとも俗語に引なすべき物にもあらねば、今それにはかゝはらず、且其あひだ、引用ゆる處の詩文文章など、一句や二句すこしばかり書出たるにては、その所の文義きこえがたき事もあるば、所により、全篇ともに書き出たるもあり、又は上か下かばかりをかき出したるもある也、又、官位、あるひは殿の名、衣裳の類は、是又俗語に引なすべき物にあらねば

本文のまゝにこれを用ゆ

二三ヶ秘訣の事は、もとより曾てしれざる儀なれば、本文のまゝにこれを出す、其外の秘事といふたぐひも、勿論しらざる事ながら、諸抄物に出たる趣にまかせてかき出した

一和歌の意は、釋すべき事にはあらねども、或は本文より和歌へうつり、和歌より本文を呼出す様のをもむきも所々におほく、其上和歌初學の人など、さしあたりて其歌の意に通じかねぬれば、その所の文義ともに心得がたき事もあらんなれば、そのために、かくもあらんかとおもひよりたる、大意ばかりをすこし記したり

一俗語に引なをすにつけて、その俗語といふにも、古様あり、當時あり、その所々によりていづれなりとも、相應なるを引出せり、たゞ々諸國の郷談は、其國限りの俗語にして、他國へは相互に通じがたし、しかるゆへそれを用ひず、たゞむかしよりいひならはしたる、都鄙一統の世話言葉の、世間通用するばかりなるを用ゆ、尤世話には、片言重言おほけれども、やはり片言ともに、人のいひならはしたるまゝにて撰らばす、又遊里浮廓のはやり言葉をば、曾て用ひず

一俗語引なをしの詞を集めし一編を、伊呂波寄せにし、通俗譯語と名づけて、末に相附け

たり、もつともその所々にてても、略引なをしの趣きを側らに記す、たゞし俗語引なをしのかたも從來、無智短才の所爲なれば、漱石枕流の誤りがちならんを、たゞ見ん人の青眼を仰ぐ而已



紫文蟹の囀きりつほ

いづれの御時にかより

より所なく心ほそけ也まで

いづれの帝の御時代にかありけん、女御更衣あまたおはしましける中に、さのみお里の品たかき御分際にはおはせぬが、すぐれて帝の御氣に入り、時めきはのき、給ふ更衣おはしましけり、此更衣いまだまいり給はざりけるまへかたより御入内ありて、われこそ心たかぶりせさせ給ふ、歴々なる女御の御かた、此更衣の、はひろく時めき給ふをあまりといへば、見る目もすまじきものにおほし給ふて、その御おやもとの品たか、らぬをあれてい分際にて、いかに御目見せよければとてもしやらくさやなど、おとしめそねませ給ふに、そのおやもとの品くらゐ、おなじほどなる御かた、それより品ひき、更衣たちは、ましてやすからぬ事におもひねたみ給ふ、此更衣、朝夕のおつとめかたにつけても、人の氣のたつやうなる事のみにて、恨みそねみをおはせ給ふがつもり、てにやありけん、いとお氣おもにわづらはしく、勞症のやうになりゆかせ給ひつ、物心ほそげにて御養生のためとて、お里へさがりがちにせさせ給へば、帝はいよ、御心ぞへも事たらぬ

ほどに、御不便なるものにおぼしめし、人のそしりあざけり奉るをもえ御遠慮なされず何かにつけて、未代までの引例にも成ぬべきなされかたなれば、公卿殿上人なども興をさまし給ひ、たゞあいたてなく、しり目にかけてさげすみつ、ひそくといひあへれば、更衣の御身にどりては、そらはづかしきほどなる帝のおぼしめし也けり、唐土にても、かやうの事のをこりにこそ、世の中もみたれてあしかりけれど、ごごともなく、天が下をこなべて、何とも手のつけられぬ事やといふ取さたのみにて、人のもてあましくさになりぬれば、楊貴妃のむかしのためしをも、引こにひ出つべくなりゆくまゝに、更衣の御身のうへ、何かにつけ見るしくき、ぐるしき事とおほほれど、帝の御心はへのかたじけなさば、たぐひも有がたきをたのみにて、うき年月をもまじらひつ、すぐし給ふ、父大納言はどくにうせ給ひ、母北のかたのみ、古風かたぎの物なれたる人にて、外の御かた、の、御おや引そひてうしろみ給ひ、當時世上のひきはなん、しき御かたにもをとらず、何事のさしきをも、此母北のかたかれこれと取つころひ、間をばあはせさせ給ひけれど、身にひきかけてしかどなされたる、おうしろ見のかたなければ、何ぞ入りくみ大だちたる事のある時は、たのみより御相談をもせさせ給はんかたなくて、お心ほそけなる事のみ也

御時に

御時代にか也

やんごなききは

品たかき御分際也

はじめより

まへかたより也

われはとおもひあがり

われこそ心たかぶり也

めざましきものに

みる目もすさまじきものに也

おなじほど

御おやもその品くらゐ同じ程也

それよりけらうの

それより品ひきも也

みやづへにつけても

おつめかたにつけても也

人の心をうかし

人の氣のたつやうなる也

つもりにや

つもり／＼てにや也

あつしく

お氣おもにわづらはしく也

さがち

お里へさがりがち也

あかす

事たらぬほどに也

あはれなるものに

御不便なるものにも

えはゞからせ給はず

御遠慮なされず也

世のためしにも

末代までの引例にも也

御もてなし

なされかた也

かんだちめ

公卿也

うへ人

殿上人也

あいなく

あいたてなく也

めをそばめつ、

しりめにかけてまげすみつゝ也

まばゆき

そらはづかしき也

御おほえ

帝のおほしめし也

もろこしにも

唐土にても也

かゝる

かやきの也

やう／＼

ごごともなく也

あぢきなう

何とも手のつけられぬ事や也

もてなやみぐまに

もてあましぐまに也

ひきいでつべう

引ごまにいひいでつべく也

はしたなき事

見ぐるしくきぐるしき事ども

なくなりて

さく／＼にうせ給ひ也

よしあるにて

物なれたる也

さしあたりて

當時也

はなやかなる

はな／＼しき也

とりたて、

身に引かけて也

ごごある時

何ぞいりくみ大だちたる事のあ

る時也

より所なく

たのみより御相談をもてさせ給

はんかたなくて也

たぐひなきな

たぐひもありがたきを也

いにしへの人の

古風かたぎの也

うちぐし

引そひて也

世のおほ也

世上のひゞき也

もてなし

取つくるひ間をばあはさせ也

はか／＼しき

しかさなれたる也

さきの世にも御ちぎりやより

女御はおぼしうたがへりまで

此更衣は、前世の御宿縁やふか／＼りけん、世にたぐひなくきよくうつくしき、玉のやうなる皇子さへむまれさせ給ふ、帝は御懐胎のあひだも、いつか／＼と、お心もどながらせ給ひしほどに、御子をいそぎよびまいらせて御らんするに、世にめづらしきちごの御むまれつき也、一の宮は、右大臣殿の御娘、弘徽殿の女御の御腹にてましますば、おうしろだておも／＼しく、うたがひもなく春宮にた／＼せ給ふべき皇子也と、世上一統にもてはやし

奉れども、此今御子のかうばしき御生得には、たちならばせ給ふべくもあらず、一の宮と申し奉るばかりに、御危略にもなされがたき、大てい一とをりの御いとおしみまでにて、今御子の御事は、御眞實から、別して御大切には帝のおぼしたりけれども、おもてだちたる事は御遠慮もあれば、たゞ御内證ものにおぼしめし、御秘藏がらせ給ふ事かぎりなし、御母更衣を、此御子御誕生以後は、御息所とぞ、唱へける、御奉公はじめより、内侍などのなみに、おそばにて、不斷召つかはさせ給ふべき、御格式にてもあらぬうへに、その御人がらお心入れのうちあがり、おほやうにましますにつけて、世上のおもはくどもに格別にて、しせんと上臈めかしかりけれども、帝のたゞ一すちにとぐるめまいらせ給ひ御意にいらせ給ふあまりに、おりにふれさあるべき御あそびのおりくは勿論、その外何事によらず、わけある御用事の節々には、人よりさきにまづめさせられて、参上させ給ひ給ひ、ある時は御寝なりすぐし、日たけて起させ給へば、お部屋へもさがらせ給はで、やはりそのまゝにつとめておはしませ給ひなご、ひしと御前さらず召つかはせ給ひしかば、をのづからお腰もごづかひかなごのやうにて、かるくしきかたにもみえさせ給ひたりしを、此御子生れさせ給ひてより後は、帝別しての御心よせにおぼしためさせ給ひたれば、わるうしたならば、此御子を、春宮にもたてませ給ふべきかと、弘徽殿の女御はうたが

はしくそおぼしめしたりける

- まさのよ 前世也
- 御ちぎりや 御宿縁や也
- 世になく 世にたぐひなく也
- きよらなる きよくうつくしき也
- たまのをのこみこ 玉のやうなる皇子也
- いつしのかさ いつか〜さ也
- めづらかなる めづらしき也
- ちこの御かたち ちこのおむまれつき也
- いちのみこ 一の宮也
- よせおろく 御うしろだておもしく也
- まうけの君 春宮也
- 世に 世上一統也
- もてかしづき 御にほひには
- 御にほひには かうばしき御生得には也
- 大かたのやんごこなき 大てい一とをりの御いとしみ也
- わたくしもの 御内證もの也
- おほし 御心よせ
- おほしめし也 かしづき
- 御ひさがらせ也
- はじめより 御奉公はじめより也
- をしなべて 内侍などのなみに也
- うへみやづかひ 御そばにてふた召つかはせし
- きはには 御心よせ
- おほえ 世上のおもはく也
- やんごこなき うちあがり大權に也
- 上すめがし 上臈めかし也
- わりなく たゞ一すちに也
- まつはさせ まづはさせ
- とぐるめまいらせ也

何事にし  
 何事によらず也  
 ふし／＼  
 節々也  
 おほこのごもりすぐし  
 御殿なりすくし也  
 さふらはせ  
 つとめておはしませ  
 もてなさせ  
 めしつかはせ也  
 心ここに  
 別してのお心よせに也  
 ばうにも  
 春宮にも也

心給ふべき  
 たてまさせ給ふべき也  
 さるべき  
 さあるべき也  
 伊へある事  
 わけある御用事也  
 まうのほらせ  
 参上させ也  
 やがて  
 やはりそのまゝに也  
 あながちに  
 ひしこ也  
 かるきかたにも  
 かるくしきかたにも也

おもほしききて  
 おほしきだめさせ也  
 ようせすは  
 わるうしたならば也  
 一のみこの女御  
 こうきでんの女御也

人よりさきにより

ましてやらんかたなしまで

弘徽殿の女御は、たれ／＼よりもさきにまいらせ給ひて、帝の御深切なるおぼしめしなら  
 ぶべきかたなく、御子がたも、男女どもにおはしませば、此御かたの、御嫉妬ふかき御異

見をのみ、帝はお氣のどくにて、畢竟は、今御子や御息所の御身のうへまでも、御苦勞  
 にぞおぼしめしける、御息所は、かたじけなき御かげをばたのもしき事におぼしけれども  
 たゞおとしめかるしめ給ひ、何哉疵を見出さんと、事哉笛ふきたがらせ給ふ御かた／＼に  
 おほかるに、その御身は猶病氣づかせ給へば、よは／＼しくなりまさり、諸事うき／＼しき  
 御事もなく物はかなき風情になりゆかせ給ふも、御寵愛のふかきか、かへつて物おもひのた  
 わにてぞありける、御息所のおはします御つばねは桐つばね也、これは御殿より丑寅の方の、  
 とつと末のお部屋にて、あまたの御かた／＼の御つばねの前をば、是非どもに通らせ給ふ道  
 すちなるを帝かの御つばねへ入御なさる、御行かよひの切／＼なるにつけても、人々お心  
 をつくさせ給ふは、げにもつともやとぞみえにける、又息所の参上させ給ふ事の、あまり  
 しげ／＼なるおり／＼は廊架や、又はきりめ椽つたひの道すぢにわたしたる、板ばしのうへ  
 などこゝかしこに、何やらしれぬむさき物を、まさちらしなどして有ければ、御をくりむか  
 への女房など、おもひかけすそなどをよこして、こらへがたく腹だ／＼しき事も、さま／＼  
 とよからぬ事ごものありけるに、又ある時は、廣椽ごをりのごちへもはづしゆくべきぬけ道  
 もなきかよひ路を、御息所のとをらせ給ふおりをねらはせ給ひ、お格氣仲間のお女中がた  
 あちらとこちらと心をあはせて、あどさきの戸をさしこめ、かけがねしりさすなごをかた

めて、あかざるやうにし給ひつゝ、難儀せさせまし、恥辱をあたへ給ふやうなる時もおほかり、此外にも事にふれおりにつけては、くるしき事のみかすくまされば、御息所は、何ともなさるべきやうもなく、きつうめいわくせさせ給ふを、帝もきこしめし、らせ給へども、おぼしめしにもまかせ給はねば、いさしくあはれなる物におぼしめして、さかく通路の遠きゆへに、さやうの事ども、あるにこそと、御丁簡まし、て、後涼殿といへる御つばねに、前かたよりおはせまし、更衣の御かたを、外のお部屋へうつしつかはさせ給ひて、此跡つばねの御前ぢかなるを、御息所の御休息の部屋になさせ給ひけるほどに、その入れかへられさせ給ふ御かたは勿論、その外の御かたも、ともに、あまりとてはきやうこつなるなされやうやとて、その恨みましてやらんかたぞなかりける

- 人よりさきに
- たれよりさきに也
- やんごとなき
- 御深切なる也
- なべてならず
- ならふべきかたなく也
- 御いさめのみ
- 御いけんのみ也
- わづらはしく
- おきのどくにて也
- 心ぐるしう
- 御くらうに也
- かしこき
- かたじけなき也
- たのみきこえ
- たのもしき事に也
- きすをもさめ
- きすを見ださんさ也
- かよはく
- よはしく也
- ありさまにて
- ふぜいに也
- 中なる
- いへつて也

- すまひせ
- こならせ也
- ひまなき
- 切なる也
- 御まへわたり
- 御ゆきかよひ也
- こそはりき
- もつともやこ也
- まうのほり給ふ
- 参上させ給ふ
- うちしきる
- しげなる也
- うちばし
- さりめえんづたひの遣すぢにわ
- たしたる板ばし也
- わたごの
- らうか也
- あやしきわざをしつ
- 何やらしれぬむさき物なまきぢ
- らし也
- たへがたう
- こらへがたく也
- まさなき事
- よからの事也
- えさらぬ
- どちへもはづしゆくべきめけ道
- めだう
- 廣えんごをり也
- こなたかなた
- あちらこちら也
- はしたなめ
- 恥辱をあたへ也
- わづらはせ
- 難儀せさせまし也
- かすしらす
- かすくも也
- いたう
- きつう也
- おもひわびたるを
- めいわくせさせ也
- こらうでん
- 後涼殿也
- もさよりさふらひ給ふ
- まへがたよりおはせさせ也
- ざうし
- つぼね也
- うへつぼね
- 御休息お部屋也

此みこみつになくより  
目をおどろかし給ふまで

此今みこ、はやみつにならせ給へば、ことしは御はかま着せさせまいらせ給はんと、仰

せ事ありて催させ給ふ、これよりさき、一の宮の御はかま着の節、せさせ給ひし御規式に  
 をとらず、御寶藏や、納殿の品々の御をつくして、残る事なく結構にせさせ給へば、そ  
 れにつけても世上の取さたには、いかに御秘藏の御子にても、おはせよ、一の宮とおなじ  
 やうに、しなさせ給ふべき事にはあなじなご、そしりいひふらす事はおほけれども、こ  
 のみこ御成長にしたがひて、御かたちお心ばへの世に有がたく、めづらしきほどに見えさ  
 せ給ふには、帝のこれほどに御大切がりおほしめすも、げに御ことはりやとて、たれとて  
 も、えたねみおとしめ給はんやうぞなかりける、その中にも、物の心しらせ給ふ人々は、  
 かやうなる御かたち人の、世に出させ給ふ事もある物かと、愚痴らしきまでに、目をおど  
 ろかせ給ふもありけり

みこ

今御子也

たてまつりし

せさせ給ひし也

くらづかさ

御寶藏也

いみじう

けつこうに也

およすけておはする

御せいちやうにしたがひて也

かゝる

かやうなる也

あましままで

ぐちらしきまで也

そのとしの夏より

こもりおはしままで

そのとしの夏、御息所は、御心ちすぐれさせたまはで煩らはせ給ふほどに、お里へさがら  
 せ給ひて、御養生をもなされたくおぼしけれども、御いとまさら／＼御免なされず、此  
 年比は、ふらく／＼と不斷お氣おもげにわづらはしかりしを、帝は御らんじなれさせ給ふま  
 らに、さだめて持病のおこりたるならんに、先／＼にて養生しつゝ、しばしは見あはせ給  
 へよとのみ、の給ひとめさせ給ふに、一日／＼とお氣しよくおもらせ給ひて、たゞ五六  
 日の間に、この外よりはりくたびれさせ給ふ、母北のかたおどろきて、何とぞ御いとま御免  
 あそばしなば、里へさげさふらひて、祈禱などもいたし見たうこそと、なく／＼奏し申させ  
 給へば、御ゆるしなされるべきよしなりけるほどに、お里さがりの用意あり、かやうのおり  
 からも又いかやうの恥がましき目をもやみんと、御息所はお氣つかひなされて、御子を  
 は禁中にそのまゝとやめをき奉り、あまり目だ／＼ぬやうにしてと、お支度せさせ給ふ、帝  
 はいろ／＼とおぼしめぐらさせ給へども、御心ぞへもかぎりあれば、さのみもえとやめさ  
 せ給はず、たゞ送すがら御らんじ送らせ給はぬ事の、お心もとなさをおぼすにも、今はは  
 や、かゝる御心の内をも、仰せきかさせ給ふべきやうもなき御病躰なれば、お心ばかりに

おぼしなげかせ給ふ、いとつや／＼とうつくしげなりし御顔の、そげ／＼とさつうやせお  
 ころへさせ給ふが、今さらかく帝に引わかれ奉るべきかなしき、又御子をふりすて奉りて  
 出ゆかせたまはん事のおのこりおほさなど、かれこれ取あつめつゝ、いごあはれと物を  
 おもひしみさせ給ひながら、いひ出給はんお力もなく、あるかなきかの風情にて、消入  
 りつゝなげき給ふていなるを、帝は御覽せさせ給ふにこしかたも行末もどかくとおぼしめ  
 しわかせ給はず、たゞさしあたる事のみ、なく／＼ちぎりの給はせられども、それをさへ  
 御返答をも、え申させ給はぬに、御目もとも殊の外たるげにて、いと／＼なよ／＼とよはら  
 せ給ひ、われかあらぬかのけしきにてふし給へば、帝はおどろかせ給ひて、いかゞした  
 ならばよからんと、おぼしまごはせたまふにも、せめての事にとて、手ぐるまゆるさせた  
 まうよしの、宣旨までをなしくだされても、又ふしごへ入御ありては、出しやらせ給はん  
 事、おのこりおほくおぼしめすにぞ、さらに猶ゆるさせ給はず、常／＼もかぎりあらん道  
 にも、おくれさきだゝじとちぎらせ給ひし物を、さりとて／＼、かくうちすてゝはえゆき  
 給はじと、御涙とともへの給はすれば、御息所も、いとかなしき事と見奉りて

かぎりどてわかるゝ道のかなしきに  
 いかまほしきは命なりけり

此歌はたゞ今わかれ奉らば、これぞかぎりならん、かくかぎりと思ふわかれの道に、いくといふ事はこのむ  
 べき事にはあらねど、帝のかやうにまで、御なげきおぼしめしたるゝにつけても、命ばかりはいきなき  
 ものにさふらふ、何ぞ此たびの病氣ほんぶくいたして、今一たび、何かの御厚恩をもほうじ奉りたくこそ  
 ぞくれ／＼御なごりをおし給ふ心歎、いかまほしきは、いきながらへたきといふ事活と往とをそへたる也

けふ此ごろ此やうにさしつまり、今をかぎりのていになるべしとおもひしりたらまし  
 かば、何ぞぞ覺悟のしかたもあるべかりし物をと、おぼしたるていながら、御いきも絶  
 ばかりなるにも、まだ何やらん申しあげたさふなる事ありげなれども、いとくるしげにて  
 引入るばかりたるげに見え給へば、里へさげさせ給ふまでもなく、たゞ此まゝにて、ども  
 かくもなりはてたまはんを御らんじはてんと、一すぢに帝はおぼしめしたれども里にては  
 今日よりはじむべき祈禱を、名ある験者のあじやり法印などたのみをき、今よひよりはや  
 催しさふらふのよしを、しきりに奏し給ひけるほどに、是非なくおぼしながら御ゆるしあ  
 りて、里へさげさせ給ひけれども、御むねもひつしりとふたがりて、露の間もまごろませ給  
 はず、あかしかねさせ給ふまゝに、御つかひの間もなく行ちがふほごをさへ、お心もとな  
 うおぼつかなくおぼしめしつゝ、いかゞあるらんとかぎりなくの給はせつるに、里にては  
 夜なか過ぬる比、つゝにたえはて給ひぬるとてなきさはげば、御使の人々も、手もちなう

かへりまいりて、事のよしを奏し奉りしかば、きこしめし給ふ御心まごひには、何事もおぼしめしわかで、なげきしづませ、引こもりてぞまし／＼ける

はかなき心ちに

御心ちすぐれさせ給はで也

まかでなんぞ

お里へさがらせ也

さらに

さら／＼也

ゆるさせ給はず

御免なされず也

つれの

ふだん也

あづしさに

お氣おもげに也

御めなれて

御らんじなれさせ也

心みよこのみ

見あはせ給へよこのみ也

日々に

一日／＼也

ほごに

間に也

よほうなれば

よほりくたびれさせ也

まかでさせ奉り給ふ

お里さがりの用意也

かゝるおりに

かやうのおりからも也

あるまじきはちよこそ

いかやうのはちがましき目をも

心づかひして

お氣づかひなされて也

しのびてぞ

目だゝのやうにして也

おぼつかなきを

お心もこなきを也

いふかたなく

御せきかさせ給ふべきやうもなき也

いたう

きつう也

おもやせて

そげ／＼させおそろへ也

こまにいでよもきこえやらす

いひ出給はんお方もなく也

ものし給ふを

なげき給ふていなるを也

きしかた

こしかた也

御いらへも

御返言をり也

きこえ給はず

申させ給はず也

まみ

御目も也

たゆげにて

たるげにて也

われかのけしきにて

われかあらぬかのけしきにて也

いかさまにか

いかどしたならば也

又いらせ給ひては

又ふしごへ入御ありては也

さりとも

さりとも／＼也

えゆきやらじこ

えゆき給はじこ也

いろじこ

かなしき事也

かく

此やうに也

おもひ給へましかば

おもひしりたらましかば也

きこえまほしげなる

申しあげたさうなる也

たゆげなれば

たるげに也

かくながら

此まゝにて也

いのりごも

きたうを也

さるべき人々

名あゝ験者のあじやり法印など也

きこえいそがせば

しきりに奏し也

わりなく

せひなく也

まめでさせ

里へさげさせ也

つこ

ひつしりさせ

つゆ

つゆの間も也

ゆきかう

ゆきちがう也

ほごなきに

間もなく也

いぶせきを

お心もこなうおぼつかなく也

あへなく

手もちなう也



みこはかくてもより

あはれにいふかひなしまで

御子をば、此まゝさしをきまいらせても、御らんせたくおぼしけれど、かやうなる御穢のせつ、禁中におはしませ給ふ例のなき事なれば、せひなくて、里へさがらせまし給ひなんど、かれこれ御したくあるを、御子は、今年みつにならせ給へば、まだ何の御わかまへもおはしませず、なにゆへかやはする事とおぼさねば、女房たちのなきまごひ、帝も御涙のひまもなくむせばせ給ふを、御ふしんげにのみ見めぐらせ給ふ、惣じて常ていの、さまでもなき時の事にてだに、おさなき御かたなどの、引はなれさせ給ふおりのかなしからぬ事はなきものを、ましてや、此節のかやうなるはあはれもふかく、何をいふてもせんなき事にこそ

かくても

此まゝさしをきまいらせても也

御らんせまほしけれど

御らんせたくおぼしけれど也

いふほどに

かやうなる御けがれのせつ也

さふらひ給ふ

おはしませ給ふ也

まかで給ひなんご

里へさがらせまし給ひなんご也

何事かあらんごもおぼしけしらす

何ゆへかやはする事とおぼさ

さふらふ人々の

女房だちの也

ひまなくながれ

ひまもなくむせばせ也

よろしき事だに

さまでもなき時の事にてだに也

かゝるのわれ  
おさなき御かたなどの引はなれ  
させ給ふおりの也  
いふかひなし

うへ  
帝也  
あやしご  
御ふしんげに也

かぎりあればより

かゝるをりにやとみわたりまで

さらぬわかれの残りおほさは、いつまでもつきせぬ、物ながら、かぎりある事なれば、御息所の御遺骸を、例の作法に葬送しまいらせ給ふ、母北のかたは、おなじ煙にもたちのぼりなると、なきこがれ給ひつゝ、御送り供の女房の乗し車に、跡を追ひのり給ひて、おたぎといふ所に、取りおきまいらす様子結構にかこひなしたるに、ゆきつき給ふ心の内、いかばかりかなしかりけん、むなしき御からよと見ながらも、猶まだいきておはする物のやうにおもはるゝも、何のやくにもたゝぬ事なれば灰になり給はんを見まいらせて、今は此世になき人よと、一向におもひきりてんと、心づよさふに母人はの給ひつれども、車よりも落給ひぬへくなきまごひ給へば、さてこそさうあらんごもおもひつれどて、ありあふ人々もてあつかひかねたり、しかる處に、禁裏より三位の位階を贈りくださるゝのよし、勅

使ありて、その宣命よみあげ給ふも、かなしき事のかぎりなりけり、是は帝の御心に、御息所御存生の内に、女御とだにいはず給はざりしを、事たらず御残念におぼしめさるゝほどに、せめて此節なりとも、今一階の位をだにすゝめくだし給はらんとてをくらせ給ふ也けり、これにつけても又、そのぬみにくみ給ふ人々ぞおほかりける、その中にも、物の了見をもし給ふて、心ざしある御かたは、御息所の御様かたのあいらしく、お心ばへのむくやかに、さら／＼としたるお氣ばへにて、にくげなかりしなど、今さらおもひ出給ふも有けり、たゞ帝の御寵愛なされしさまの、あまりきはたゞしかりしゆへにこそ、よりそひもなうそねみ給ひしか、その御人がらのしほらしく、なさけふかくおはせしを、禁裏の女中などは、戀ひしのびていひ、出あへり、ある時は、ありのすさびにくかりき、なくてぞ人はこひしかりけるとは、かゝるおりにやとぞみえたる

かぎりあれば  
かぎりある事なれば也  
おさめ  
葬送也  
したひ  
跡を追ひ也

いかめしう  
様子けるこうに也  
そのさはうしたる  
かこひなしたる也  
おは、つきたる心ち  
ゆきつき給ふ心の内也

みるく  
見ながらも也  
かひなければ  
何のやくにもたゝぬ事なれば也  
ひたふるに  
一向に也

おもひなりなんぞ  
おもひきりてんま也  
さかしう  
心づよさうに也  
おちぬべう  
おち給ひぬべく也  
さばおもひつかし  
さてこそさうあらんまおもひつ  
れ也  
もてわづらひ  
もてあつかひかれ也  
うち  
禁裏也  
みつのくらゐ  
三世也

御つかひ  
勅使也  
あかす  
事たらず也  
くちおしう  
御残念に也  
今ひまきさみ  
今一階也  
物なもししり給ふ  
物の了見をもし給ふて也  
めでたかりし  
あいらしく也  
なだらかに  
むくやかに也

めやすく  
さら／＼としたる也  
さまあしき御もてなし  
なされしさまのあまりきはたゞ  
りし也  
あはれに  
しほらしく也  
にくみがたかりし  
にくげなかりし也  
すげなう  
よりさひもなう也  
うへの女房  
禁裏の女中也

はかなく日ごろより  
なををどりけりまで

はかなきながら日敷の過ゆくまゝに、七日／＼の法事なども、帝より御心こまかにとふらはせ給ふ、程ふるにしたがひて、せんかたなかなしうのみおぼさるゝにつけても、女御

更衣の御かたの、お泊り番なども絶て仰せつけられず、たゞ御なみだにひたりて、あ  
 かしくらすせたまへば、見奉る人までも、袖の露けき秋也けり、弘徽殿などにては、さて  
 くなきあごまでも、人のむねふたがり、小ばらだしきおぼしめしの人かなやと、御  
 息所の御うはさを、猶ゆるしなくにくらしげにぎの給ひける、帝は、一の宮を見まいらせ  
 給ふにつけても、かの若宮の御事、御懸しうのみおぼし出させ給ひつゝ、御息所のお部屋  
 にて、したしく召つかはせ給ひたりし女房などを若宮の御もとへつかはされ、又わか宮の  
 御めのを召よばせ給ひなごして、御機嫌をきこしめしつゝ、せめてなくさめませ給ふ、  
 野わきの風吹たちて、にはかに又さむくなりにし夕くれほど、つねよりもいと、おぼし  
 めし出させ給ふ事もおほくて、ゆげいの命婦といへる女中を、若宮の御かたへつかはさ  
 れんとて、夕づく夜の景氣ほのなかるに、出しつかはさせつゝ、そのまゝにてながめおほ  
 しまさせ給ふ、まへへ此やうなる月かげなどのおりから、御あそびごとなごせさせ給ひ  
 しにも、かの御息所は、琴わごんなどの音もめづらしき手をかきならし、かりそめのやう  
 にいひ出給ふ歌なども、人よりは格別なりし様子ありさまの、おもかげにひつしりと立そ  
 ひて、おゆかりしきものにおぼさるゝにも、やみのうつゝはさだかなる、夢にいくらもま  
 さらぬとよみし歌もあるに、これは又おもかげばかり残りたれば、其間のうつゝにさへ、

猶をとりたりけりと、おぼしなげかせ給ふ

日ころすきて

日やすの通ゆくまゝに也

のちのわざ

七日の法事也

ほどふるまゝに

ほどふるにしたかひて也

御とのゑ

御さまり番也

ひちて

ひたりて也

むれあくまじかりける

むれふたがり也

御おほし

おほしめし也

ありさまを

御容態を也

はたさむき

又さむくなりにし也

おかしきほどに

けいきほのかなるに也

やがて

そのまゝにて也

かうやうの

此やうなる也

心こなる

めつらしき手を也

もの、ね

琴わごん也

ばいなく

かりそめのやうに也

きこえいづる

いひ出給ふ也

ここのはも

歌なども也

ここのなりし

格別なりし也

けはひかたち

やうす有様也

つとそひて

ひつしりきたちそひて也

命婦にかしこにより

奉り給はぬ也けりまで

命婦は、母北のかたのもとへ行つきぬれば、門の内へ車を引入るより、ありしにかはりし

宿のやうす、あはれにぞおぼえける、此母人、やもめすみにて居給ひしかども、此年比は御息所お一かたの御外聞といひ、又お里さかりの時分、御氣のばしのためにもなごおほせば、さしてつくりみながくにも及ばぬ住居ながら、とかくどつくりひなし、見つきよくしてすぐし來り給ひつるを、子ゆへのやみにかきくれて、嘆きしづふし給へるまゝに、たれ取はからふ者もなく、庭も軒端も草たかくなりそひて、此ほどの嵐に、いとどあれまさりたる心ちもして、物さびたるていなるに、月影ばかりは、八重葎にもかまはでさし入りたり、命婦の車を、南おもてに引よせて、おろしまいらせたるに、母北のかたも涙にくれて早速にはえ物もの給はず、しばしありていひ給ふは、かく只今までいきどまりさふらふがいとうき事におもひはべるを、かやうなる御使の、かくうづもれたる蓬生の露を、わけ入り給ふにつけても、はづかしうこそさふらへとて、まことに命もえこらへがたげにて、消入るやうになき給ふ、命婦申し給ふは、此ほど内侍のすけの、こゝもこの御うはさを奏せさせ給ひしは、禁中にてきさふらふまでにてさへ、御笑止やおもひやられしを、こゝ許へまいりて御有様を見れば、いと心ぐるしう、心も肝もうせはつるやうになんと申しあげ給ひし、其節はよそ事のやうにきさふらひしを、今まいりて見まいらすれば、まことに何もわきまへしらぬわらはが心にさへ、いとこらへがたうこそはべりければ、

とて、涙にむせびつゝ、しはしがほどはさしひかへて物もいひ出さず、やゝありて、帝よりの仰せ事をいひのべ給ふやう、御息所にをくれさせ給ひ、その砌しばしがほどは、はかとのみおぼしうたがはせ給ふに、そろ／＼お心のしづまらせ給ふにつけて、おもひめぐらせ給へば、まことの永きわかれるほどに、夢ならばさむるといふ期もあるに、これは夢ならねば、さむべきかたもなく、かなしみのお心のこらへさせがたきをも、これはどうしたるものぞとも、問ひあはさせ給はん人だになきを、そこにもさだめて、なげきしづみ給ふにてはあるべけれど、たゞうきをこらへて、参内し給ふまじや、若宮の御事もお心もこなく、露しげき草よもぎの中にすぐさせ給ふも、御心ぐるしうおぼさるれば、そこにもかきにも、とくつれましてもまいり給へかしと仰せられても、又御涙にむせばせ給ふほどに、しつかりともえの給ひつゝけさせ給はず、畢竟は、御前に居給ふ人々の、お心よはげに見奉らんかと、お心づかひなされて、ひかへさせ給ふ御けしきを、見あげ奉るも、いかほどか／＼心ぐるしうさふらひしほどに、仰せごとをうけたまはりもはてぬやうにてなん、まかりこしはべりぬるよとて、涙ながら御ふみをさし出せば、おは君をしいたゞきて、かゝるおもひにかきくれさふらへば、今ははや目もみえはべらねど、かくかたじけなき仰せごとをひかりに、おがみ奉んとてひらきて見給ふ、勅書に、程をもへなば、すこしはうち

まぎる、事もやど、いつをはかりとはなけれど、まつ事のやうにしてすぐし行月日にそへて、いと戀しさのこらへがたきぞ、せんかたなき事になん、おさなき人も、いかにして過し給ふやおもひやるにも、母更衣の存生ならましかばとおもふにつけても、もろどもに養育せぬ事の、行末かけておぼつかなくなしきに、今はたゞ、若宮を、かの人のかたみぞとよそへて、見そだて給へなご、こま／＼どか／＼せ給ひて

宮ぎ野のつゆふきむすぶ風のをどに

こ萩がもごをおもひこそやれ

此歌は、みやぎの宮の字を宮中によそへ、こはぎの小の字をみこになすらへて、此やうにあら／＼しく風もたち、じぶんがら夜さむにもなりゆくに、宮中にてさへ、なみだのつゆのむすぶばかりなるを、ましてわか宮の、あれたるやまにましませば、すまの風にもひき給はずや、きげんはいか／＼おはすやま、お心もさなくおほしやるよしをのたまふ心歎

とあるを、おば君はえ見はてもやらで申し給ふは、かく命ながらうて、かゝるうき目を見さふらふこそ、いとつらくかなしうおもひあはせさふらふにも、かやうにながらへてあるものと、しられ奉るさへ、高砂の松のおもはくも、はづかしうおもひはべれば、ましてや今更、禁裏へ御出入つかまつらん事は、はゞかりおほき御事にぞさふらふ、おそれおほき仰せごごを、たび／＼うけたまはりながら、参上申さる事もいかゞしくはさふらへごも。

右申すとをりにはべれば、わたくしの身はあがり申す事え存じたつまじきにこそ、若宮の御事は、此ほど内も、何とおぼしめすお心にか、まいらせ給はん事を、いそきおぼしめすやうにみえさせ給ふも、かゝる物さびしき御すまゐを、なれさせ給はぬにはど、げに御ことほりやどかなしう見奉りはべる、それゆへ、若宮の御参内の事は、かね／＼もぞんじよりておりたてまつるのよしなど、よろしく奏せさせ給へ、わたくし事、かくいま／＼しき身にはべれば、若宮の此とをりにて御逗留おはしますも、おそれおほくもつたいなき事におもひさふらふなど申し給ふ、若宮はとくと御寝なりてぞおはしける、命婦申されるは、わか宮の御目さめさせておはしましたば、御機嫌をもうたがひ見奉りて、くはしく御有様をも奏しはべらまじけれど、とくとねいらせ給ふをば、おこし奉らんもいかゞにはべる、又帝にも、さだめてお返事を待かねさせおはしますらん、かれこれいたしたば、夜ふけさふらひなん、もはやかへりはべらんとていそぎ給へば、おば君申し給ふは、かくとはうにくれまごひさふらふも、子をおもふ心のやみの、こらへがたきかたはしをだに、せめていひ出でたりとおもひをもらしたう、何かの御物がたりをもいたしたくはべれど、今夜は御使の事なれば、いとさう／＼にこそさふらへ、その内御見あはせ、御私用にて御退出の節、心しづかに、おかたりさふらふやうに、一日御こし給はり給へかし、更衣の存生の

内敷年の間は、いつとても物うれしく、仕合せよき事をき、まいらすつゝの時分にのみ、そこにはたちよらせたまはりしものを、かやうなるよろしからぬ御使にて、お目にかゝりさふらふにつけても、とくにうせはてはべらば、かゝるうきせにはあひまいらせまじきに、かへすくもしふとき命にもこそさふらへ、事ながくはべれど、かのうせにし人の事は、むまれし時より、父大納言のおもふ心ざしありて、臨終の節までも、たい此人の御奉公の事、わがおもひのぞみし本意をかならずとげさせよ、われなくなりたりとて、心よはくおもひ退屈して無にするなよとて、かへすくく遺訓しをき給ひしかば、しかどしたるうしろだての人もなきつきあひは、なままたつとめがたかるべき事とおもひながら、たいかのゆいごんをたがへじとばかりにて、御奉公にさし出しはべりしを、身にもままるまで、よろづにかたじけなく、有がたき御心ざしに、人がましくもなき恥をも見かくしつゝ、まじらひ給ひたりつるを、人のねたみそねみもふかくつもり、氣づかはしき事とおほくなりそひつゝ、人しれぬ苦勞ゆへ、非業のやうにて、つゝにたくなりゆき給ひぬれば、ちか比愚痴なる申しごとなれども、帝のかくおぼしめしかゝらざりせば、かうはあるまじきものをと、今更御心ざしを、かへりてはつらきものにおもひはべる、これとても、せんかたなき心のやみのまごひにてなご、いひもはてず、むせかへりなきしつみ給ふほどに、

夜もふけたり、命婦も、げにもつともやと、ともになみだにむせびつゝ申し給ふは、そこにおぼしめしやうに、帝の御心も、さやうにぞおはします、常にの給はせ給ふは、おぬしの御心ながら、しゐて人目おごろかしきほどに、御不便がらせ給ひしも、かくなかくそはせ給ふまじきはしこと也けりと、今になりては、つらかりし人の御ちぎりぞとなん、おぼしくやませ給ふ、惣じて世の中の事につけては、随分御正路に、お心をくばらせ給ひ、すこしにても、人の上にて、無理非道なる御事はあらじとおぼせしに、だゝ此人ゆへに、さもあるまじき、あまたの人のうらみをもおはせ給ふ、あげくのはてには、かうちすてられてわかれさせ給ひぬれば、お心をもおさめさせ給ふべきかたなきに、いと人目わろく、かたづまりたるお氣になりはてさせ給ふやうなるも、いかなる事をちぎりけんと、御前生のことまでゆかしうなると、うちかへしつゝ、御しはたれがちにのみ、おはしますどかたりいで、なくくつきせぬものがたり、夜もきつうふけゆげば、明日と申せば延引にさふらふほどに、今宵の内にお返事を奏し奉らんには、いそぎでぞ参りはべらんとて、月は入りかたの空きよくすみわたれるに、風いと涼しくふきて、草村ごとのむしのこゑく、あはれを催しがほなるも、命婦はきゝ給ふにつけて、たちはなれがたき草のもとなれば

鈴虫のこゑのかぎりをつくしても

ながき夜あかすふる涙かな

此歌は、かゝるあはれなる御すみかまいりて、そなたのお心のほどを、きまいらするにつけても、すゞむしこゑにも、こゑのつゞくかぎり、なきつくすまはおもへども、かくなき此の夜をさへ、まだなきたらのばかりに、なみだのふりいでさふらふぞやさいふ心歎 あはすは、たらの也

とて、車にものりかね給ふに、おぼ君

いとしく虫のねしげき淺茅生に

露をさそふる雲の上人

此歌はさうなくてだにかやうなるあさぢふのやごにこまりて今のなげきにおもひしづみさふらへば此しむのれのしげきにさへおりにふれ事にそへたるおもひのやるかなきさかなしみにしほれてくらしはべるをかく雲のうへ人のこはせ給ふはなみだのつゆをいとゞ雅になきそへさせ給ふにてこそあれさいふ心歎

かくかたじけなき御使を、かやうに申すも、何とやらかこちがましうもきかせ給はんかなれども、今わたくしの此身には、今夜の御こしをも、あまりの事にうらめしき物におもひさふらふ心ゆへにてはべれば、よきはごにきゝわけさせたまはり給へと、車まで人していひつかはし給ふ、御使の人へ、興あるべき引出物などすべき時節にもあらねば、たゞかの

人のかたみともおぼし給はり給へ、もしかやうなる事の入用にもやと、あちこち形見くばりいたせし外に、取わけて残しをささふらひしとて、御息所の、御召かへにたくはへさせ給ひし御装束一くだりに、くしかうがいなどとりそへて、さし出し給ふほどに、命婦はうけとりながらも、涙にくれてなくくわかれ出給ふ、若宮に御つきくのわかき女房たち、かなしき事は今さらいふにをよばす、まへく内裏住を、朝夕のならばしにて、ごやくやどにぎやかにくらしなれにし心どもには、かゝる住居をいとさびしき事におもひ、又は帝の御有様なども、御ゆかしき物におもひ奉りつゝ、仲ヶ間どしかたりあひて、若宮のごく御まいるの事を、ひたどすゝめたて申し給へど、おぼ君は、かくいまくしきわが身の、相そひてまいり奉らん事も、人ぎゝも心うく、さればとて又、御子の御まいりのお跡にては、しばしも見たてまつらであらんも、心もどなるべしなごゝいひ給ひて、え早速にもまいらせ給はぬ也けり

かしこに

母北のかたのもとへ也

まかでつきて

ゆきつきめれば也

かど引いるゝより

門の内へくるま引いるゝより也

けはひ

様子也

人ひとりの

御息所おひとかたの也

御かしづきに

お氣のばしのために也

つくるひたて、  
 つくるひなし也  
 めやすきほどに  
 見つきよくして也  
 やみにくれて  
 子ゆへのやみにかきくれて也  
 のわきに  
 あらしに也  
 さはらず  
 かまはて也  
 とみに  
 早速には也  
 とまり  
 いきとまり也  
 かゝる  
 かやうなる也  
 げに  
 まことに也  
 えたうまじく  
 命もえこらへがたげにて也

ない給ふ  
 なき給ふ  
 心きもつくるやうに  
 心もきもつるやうに也  
 物おもひ給へしらぬ  
 何もわきまへしらぬ也  
 しのびがたう  
 こらへがたう也  
 や、  
 しばしがほど也  
 ためらひて  
 さしむかへて物えいひ出づ也  
 つたへきこゆ  
 いひのべ給ふ也  
 さざられしを  
 おぼしうたがはせ也  
 やうく  
 そろくも也  
 たへがたきは  
 こらへさせがたき也

いかにすべきわざにかさも  
 これはどうしたるものぞとも也  
 しのびては  
 うきをこらへて也  
 まいり  
 参内也  
 おぼつかなく  
 お心もとなく也  
 つゆけき  
 つゆしげき也  
 はかんしうも  
 しつかりとも也  
 のたまはせやらず  
 の給ひつゞけさせたまはず也  
 むせかへらせ  
 御なみだにむせばせ也  
 かつは  
 畢竟は也  
 おぼしつゝまぬにしもあらぬ  
 御心づかひなされてひかへさせ給  
 ふ也

まかで  
 まかりこし也  
 かしこき  
 かたじけなき也  
 ほごへば  
 ほごなもへなば也  
 まぢすぐす  
 まつことのやうにしてすぐしゆく  
 也  
 しのびがたきは  
 こらへがたき也  
 わりなきわざ  
 せんかたなき事也  
 いはげなき人も  
 おさなき人も也  
 はぐまぬ  
 やういくせぬ也  
 むかしのかたみに  
 かの人のかたみぞも也  
 なすらへて  
 よそへて也

こまやかに  
 こまんとも也  
 おもふ給へしらるゝ  
 おもひあはせさふらふ也  
 松のおもはんことだに  
 松のおもわくも也  
 もしきに  
 禁裡へ也  
 ゆきかひはべらん  
 お出入つかまつらん也  
 かしこき  
 おそれおほき也  
 みづからは  
 わたくしの身は也  
 おもひ給へたつまじき  
 存じたつまじき也  
 いかにおぼししるにか  
 なにさおぼしめす御心にか也  
 うち、くにおもひ給へるさまな  
 かれんくも存じよりており奉るの  
 よし也

ゆゝしき  
 いまゝしき也  
 かくて  
 此とをりにて也  
 いまゝしう  
 おそれおほくも  
 かたじけなく  
 もつたいなき事に也  
 おほとのもり  
 御しんなりてぞ也  
 たへがたき  
 こらへがたき也  
 はるゝばかりに  
 おもひなもはらしたう也  
 きこえまほしう  
 御物がたりなもいたしたく也  
 わたくしにも  
 御私用にさ也  
 心のどかに  
 心しづかに也



まかで給へ  
 御退出也  
 としごろ  
 数年の間は也  
 おもたゞしき  
 仕合せよき事をきまいらする也  
 かる御せうそにて  
 かやうなるよろしから御使也  
 見奉る  
 御目にかゝり也  
 つれなき  
 しぶさき也  
 いまはさなるまで  
 修繕のせつまでも也  
 宮つかへ  
 御奉公の也  
 ほん  
 本意也  
 くちおしう  
 心よはく也  
 おもひくづおるな  
 たいくつして無にするな也  
 いさめ  
 遺訓也  
 はかしくしう  
 しかとしたる也  
 うしろみおもふ  
 うしろだて也  
 まじらひは  
 つきあひは也  
 中なるべき  
 なまなかつとめがたかるべき也  
 出したて  
 御奉公にさし出し也  
 人げなき  
 人がまじくもなき也  
 かくしつゝ  
 みかくしつゝ也  
 やすからぬこと  
 氣づかはしき事也  
 よこまなるやうにて  
 ひごうのやうにて也  
 わりなき  
 せんかたなき也  
 いひもやらず  
 いひもはてす也  
 うへ  
 みかさ也  
 しかなん  
 さやうにぞおはします也  
 わが御心ながら  
 お主の御心ながら  
 あながちに  
 しめて也  
 おぼされしも  
 御ふびんからせ給ひしも也  
 ながるまじき  
 ながくそはせ給ふまじき也  
 今は  
 今になつては也

いさゝかも  
 すこしにても也  
 人の心を  
 人のうへに對して也  
 まげたる  
 無理非道なる也  
 さるまじき  
 さもあるまじき也  
 はては  
 あげくのはてには也  
 人わろう  
 人めわろく也  
 かたくなに  
 かたづまりたる御氣に也  
 さきのよ  
 御前生也  
 いたう  
 きつう也  
 こよひすぐさす  
 こよひの内に也  
 えものりやらす  
 車にもりかれ也  
 かごと  
 かこちがまじうも也  
 おかしき  
 興あるべき也  
 御をくりもの  
 引出もの也  
 おりにも  
 時節にも也  
 かる  
 かやうなる也  
 ようもやま  
 入用にもやま也  
 さうぞく  
 お装束也  
 みくしあげのてうどめくもの  
 くしかうがいなど也  
 人々  
 女房たち也  
 さらにもいはす  
 今さらいふにまよはず也  
 内わたりを  
 内裡すみをも  
 ならひて  
 ならはしにて也  
 さうんしく  
 さびしき事に也  
 うへ  
 帝也  
 きこゆれば  
 かたりあひて也  
 そゝのかし  
 すゝめたて也  
 うしろめたう  
 心もとなかるべし也  
 すかしくとも  
 さつそくにも也

命婦はまだより

さゝめきなげきけりまで

命婦は、かへりまいりて御前へ出たるに、まだ御寝ならせられず、待て御座なされけるを、あはれの御事やと見奉る、お前の御つぼの内の、秋のけしきのいとおもしろきさかりなるを、御らんするやうにて、お座敷にひつそりとして、たゞ年こばひおとなしき女房、四人相つめさゝせ給ひて、御物がたりなさせたまふ也けり、此ごろあけくれに御らんするは、長恨歌の御繪に、亭子院の帝の御歌をかゝせ給ひ、伊勢つらゆきにもよまさせ給へる歌なども、又もろこしの詩なども、たゞ此たびの御わかれの、かなしとおぼしめすそのすちの心なるをぞ、ふだんの御口すさひにせさせ給ふ、命婦を御らんじて、いとこまやかに有様を問はせ給ふに、母北のかたのてい、其はなしのやうすなどの、あはれなりつる事どもを、しのびやかに奏し奉るお返事を御らんずれば、いとおそれおほき御心ざしはをき所もなく、かゝる仰せ事をいたゞき奉るにつけてもかきくらすみだり心ち、やるかたなうこそとて

あらし風ふせぎしかげのかれしより

小萩かうへぞしづ心なき

此歌は、ふせぎしかげをば、みやす所の御うへにたとへばきを、みこになすらへて、かれこれと大切に、必おそだて申しまいらせ給ひし人の、かれうせしより、あらし風をもふせぐべきかけなければ、みこの御身のうへは、こはぎを風の心まゝにふきしほるがごまくに、しづかなる御こゝちもおはしまさぬ也といふ心歎、しづ心なきはしづかなる心のなき也

など、文字のくだりもそろはず、かきちらし給ふをも、まだ心のおちつかざるゆへぞとおぼしめして、あはれの事やと御らんじゆるさせ給ふにつけても、かくお心よはげなる御風情を、人々にかうとも見られじとおぼしめして、御心をしづめさせ給はんとせさせ給へど猶更にあこらへまぎらはしかなせ給ふ、かの御息所を御らんじはしめし、年月の事をさへ、とりあつめよろつにおぼしめしつゞけさせ給ふにも、ちとの間も見えたまはねば、何をして居給ふぞとお心もとなうおぼせしに、かくわかれさせ給ふても、月日はすぐさるゝもの也けりと、御手にもたせ給ひたる物をおとさせ給ふやうにぞおぼしめさる、父大納言の遺言をちがへず、奉公の本意ふかくて、そのことをりにはのぞみどげたりしよろこびを、ねがひせんもあるやうに、女御にも引なをさんとおもひし心ざしも、無になりぬる事よどの給ひて、おば君の心の内を、いとあはれにおぼしめしやらせ給ひ、今こそかうありても若宮の成長したまは、しせんは何ぞぞしたる事により、さあるべきつゝめでもあり

て宮中へ出入りもすべきに、命こそ物だねなれ、たゞ長命ならんところ、母はねがふべき事よなど、仰せ給ふ、命婦の形見のしなぐを御らんに入れ奉れば、かのもろこしの方士が、楊貴妃の魂のありかをたづね出たりし、そのしるしのかんざしのごとく、御息所よりのおくり物ならば、せめてなぐさませ給ふべき物をとおぼすもいとせんなし、帝

たづねゆくまほろしも哉つてにても

たまのありかをそこしるべく

此歌は、もろこし玄宗はうてい、やうきひのうせにし事を、戀ひかなしませ給ひて、方士をつかはし蓬萊山にて、やうきひのたまのありかをたづねてかへる時、かたみにとて、べつかうのかうがいを方士に給ひしやうに、今も又方士がごさくたづねゆくものもがな、その御宜にても、みやす所の魂のありかをそんじやうそらでとだに、せめてはしるべきものをさなげかせ給ふ心歎、まほろしとは方士とかく、これは玄宗の御信仰ありし道術者の名也、つてまは、御宜也、たまは、魂也

繪にかきたる楊貴妃のかたちは、上手の繪師じやとても、筆にかぎりのある物なれば、すがたこそ似るべけれど、色つやよそほひまでの匂ひはえかきとらじ、かの白樂天が、大液の芙蓉未央の柳にたとへたるも、げにうつくしさは似かよひて、唐人の目にはうるはしうこそみるべけれど、それは唐装束にて、日本の風俗ならねば、目にもつかず、御息所の

なつかしやかに、あいらしかりし有様をおぼし出るに、花鳥の色にても、音にても、よそへくらぶべきかたぞなき、まことに朝夕の御かたらひぐさにも、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とちぎらせ給ひしに、かくをくれてながらへさせ給ふは、おもふにかなはぬ御命のほごをぞ、つきせすうらめしとおぼししづませ給ふにも、風のをとむしの音につけても、物のかなしとおぼさるゝに、弘徽殿の女御は、久しう上の御休息お部屋へもまいるのぼらせ給はず月のおもしろきに、おぬしの御かたにて夜のふくるまで、うたふつまふつにぎはしくおあそびさせ給ふを、帝きこしめしつけさせ給ひて、あまりなる物ねたみやといとすさましきほどにぞおぼしける、此ごろの帝の御有様を見奉り給ふ殿上人女房など、帝のかほどにおぼししづませ給ふを、いかに女御は、御息所のうせ給ふを御本望におぼして、お心よくおはせばとて、あまり御遠慮もなき事哉、きぐるしやとみな

く、おもひ給ひけり、此女御は、もとよりわがまゝなる御心にて、物ごとつめだちたるお氣質なりければ更衣のうせたればとて、何事かの様にとおぼし消して、かくせさせ給ふなるべし、月もはや入りたりけるに、帝

雲の上も涙にくるし秋の月

いかですむらん淺茅生の宿

此歌は、秋の月のかけさやけきをも、なみだにくもりてひかりもなき心ちするに、雲の上にてさへかくのご  
くなるを、ましてやあさちふのやどには、いかやうにしてかすむらん、さだめてこのながめとおなじなみだに、  
かきくるゝにてぞあらんま、かのおは君の、いとしくむしのれしげきさいひじ、あさちふをおぼしめしやら  
せ給ふ心歎、すむは、澄ま住さにいひかけたる也

と、わか宮やおは君のおはします里をおぼしやりつゝ、ごもし火をかきたてつくして、お  
ささせおはしますに、右近のつかさの夜廻り當番のよしを、申しあぐるころのきこゆるは、  
もはや八つ時になりたるならんに人目もいかゞとおぼして、しぶく御寝間へ入らせ給へ  
ごも、御目はほちくとして、とろく〜とだにおしづまらせ給ふ事もなく、夜あけぬれど、  
御物くさくて起きかねさせ給ふにつけても、ありしむかし、御息所の御そひねの夜床には夜  
のあくるまをもしらでねすごしたりし物をさおぼし出るにも、そのゆきがたはちがひたれ  
ごも、今も猶朝まつり事は御懈怠なさるべくぞみえさせ給ふ、御食事などもすませたまは  
す、朝がれるの供御も御規式ばかりに、ちよつとむかはせ給ふ御ふりまでにて、常の御膳も  
召あげられべき物ともせさせ給はねば、御給事にかゝり給ふほどの、女房たち殿上人など  
は御心ぐるしきていを見奉りて氣の毒がり、惣じて御をばちかう相つとむるほどの男女  
の面々、是非なき事やといひあへつゝなげき給ふ、御息所とは、さあるべきはづの御前世  
の、ふかき御宿縁こそはおはしけめ、おほくの人のそしりうらみをもはからせ給はず、

御息所の御身のうへにふれたる御事をば、お最負ぶよくまし〜て、物の道理をうしなは  
せ給ひ、今又かく世間の事をも、おぼしめしすてさせ給ふやうになりゆくは、行末たのみ  
なき事として、もろこしの玄宗皇帝の楊貴妃にをくれさせ給ひし後、御位をすべらせ給ひし、  
むかしの世のためしまでも引出つゝ、もしそのやうなる趣にもならせられんかとして、相た  
がひにさゝやきあへてぞなげきける

おほとのもらせ給ざりけるな

まくらことに

かきあつめ

御寝ならせられす也

ふだんの御口すまひに也

とりあつめ也

つぼせんさいの

いとまかしこきは

時のまも

しのびやかに

みだりがはしきを

ちとのまも也

ひつそりさして也

もしの下りもそらはす也

おぼつかなかりしな

心にくきかぎり

心おさめざりけるほどに

御心もとなう也

年こばいおとなしき也

まご心のおちつかざるゆへそと也

月日はへにけり

さふらはせ

こうしもみえじと

月日は過ぎる也

相つめさしせ也

かうしも見られしと也

あさましう

やまとことのは

さらにも

御手にもたせ給ひたる物をおとさ

歌也

猶更に也

あやまたす

もろこしのうた

しのびあへさせ給はず

ちがへす也

詩也

こらへまきはしかれさせ也

みやつかへの

ほい  
 本意也  
 ものしたりした  
 のぞみさげたりした也  
 かひあるさまにと  
 せんもあるやうに也  
 いひかひなしやと  
 心さしも無になりぬる事よと也  
 かくても  
 今こそかうありても也  
 をのづから  
 しぜんは也  
 おひ出給は  
 成長し給はゞ也  
 さるべき  
 さあるべき也  
 いのちなかくとこそ  
 長命ならんこそ也  
 おもひれんぞめ  
 れがうべき事を也

なき人のすみかたつれいてたりけん  
 方士が楊貴妃の玉のありかたつ  
 れいでたりし也  
 いみじきえし  
 上手の繪師也  
 にほひなし  
 いろつやよそほひまでの匂ひはえ  
 かきさらじ也  
 かよひたりし  
 似かよひて也  
 からめいたるよそひ  
 から装束にて也  
 らうたげなりし  
 あいらしかりし也  
 ことぐまに  
 御かたらひぐまにも也  
 はれをならべ枝をかはさんさ  
 天にあらばひよくの鳥地にあらば  
 りへのみつばね  
 うへの御休息おへや也  
 ようのぼり  
 まいりのぼらせ也

ものしと  
 あまりなる物れたみさ也  
 うへ人  
 殿上人也  
 かたはらいたしと  
 きぐるしやと也  
 をしたちかとしき  
 わがまゝなる御心にさものごとつ  
 のめだちたる也  
 事にもあらず  
 何事かのやうに也  
 けちて  
 けて也  
 もてなし  
 かくせさせ也  
 このお申し  
 夜廻り富番のよしを申しあぐる也  
 うしになりたるなるべし  
 入ッ時になりたるらん也  
 よるのおとゞ  
 御ねま也

まともませ給ふことなし  
 とろくどだにおしづまらせ給ふ  
 事もなく也  
 あしたに  
 夜あけぬれご也  
 おこたらせ  
 御げだい也  
 ものなども  
 御食事なども也  
 きこしめさす  
 すませ給はず也  
 朝がれのけしきばかりふれさせ  
 朝がれの供御も御規式ばかりに  
 ちよつさむかはせ給ふ御ふりまで  
 にて也  
 大床のおもの  
 常の御膳也

月日へて若宮より  
 御心おちる給ひぬまで

はるかにおぼしめしたれば  
 めしあげらるべきものともせさせ  
 給はれば也  
 はいせんにさふらふかぎりは  
 御給仕にかゝり給ふほどの女房た  
 ち殿上人也  
 すべて  
 惣じて也  
 ちかうさふらふかぎりは  
 おそばちかう相つとむるほどの男  
 女の面々也  
 わりなきわざかなと  
 せひなき事やと也  
 さるべき  
 さあるべきはづの也  
 ちざり  
 御宿縁也

そこらの人  
 おほくの人々也  
 此御事に  
 御息所の御身の上にも  
 はた  
 又也  
 世の中の事  
 世間の事なも也  
 たいくしきわざなりと  
 行末さのみなき事やとて也  
 ひとのみかど  
 もろこしの玄宗皇帝也  
 さゝめき  
 さゝやき也

月日へて若宮参内させ給ふ、もとよりうつくしき御生得なるに、御としかさねさせ給ふ  
 にしたがひて、いとゞ此世界の人ともみえさせ給はず、さよらかに御成長なさせ給へれば、

帝は猶もふしぎなる御かたち哉とぞおぼしける、あくる年の春、一の宮東宮の坊にとさだ  
 まらせ給はんするをも、此若宮を、順を引こしてたて申させたき程にも帝はおぼしたれど、  
 御うしろみせさせ給はん人もなく、其上又、世間ともに承引すまじき事なれば、かへつて  
 わか宮の御身のうへ、あやうきものにおぼしめし御遠慮なされて、御色にもいださせ給は  
 ず、何の御沙汰もあらざりけるを、あれほどに御大切がらおほしたれば、てきと御取かへ  
 もやなされんとおもひしに、物にはかざりといふ事こそありけれ、かねて苦勞にはせまじ  
 きものやと、世の人もいひふらし、弘徽殿の女御の御心も、おちつかせ給ひけり

まいり給ひぬ  
 案内せさせ給ふ也

ゆかしう  
 不思議なる御かたち哉也

中へ  
 かへつて也

此世の  
 此世界の也

ぼう  
 東宮の坊也

はかりて  
 御遠慮なされて也

きよら  
 きよらか也

引こさまほしき  
 順を引こして也

さばかり  
 あれほど也

およすげ  
 御成長也

世の  
 世間ともに也

おちぬ  
 おちつかせ

いと  
 猶も也

うけひくまじき  
 承引すまじき也

きこえ  
 いひふらし也

かの御おば北のかたより  
 かへすくの給ひけるまで

かのおおば君は、さりし比、しせんはさあるべきついでもあらんと、帝の仰せさせ給ひし  
 は、若宮を春宮にもたて申させ給はん御下心にもやと、たのみにし給ひしも、その事とな  
 くなりぬれば、なぐさむかたなくてよくとおもひしづみつ、何とぞしてすこしもはや  
 く、御息所のおはすらん所にだにたづねゆかばやとねてもさめても願ひ給ひしるしにや、  
 つるにうせ給ひければ、帝はこれをも又かなしみおぼしめす事かざりなし、若宮も、御息  
 所にはなれさせ給ふ比は、まだみつの御としの事にて、かなしませ給ふ御ぐはんせもな  
 りしに、ことしはもはや六つにならせ給へば、このたびはあはれといふ事をもちとはおば  
 ししらせたまひて、戀ひかなしみなかせ給ふ、おば君も此年比御なじみ、したひとぐるめ  
 させ給へるを、見すてをき奉るかなしさのみを、今はのきはまで、かへすくのたまひつ  
 うせ給ひけり

わか宮也  
 見奉りなく

なれ  
 御なじみ也

むつび  
 したひとぐるめさせ也

今はうちにのみより

御有様なりけるまで

わか宮今は内裏にのみおはしませ給ふ、今年にはや七つにならせ給へば、御學文はじめなどせさせませ給ふ、世にもまれなるほど御聰明にましませば、よもたゞの御むまれにてはあらし、何ぞの變作にこそおはさめ、かやうに利根なる人は、壽命みじかき物ぞ、といへばかた／＼につけてあまりおそろしきまでにぞ帝はおぼしめしける、御息所存生の節は、皆のかた／＼中あしかりしほどに、母人のなき今とても、さだめてとやかくやこはおもひ給はんつれども、此みこのむまれつきを見給ひては、もはやたれも／＼えにくみ給はじと帝はおぼしめして、御かた／＼へ、たゞ自分の實子ぞとおぼして、いとおしがり申させ給へよと仰せられ、弘徽殿などへ渡御の節も、御供に召つれまいらせ給ひて、直に御簾の内までも入れ奉り申させ給ふ、おそろしげなる武士又あたかたきなりとも、此若宮を見たてまつりては、先ゑみをふくむべき御かたちなれば、こうきでんの女御も、えよそ／＼しくもせさせ給はず、此女御の御腹に、女御子お二がたおはしませども、おむまれつき、何として此若宮の御器量には、なすらへくらべさせ給ふべくもなかりけり、此姫宮がたをはじめ、其外の御かた／＼も、かくれさせ給ひつなご、御うご／＼しくもせさせ給は

ず、此わか宮御幼少なれども、今よりはや風流めき、おとなぐるしくおこしやくにおはすれば、ごこやらは隔心らしけれども、おもしろおかしき所ある、あそびお相手にはたれも／＼おぼしめしつゝ、おいとおしがらせ給ふ、わざとならばせ給ふ御學文は、さのごどももごより御器用にて、その外琴笛の音も、天然とうけ得させ給ひて、宮中をひ／＼かさせ給ふ、なに事にてもたらはせ給はぬ事なきおむまれつきなれば、惣じての事、いへばいふほどこと／＼しうて、あまりある譽やうや、よもそれほどにはおはさじ物をと、いふべきほどの人の御有様なり

うち

内裏也

さふらひ給ふ

おはしませ給ふ也

ふみはじめ

御學文はじめ也

世にしらす

世にもまれなる也

さとうかしこく

御さうめいに也

らうたうし給へ

いとおしがり申させ給へる也

わたらせ給ふ

渡御也

やがて

直に也

いみじきものふ

おそろしげなるふし也

うちふまれぬべく

ふみたふくむべき也

さしはなち

よそ／＼しく也

ふたところ

おふたかた也

なまめかしう

風流めき也

はづかしげ

おとなぐるしくおこみやくに也

いとおかしうちとけぬ

ごこやはさやくしんらしけれど  
もおもしろおかしき所ある也

あそびぐまに

雲井を

あそびおあいてには也

宮中を也

さるものにて

すべて

さるものごとくもとより御きようにて

惣じての事也

いひつゞけば

いへばいふほど也

うたてぞ

あまりなる也

その比こまうとのより  
おぼしをきてたりまで

その比高麗人の來朝せしか中に、すぐれて功者なる、人相見ありけり、帝きこしめしをよばせ給ひて、ひそかに若宮を相し奉らせんとおぼしけれど、異國人を宮中へ召入れ給ふ事は、宇多の帝の御制禁あれば、お心にまかせ給はず、若宮を随分こつそりと、異國人をあへしらひの場所、鴻臚館といへる官舎へつかはされたり、御守のやうにて、相そひ奉られける、右大辨の自分の子のやうにしなしてつれだち奉るかの人相見、若宮を見たてまつりおごろきて、いくたびともなく禮をなしつゝ、見あげみおろし奉り、右大辨の子といふをも不審げにて申すやう、此御人は、國の親となりて、その上もなき帝王の位にのぼらせ給ふべき相おはしませども、そのかたにてみれば、世もみだれうれふる事やあらん、又大臣家となりて、天下の政事を取行ふかたにてみればもつとも一たんはさもあらんかなれど

も、又その相もたがふべしとぞ申しける、右大辨もかたのごとく才智たけたる儒生にて、通事まさりの人なるが、いひかはしたる事ども、興ありて詩文など作り贈答などしたりけり、かの人相見も、一兩日の内には朝鮮へかへらんとするに、かく有がたき人に對面し奉りたるは、よろこばしきながら、かへつて御のこりおほからんなごある詩の心ばへを、おもしろく作りたるに若宮も、御秀逸なる句を作らせ給へるを、かの高麗人見て、かぎりなく感じ奉りつゝ、結構なる綾錦をはじめ、虎の皮、人參等まで、大分にさしあげ物をしてまつる、禁裏よりも人相見へ品々の物くだされて朝鮮を歸りける、帝は此事こつそりごとおぼししを、しせん世間へいひひろがりけるほどに、随分御沙汰なしになされたれども、春宮の御祖父右大臣殿などきかせ給ひ、いかなるおぼしめしにやどうたがはしうおぼしけり、帝はかしこき御心にて、まへへも日本流の相術にてかながへせさせ給ふにも、かの高麗人の申しあげたるにちがはねば、ごかくそれよごかたつけて、おぼしめしよらせ給ひけるすぢなれば、此わか宮を、たい今まで親王にもなさせ給はざりけり、かの日本の高麗のも、人相見はまことに功者なりけりと、おぼしあはさせ給ふにつけても、無品親王にて、御母方の御親族の内にて、おもしろだてにならせ給ふべき人もなくて、よりつき所なくうろくとまじらはせ給はんも、お心うくおぼしめし、もつとも今の間は、たとひ



いかやうにても、御威勢ごゐせいのをとらせ給ふ事はあるまじきが、おぬしの御治世ごちせいもいとさだめなき事なれば、とかく臣下しんかの家になさせ給ひて、帝位ていゐの御うしろみせさせ給はんこそ、ゆく末すゑまでもたのもしげなる事よとおぼしきだめて、いよく政事せいじのかたにかゝりたり、道々みちの才覚さいかくをならはし申させ給ふ、かうならはせたまふ事々のぎはも、一つとしてをろかならず、別べつして徳發明とくはつめいなれば、臣下しんかなみにしてさしをかせ給はん事はあつたらものなれども、親王しんおう宣下せんげもありなば、ゆく／＼帝位ていゐの御望ごのぞみもありやせんと、世上せじやうのうたがひやおはせ給はんなどおぼしめぐらさせ給へば、星占ほしうらひ博士はかせの、すぐれて功者こうしやなるにかんがへせさせ給ふにも、人相見にんさうみの申せしかたとおなじ趣おもむきに申しあぐれば、とにかくに源氏げんじになしまいらせんと、おぼしきだめさせ給ふ

こまうどのまいるがながに  
高麗人の來朝こうらいにんせしがながに也  
かしこきさうにん  
功者こうしやなる人相見也  
宮の内みやのうちににめさん事  
宮中みやちゆうへめしいれ給ふ事は也  
御ごいましめ  
御ごせいいきん也

いみじうしのびて  
隨分ずいぶんこつそりと也  
御ごうしろみだちて  
御ごもりのやうにて也  
つかうまつる  
相あいそひ奉ほうられける也  
右大辨うだいべんの子のやうに  
右大辨うだいべんの自分の子のやうに也

おもはせて  
しなして也  
あて  
つれだち也  
さうにん  
人相見也  
あまたよびかたふき  
いくたびともなく禮れいをなしつゝ見  
あげみおろし奉り也

あやしく  
ふしんげにて也  
かみなき  
そのうへもなき也  
そなたにて  
そのかたにて也  
おほやけのかため  
大臣家也  
天下てんかの下をたすくる  
天下てんかの政治せいざいをとりをこなふ也  
べんも  
右大辨うだいべんも也  
ざえかしこき  
才覚さいかくつけたる也  
はかせ  
儒生也  
文など  
詩文しぶんなど也  
つくりかはし  
贈答也

けふあす  
一兩日いちりやうにちの内には也  
かなしかるべき  
御ごのこりおほからん也  
いさあはれなる  
御秀逸ごしゆいつなる也  
めで  
感し也  
いみじき  
けつつけうなる也  
おほやけよりも  
禁裡きんぢりよりも也  
おほくのものを給はず  
しな／＼のものくだされて也  
おのづから  
しぜんさ也  
ことひろこりて  
いひひろがりたる也  
下らさせ給はれど  
御ごさたなしになされたれども也

おほちおまや  
御祖父ごそふ父ちち右大臣うだいじんどの也  
おぼしうたがひ  
うたがはしくおぼし也  
やまとさう  
日本流にっぽんりゆうの相術也  
おほせて  
とかくそれよとかたつけて也  
みこにも  
親王しんおうにも也  
かしこかりけり  
功者こうしやなりけり也  
外戚げいせき  
御母方ごぼかたの御親族也  
たゞよはさじ  
よりつきたる所なくうろ／＼と也  
おほやけの  
帝位ていゐの也  
ざえ  
才覚也  
かしこくて  
御發明ごはつめいなれば也

あたらしけれど  
 あつたらものなれども也  
 世の  
 世上の也  
 ものし給へば  
 おほしめぐらませ給へば也  
 すくえうのかしき道の人に  
 星うらなひはかせのすぐれて功者  
 なるに也

おなじさまに  
 おなじなむきにも  
 よせなきにては  
 御うしろだてにならせ給ふべき人  
 もなくて也

たゞうとにて  
 臣下の家にも  
 ゆくさまも  
 行末までも也

ことに  
 別して也  
 たゞうさには  
 臣下なみにして也  
 みことなり給ひなば  
 親王宣下もありなば也  
 おひ給ひぬべく  
 おはせ給はんなど也  
 をきてたり  
 さだめさせ給ふ也

年月にそへてより

かゝやくひの宮ときこゆまで

帝は年月にそへて、御息所の御事を、おほしめしわするゝをりもなきまゝに、もし御心のなぐさむ事もやとて、さあるべきすぢの人々を、かれこれ参上させ給へど、御息所の御かたち、似たりとも御らんなるへきだになければ、此うへいかほごさがしても、有がたかるべき世の中哉と、よろづうとましくのみおほしなりぬるに、こゝに先帝の四ばん目の姫宮、御かたちすぐれさせ給ふと、世間の取さたかくおはしますを、其御母后、世上にも又となきものに、おいとおしがりそただてまさせ給ふを、只今内裏につとめて居給

ふ内侍のすけなりける人、先帝の御時の人にて、かの后宮の御所へも、お心やすうまいりなれたりければ、かの姫宮のおさなくおはしませし比より見奉り、今もおり〜はほのみ奉るまゝに、ある時帝へ申しあげ奉れりけるは、わたくし事、御三代このかたつゞきて御奉公がまつりさふらふが、故御息所の御かたちに似給へる人を、たゞ今まで見え及び申さるるを、ふと存じつけさぶらふは、先帝の后宮の姫宮こそ、いかさまに御おもかけ、ごこやらく似申させ給ふやうにぞぞだち出させ給ふ、何にもいたせ、又どは有がたき御器量者にておはしさふらふと、奏したりけるほどに、帝は似たりときかせ給ふにぞ、さもあるにやとお心とまりて、其むきの手すぢにつけて、かの姫宮を内裏へまいらせさせ給へるよしを、御母后のかたへ御ねん比に仰せ通させ給ふに、后宮きこしめして、あら〜おそろしの事や、春宮の女御はおりんきぶかく、御心わるさまにまし〜て、桐つばの更衣の、目のまへにもものはかなくあてがはれ給ひし例を、さくも氣味わるき事よ、お心の内におほしふくみて、ごやかくと仰せのはさせ給ひ、早速にはさしあげさせ給はんの御相談もすまざる内に、御母后のうせさせたまへは、かの姫宮はおたよりなう、お心ほそきさまにておはしますを、帝はいよ〜御笑止におほしめして、たゞ女の御子がたとおなじなみにおぼして、大切にせさせ給はんまゝ、ごかく入内させ申し給へよと、いと御ねんごろに仰

せられしかば、只今にては、御兄兵部卿の宮の、何事も御さし引にておせさせたまふが、姫宮に御つきくの人々、其外御うしろみせさせ給ふ御かたへとも、御相談なさせ給ひ、ともかくにもかう心ほそくくらすせ給はんより、内裏すみせさせ給は、お心のなぐさむかたもこそ仰せあはさせ給ひて、御入内なし申させ給ふ、此おはします御つばねは藤つばねにてぞありける、まことにかの内侍のすけの物がたりのごとく、御かたち有様、ふしぎなるまでにぞ故御息所に似申させ給ひける、御かたちこそ似させ給ひつれ、此御事は、もとより一きはまさらせ給ふ御すぢなれば、おもひなしどもになみ／＼ならず、人もえおとしめあなごり給ふ事もならざれば、諸事につけ、どこへ御遠慮なさるべき事もなく、萬端事たらぬ御事ぞなかりける、しかるにかの御息所は、はじめよりなみ／＼の更衣にてましくしを、帝の御心ざしのふかくわたらせ給ひしゆへにこそ、人もゆるさぬ御そばづとめに時めき給ひしも、事のすぢちがひたるやうなりしかども、何とも手のつけられぬ事にて、さま／＼のうらみそねみもおはせ給ひしぞかし、さて此藤つば御まいりの後さすがにおほしまぎるゝとはなかりけれども、いつとなく帝の御心もうつろはせ給ひて此御かたならではど、おほしめしなぐさませ給ふやうになりゆくも、あはれる世のならひ也、源氏の君は帝の御そばはなれさせ給はず女御更衣の御かたへ、どれ／＼とでもなれさせ

給ひけるが、まして帝のしげく渡御ある御かたは、お心をかせ給はでなませ給ふ、いづれの御かたも、相たがひにわれは人にとらんとおぼしたるやはあらん、とり／＼にうつくしうはおはしませど、もはやどなたも、ちと御年ふけさせ給ふが中にも、藤つばの女御は御年わかにて、しかもすぐれてうつくしうまします、お心ふかく源氏の君へはかくれさせ給ふやうにせさせ給へど、ふだんの御事なれば、をのづから何ぞのついでには、ちよく／＼と源氏の君は見申させ給ふ、御母御息所に、みつの御としはなれさせ給へば、いかやうの御かたはちやらん、御おもかけをだにおほえさせたまはぬを、此度藤つばの女御よく似申させ給ひたりと、内侍のすけの物がたりをきこしめすにつけて、わかきお心にゆかしきものにおほし給ひ、つねにまいりてしたしみなれ奉りたくぞおほし給ふ、帝は此御ふたかたどもに、相もをこらすかぎりなきおいとおしかりの御事にて、藤つばの女御へ仰せられるは、源氏の君をうとくしくなほし給ひぞ、そこをさしきて、外に大切におもふ人はなけれど、あまりふしんなるまで、此御子をば、そこにもよそへなんほどにぞおもはるゝ、その御かたへひた物まいり給ふとも、無禮な事やなどおぼさで、あいさうらしういとおしがらせ給へ、髪のかゝり、目もどなどのうつくしさは、よくも似給ひて、ちをわけたる中といふても、似あひ給ふぞなど仰せさせ給へば、源氏の君は御おさな心ちにも、

かりそめの花もみちにつけても、まづ花つぼの御かたへ手折てしんせさせ給ひなど、お心ざしを見え奉らせ給ひて、外心なく御親切におもひしたはせ給ふを、弘徽殿の女御は又、此藤つぼの御かたとも御中わるく、へだてがましくまし／＼けるゆへ、それにうちそへて、もとよりのお心もたちかへり、源氏の君をもにくや／＼とぞおぼしける、こうきでんの御腹なる宮がたは、よにたくひましまさじと、御名たかうおはしましける御かたちどもにも、源氏の君の、ほんのりさせさせ給ふお色つやの、猶まさらせ給ひて、何にたとへんかたもなくうつくしげなるを、世上の人もをしなべて、ひかる君とぞ申し奉る、又藤つぼねの女御もたちならばせ給ひて、帝のおぼしめし大ていならぬ御いとおしかりにて、ごなたをまさりをとりともおはしまさ／＼りければ、世の人又か／＼やくひの宮とぞ申しける

なぐさむや  
御心のなぐさむる事やとて也  
さあるべき  
さあるべき也  
まいらせ  
参上させせ也  
なすらひに  
似たりとも也  
おほさるゝだに  
おらんなさるべきだに也  
かたきよかな  
ありがたかるべき世の中と也  
四の宮  
四ばんめの姫宮也  
きこえ  
世間のとりさた也  
よになく  
世上にて又となきものに也  
かしづき  
おいとおしがりそたてませせ也  
うへにさふらふ  
内裏につとめて給ふ也  
かの宮にも  
かの后宮の御所へも也

したしう

お心やすう也

いはけなく

おさなく也

みよのみやつかへにつたはりぬるに

御三代のかたつゞきて御奉公也

え見奉りつけぬに

え見をよび申さるるを也

いとうおほえて

ごこやらく似申させ給ふ也

おひいで

そだち出也

かたち人

御器量しや也

まことによ

さもあるにやせ也

きこえさせ

仰せ通せさせ也

あな

あら／＼也

さがなく

おりんきぶかく御心わるさまに也

あらはに

目の前にて也

もてなされ

あてがはれ也

ためし

例をきくも也

ゆゑしうせ

きみわるき事よと也

おほしつゝみて

おほし／＼くみて也

すか／＼しうも

さつそくには也

おほしたゞざりけるほごに

御相談もすまさるうちに也

おなじつらに

おなじなみに也

きこえさせ給ふ

おほせられしかば也

御せうさ

御兄也

うちすみ

内裏すみ也

まいらせ奉り也

御入内なし申させ也

げに

まことに也

あやしきまで

ふしぎなるまで也

おほえ給へる

似させ給ひける也

御きはまさりて

一きはまさらせ給ふ御すぢ也

めでたく

なみ／＼ならず也

うげばりて

御遠慮なさるべきこゝもなく也

あかね事なし

事たらぬ御事ぞなかりける也

かれは  
 かのみやす所は也  
 あやにくなりしぞかし  
 事のすちがひたるやうなりしか  
 どもなにも手のつけられぬ也  
 をのづから  
 ひとつとなく也  
 こよなく  
 此御かたならではと也  
 御あたり  
 御そば也  
 さり給はぬを  
 はなれさせ給はず也  
 わたらせ給ふ  
 渡御也  
 はぢあへ給はず  
 御心をかせ給はず也  
 おぼひたりやは  
 おぼしたりやは也  
 めでたけれど  
 うつくしうはおはしませど也

うちおとなび  
 ちと御としふさせ也  
 いとわかう  
 御としわかにて也  
 せちに  
 御心ふかく也  
 リ、  
 ちよく／＼と也  
 かげだに  
 御おもかげをたに也  
 いとよう似給へりと  
 よく似申させ給ひたりと也  
 きこえけるを  
 ものがたりを也  
 あはれとおもひきこえ  
 仰かきものにおぼし給ひ也  
 なづさひ見奉らばや  
 したしみなれ奉りたる也  
 うへ  
 帝也

御おもひどち  
 御二方ともにあひもとらず也  
 なうとみ給ひそ  
 うと／＼しくなおぼし給ひそ也  
 あやしく  
 ふしんなるまで也  
 よそへきこえつべく  
 そこにもよそへなんほごにぞ也  
 なめしそ  
 無禮な事やなど也  
 ちうたうし給へ  
 あいさうらしういさおしおし給  
 へ也  
 つらつさ  
 びんのかゝり也  
 まみ  
 目もと也  
 にげなからず  
 似あひ給ふ也  
 かよひてもみえ  
 ちをわけたる中も

こよなく  
 外心なく也  
 はかなき  
 かりそめの也  
 心よせ  
 御深切におもひしたはせ也  
 こきでん  
 こよき殿也

此宮とも  
 此ふぢつばの御かたとも也  
 そぼ／＼しき  
 御中わるくへだてがましく也  
 たちいで、  
 たちかへり也  
 物しと  
 にくや／＼とぞ也

にほはしきは  
 ほんのりさせさせ給ふ御色つやの  
 也  
 世の人  
 世上の人也  
 御おぼ也  
 おぼしめし也  
 どりん／＼なれば  
 どなたなまさりとりともおはし  
 まさどりければ也

此君の御わらはすがたより

御あはひどもになんまで

源氏の君の御童形、かへさせ給はんはおしき事やと帝はおぼしめしけれど、今年お十二に  
 ならせ給へば、和韓の例にまかせて、御元服させまいらせ給ふ、帝は御心ひまなき御用  
 意に、どくとおちつかせ給ひても御座なされず御せはやかせ給ひ、諸事御取そろへ、さし  
 さだまりたる御規式の外に、猶又御好みの色品を加へそへさせ給ふ、先年春宮の御元服、  
 南殿にてありし御規式の、世にひききて結構なりしにもをどらず、所々の御かざり物饗應  
 など、御寶藏御收納所などよりは、御定法一とをりばかりにしたて、相つとめたれば、も  
 し疎抹なる事もやあらんと別勅ありて、一々に御念を入れさへ給ひ、美づくし善つくした

る御事也、さて清涼殿の東のひさしの間に、東むきに椅子をたて、天子の御座所をかまへ、御元服の冠者の御座、御ゑぼしおやの大臣の御座を、左右にわけて御前にぞありける。夕七ツ時に、源氏の君まいりあがらせ給ふ、御髪をゆひさげさせ給ひし、おびんつき御かほの色の、ほんのりとしてうつくしさ、今さら御さまをかへ奉らせ給はん事、おしげなる程にぞ見えさせ給ふ、藏人の大藏卿なるが仰せによりて、御元服の儀うけたまはりて相つとめたり、さよらかにうつくしかりける御ぐしを、はさみ奉るも氣のごくさふなる人々の顔つきを、帝御らんするにつけても、御息所の御存生にて、見奉りたまはれとおぼし出て、御泪のこらへかねさせ給ふをも、かゝる御悦の砌なるにと、御心づよくおぼしめしなをして、御色にも出させ給はざりけり、源氏の君は冠せさせ給ふて、御休息の間へ御退出あり、御元服のお装束を召かへ、御庭へおりて御禮申しあげさせ給ひけるに、みな人々も涙をながしけるにぞ、帝は又、ましてこらへかねさせ給ひ、此年月は何かとおぼしまざるゝおりもありしを今さらむかしの事ども、取かへしおぼしめし出させ給ふて、かなしみの御泪にくれさせ給ふ、源氏の君、かくおさなけにうつくしくおはしけるを、御くしあけさせ給ひなば、御かたちの見をとりやせさせ給んかと、帝は御うたがはしくのみおぼしけるに、かねておぼしたりしはあさきかたにて、けつくうつくしさそはせ給ふ此御ゑぼしおやの左大臣殿の

御むすめは、帝の御妹みこの御腹の、御ひとり娘にてましませば、別して御秘藏にそだてまさせ給ふ、ことし十六にならせ給ふが、源氏の君とは御いとこにてぞおはしける、まへへ春宮へ奉らせ給ふやうにと、弘徽殿や右大臣殿などかれこれと御とりもちありしかども、左大臣殿は、何とした物ぞと御取あひなくて、とかく御延引なりつるは、何とぞこの源氏の君へ奉らせ給はんとの下心なりけり、此段をば、帝へかねて御内意をもうかひをかせ給ひければ、帝も事をさいはいに、さらば此左大臣殿を源氏の君の御うしろみかてら、直にその御娘御を、此節の御そひ寐にもと催させ給ひけるを、左大臣殿は、もとよりさやうにぞおぼしよりたる也けり、さて源氏の君は、殿上へ御退出あり、みな人々へ御祝儀の御酒くださるゝに、源氏の君、親王がたの御座の末に御着座なりける、左大臣殿お言葉をもかけさせ給ひ、御縁組のわけなごをもちと申し出させ給ひけれども、源氏の君まだ御幼稚ゆへ、はづかしまゆなされ、とかくの御あいさつをもせさせ給はず、しかる處に、御前より内侍宣旨をうけたまはり、左大臣殿を召させらるゝのよし、殿上人をして申しつたへられけるほどに、早速参上あり、御祝儀のくだされ物うへの命婦もち出取つぎて拜領あり、白き大うちきに、御衣一くだりそへてくだされける、これはかやうの節は、いつとてもの先例也、御盃頂戴のついでに、帝

いとさなき初ともゆひに長きよを

ちぎる心はむすびこめつや

此歌は、此たび左大臣殿を、源氏の君のおまほしおやになさせ給ふにつけてゆく／＼ともに、此おさなきかたの御うしろみをもたのませらるゝからは、御を嫁せしめたるおぼしめすほどに、此元服のはつともゆひによそへて、行末ながき縁をもむすび給ふまじや、もしそのがつてんにて、はやくむすびこめもし給ひしやいかにさ、うらどひをなさせ給ふ心也、いとさなきは、おさなき也、初もこゆひは、元服の事也

かくお下心をふくみて、心を引見させ給ふ、左大臣殿かしこまりつゝしみて

むすひつる心もふかきもとゆひに

こきむらさきの色しあせずは

此歌は、わたくしのむすめを、源氏の君へ嫁せしめ、させ給はんとの御心ざしにて、縁をむすぶべきやとの仰ごこき、うけたまはり奉りぬ、わたくしもかれてより、心ふかくぞんじよりて、此もこゆひに、とくはやむすびこめなきさふらふ也、此もとゆひのむらさきの、かくのごとくこき色にあやかりて、行末ながく、源氏の君のお心のさめさせ給はぬやうにとれがひ奉りさふらふ、いかに／＼御縁をむすび奉りたく、こそさふらへと、おうけを申しあげさせ給ふ心歟、あせずは、さめすは也

と奏して、長階よりおりて舞踏し御禮申しあげ給ふ、左馬の寮より御馬ひき出し、藏人所

より御鷹すへ出て、左大臣殿へくだされける、御階のもとへ、御子たち上達みな召ならべて、それ／＼に御祝儀のくだされもの品々あり、その日源氏の君よりの御さしあげ物の、檜折杉おりひげこのたぐひ、右大辨うけたまはりつとめたり、末々の者までくださるゝ赤飯又はくだされ物入れの長持など、をき所なきほどおびたしくして、春宮の御元服のおりよりもけつく數まさり、御規式むき魏々蕩々として、かきりなき御祝也けり、其夜源氏の君、御退出の節直に、左大臣殿へ御駕入せさせ給ふ、かの御かたにても、諸事の御作法規式、世にめづらしきまでに結構をつくして、御馳走申させ給ふ、まだ御おさなくいたひけにおはしますも、うちあがりたるおむまれつきにて、うつくしの御事やと、たれも／＼おぼしよろこばせ給ふ、姫君は源氏の君よりは、四つばかり御年かさにておはしますが、源氏の君のいとわかうおはしますも、似つかはしからの物におぼしてにや、はづかしとおぼしたり、左大臣殿の御家すぢはもとよりの御事にて、世上よりのおもんじ奉るなどならぶかたなきに、御簾中は、帝と御一腹一生の御妹なりければ、いづれの御すぢにつけても、びいしき御威光なるに、此君さへ御縁にならせ、おはしましそはせ給ひぬれば、右大臣殿、春宮の御祖父と申し、つゝには關白職をまかけさせ給ふべき、御威勢と見えさせ給ふさへ物の數ともみえず、左大臣殿の御光りにはをされさせ給ふ、左大臣殿に男の御子達、あま

た腹々にもたせ給ふが、御簾中なる大宮の御はらには、お惣領にて藏人の少將と申せした  
 いおひとりおはしける、いとわかうはましませど、才智かしくよきおむまれつきなりけ  
 るを、右府は、左大臣殿との御中は、あまりしつくりともせさせ給はざれど、此藏人の少  
 將の、御人がら器量のすぐれさせ給ふを、右大臣殿はえ見のがし給はで、請聲にし、四ば  
 ん目の御秘藏姫御を御婚禮せさせまし給ひ、左府の源氏の君をしたはせ給ふにをとらず、  
 大切にはとおしがらせ給ふ、げにかくこそあらまほしきごみゆる御あひだからごもにぞお  
 はしける

此君

源氏の君也

御わらはずがた

御童形也

かへまうく

かへせさせ給はんはおしき事や也

あたち

とくさおちつかせ給ひても御座な

されず也

おほしいとなみ

心ひまなき御用意也

かぎりある事に

さしだまりたる御規式也

ことをへさせ給ふ

御このみのいろしななくはへそへ

させ給ふ也

ひととせ

先年也

よそほしかりし

けつかうなりし也

なとさせ給はず

をさらず也

きやう

要座也

くらつかさ

御寶藏也

ごくさうめん

御收納所也

おほやけごに

御定法一とをり也

つかうまつれる

おつとめ也

なるそかなる事もぞと

そまつなる事もやあらんと也

さりわき仰せごと

別勅也

きようをつくし

美つくし善つくしたる也

おはしますでんのひんかしのひさし

清涼殿の東の庇の間也

くはんざ

御元服の冠者也

引いれのおとゞ

御えぼしおやの大臣也

さるの時

夕七ツ時也

みづらゆひたる

御かみをゆひさげ給ひし也

つらつき

おびんつき也

にほひ

ほんのりさして美しき也

つかうまつる

相つとめたり也

きよら

きよらか也

そくぼさ

はさみ奉る也

心ぐるしけなるを

きのどくさふなる人々のかほつき

な也

うへ

帝也

見ましかは

見奉り給はす也

たへがたきを

こらへさせ也

れんじかへさせ

おほしめしななして也

御やすみ所に

御休息の間へ也

まかで給て

御退出あり也

みぞ

御元服の御装束也

奉りかへ

めしかへ也

おりに拜し奉り給ふ

御庭へおりに御祝申しあげさせ也

はた

又也

しのびあへ給はず

こらへかれさせ給ひ也

いとかう

かく也

きびは

おさなげにうつくしく也

あげをさりやと

御くしあげさせ給ひなば御かたち

の見なとりやせさせ給はんかと也

あさまじう

かれておほしたりしはあさきかた

にて也

引いれの大員  
おえぼしのおやの左大臣也



御子ばらに  
 帝の御いもうと御子の御はらの也  
 かしづき給ふ  
 御ひさうにそだてまさせ給ふ也  
 春宮よりみけしきあるを  
 春宮へ奉らせたまふやうにさせ  
 おぼしむつらふ  
 何さしたものとぞと也  
 此君に  
 源氏の君へ也  
 うちにも  
 みかごへ也  
 みけしき給はらせ  
 かれて御内意をもうかひひなかせ  
 也  
 さらば  
 さあらば也  
 御そひふし  
 御そひれ也  
 さおぼしたり  
 さやうにとおぼしよりたる也

さふらひに  
 殿上へ也  
 まかて  
 御退出也  
 おほみきなどまいる  
 御酒くださるゝに也  
 みこたちの  
 親王がたの也  
 つき給へり  
 御着座なりける也  
 おとと  
 左大臣也  
 けしきばみ  
 御縁ぐみのわけなどをもちと申し  
 いたさせ也  
 物のつゝまゝしきほど  
 まだ御幼稚ゆへはづかしまゆな  
 れ也  
 さもかくも  
 とかくの也  
 あへしらひ  
 御あいさつなも也

めしあれば  
 召させらるゝ也  
 まいり給ふ  
 参上あり也  
 御ろくの物  
 くだされもの也  
 例の事  
 いつとてもの先例也  
 御さかづき  
 御盃頂戴也  
 御心ばへありて  
 御下心をふくみて也  
 おどろかせ給ふ  
 心を引見させ給ふ也  
 ひだりのつかさ  
 左馬の察也  
 たまはり給ふ  
 くだされける也  
 ろくとも  
 御祝儀のくだされもの也

おりひづものこもの  
 ひのきおり杉おりひげこのたぐひ  
 也  
 とんじき  
 赤飯也  
 ろくのからひつ  
 くだされものいれのながもち也  
 所せきまで  
 なき所なきほど也  
 中々  
 けつく也  
 いかめしう  
 ぎゝたうゝ也  
 おとと  
 左大臣殿也  
 まかてさせ  
 御退出也  
 もてかしづき  
 御ちそう也  
 きびはにて  
 おさなくいたひけに也

ゆゝしう  
 うちあがりたるおむまれつき也  
 おもひきこえ  
 おぼしよるこばせ也  
 すこしすぐし  
 四つばかり御さしかまにて也  
 にげなく  
 似つかはしからぬ様に也  
 はづかしとおぼしたり  
 はづかしとおぼしたる也  
 おとと  
 左大臣殿也  
 御おぼえ  
 世上よりのおもんじ也  
 やんごさなき  
 ならぶかたなき也  
 はゝ宮  
 御簾中也  
 うちのひさつきさいばら  
 みかご御一ふく一生の御いもうと  
 也

右のおとと  
 右大臣殿也  
 御いきほひ  
 御あせい也  
 ものにもあらず  
 物のかすともみえず也  
 ものし給ふ  
 もたせ給ふ也  
 宮  
 御簾中なる大宮也  
 おかしきを  
 よきおむまれつきなりけるを也  
 右のおとと  
 右府也右大臣をいふ  
 いさよかられど  
 あまりしつくりともせさせ給へざ  
 れど也  
 見すこし  
 見のがし也  
 かしつき給ふ  
 御ひさう也

四の宮

四ばんめの姫御也

あはせ奉り

こんれいせさせまし也

もてかしつき

大切にいさおしがらせ也

御あはひども

御あひだがらども也

源氏の君はうへのより

いひつたへたるとなんまで

源氏の君は、帝の御いとおしがりふかくて、常に召とぐるめ申させ給ふほどに、お心まゝに御里さがり、切々もえさせ給はず、お心の内にはたゞ、藤つぼの女御の御有様を、世にたぐひなき物におもひとませたまひて、あのやうならん人をこそ妻となして、一生をもそひくらしめて見たや、さて似たるやうな人さへなき事哉と、おぼしくらせ給ふ、左大臣殿の姫君も、もつともうつくしげにて、御寵愛あさからずそだてられさせ給ふ御かたとは見ゆれど、源氏の君はお心にもあはぬ物におぼして、おさな心のくせとて、藤つぼの御事のみ、一むきに御心にかゝり、くるしきほどにぞおぼしける、御元服させ給ふて、おとな並にならせ給ふ後は、まへくのやうに、御みすの内へもいれ申させ給はず、たゞ御あそびなどのおり、源氏の君は御笛が得て物にてふかせ給ふに、ふちつぼの女御の

ひかせ給ふ、御琴の音など、きかよはし、それぞとばかりのほかなる御こゑきまいらせ給ふのみを、せめてお心のなぐさめとおぼしければ、内裏すみをのみこのまじきものにおぼし給ふて、禁中に五六日もまじませば、左大臣殿の御方へは二三日計など絶々に御退出なされ給へども、唯今はまた幼なき御事なればと左大臣殿はさして咎も恨しうもおぼしめさで、諸事御せわせさせ給ひ、大切にいとおしがりまし、源氏の君と姫君と、兩お部屋にて召つかはせ給ふ女房たちなども、藝よりはじめみめかたち等まで、世上にてもなみくならぬを選び揃へすぐりて、お部屋につけをかせ給ひつ、源氏の君のお心にあわせ給ふべき御あそび事をば、何によらずお心まかせにさせ申させ給ひ、随分と御ねんごろに心をつくして、たゞ何とぞお心とめて、お里住をなさるゝやうにとのみ、御機嫌とらせ給ひつ、御苦勞にぞなされける、源氏の君禁中には御母御息所のすませ給ひし桐つぼをお部屋にて御息所のめしつかはせ給ひたりし人々皆もとのまゝにて相そへてさしをかせ給ふ、二條院と申すを、お里屋敷にしんせさせられ、御大工頭なる、修理職内匠司など宣旨を蒙りつ、又ともあるまじき程、結構にあらため御造作あり、もとよりよりあり来るも、ふるき木立築山のていなどおもしろき所なるに猶泉水の心ひろくと物すきにほりまはしなど、ていをつくしてつくりなしたり、かやうの御作事は又なきこと、たれ

いひふらしにぎはひけり源氏の君は、此やうなる所に、藤つぼのやうなる人をむかへすへをきて住たき事やとぞつねになげかしうおぼしくらさせ給ふ、ひかる君と申す御名はさりし比、來朝せし高麗人の感じ奉りてつけまいらせしといひつたへたりとなむ。

うへ

帝也

まつはせば

とぐるめ申させ也

心やすく

お心まゝに也

里すみも

御さとさがり也

さやうならん

あのやうならん也

見ゆ

そひくして見たや也

にるものなくも

似たるやうな人さへなき也

おほいどの、君

左大臣殿の姫君也

いとおかしげに

もつともうつくしげにて也

かしづかれたる

御てうあいあさからず也

心にもつかず

お心にもあはぬ物に也

御ひとへ心にかゝりて

一心むきにお心にかゝりて也

おとなに

おとななみに也

ありしやうに

まへ／＼のやうに也

うちすみ

内裏住也

さふらひ給ひて

まじませば也

おほいどの

左大臣殿也

まかで

御退出也

つみなく

とがめもうらめしうもおぼしめさ

で也

いとなみ

諸事おせわにせさせ給ひ也

かしづきこえ

大切にいとおしがり也

御かたんの人々

源氏の君と姫君と兩おへやにて召

つかはせ給ふ女房たち也

をしなべたらぬを

なみ／＼ならぬを也

えりとよのへ

えらびそろへすぐりて也

さふらはせ

お部屋につけをかせ也

御心につくべき

お心にあはせ給ふべき也

おほな／＼

随分と御れんごろに也

おほしいでつゝ

御苦勞にぞなされける也

うちには

禁中にては也

もとの

御息所のすませ給ひし也

しげいこ

桐つぼ也

みざうしにて

御部屋にて也

まかでちらす

もとのまゝにて也

さふらはさせ

相そへさしなかせ也

里のとの

お里やしきに也

すりしき

修理しよく也

宜旨くたりて

せんじなかうふりつ也

になう

又ともあるまじきほどに也

つくらせ

御造作也

もとの

もと／＼よりありきたるも也

山のたゞすまひ

つき山のてい也

いけの心

泉水の心也

ひろくしなして

ひろ／＼と物すきにほり廻し也

めでたく

ていをつくして也

かゝる所に

此やうなる所に也

おもふやうならん人をすへて

藤つぼのやうなる人をむかへすへ

なきて也

こまうど

高麗人也

めできこえて

かんじたてまつりて也

ざりつほ終

紫文蟹之轉は、き木本

ひかるげんじ名のみより  
わらはれ給ひけんかしまで

ひかると唱る事は、大ていならぬ御かたならでは、申すまじき事なれば、その御人からも、さぞおとなしうおはしまさんとおもはるゝに、此源氏の君、御名ばかりはひかりのかゝやくのど、ことごとくしくきこえながら、以の外の御色ごのみなるは、何とやらん御人體に似あはせ給はぬ御事やなど、いひたてられをし消されさせ給ふが、げにとは色のかたにはひかれさせやすきお心のどがおかる中に、いとつかうしたるつがもなきなされかたやど、をしあらはれたる好色ごとのあるを、おぬしのお心にも、いかさまこれは末の世までもきつたへて、かるくしくうは氣なる名をやなさんと、随分とかくさせ給ひし事を、たれがいふともなけれど語りつたへたりけん、人の口には戸のたてられぬさがなさよ、さあるうへからは、世の取沙汰をきつう御遠慮ありて、またうごらしき御顔をなされつゝ、すこしにても、しよなくど色めきたるふりをばせさせ給はぬを、かのむかしの色好みのこつちやうなる、かたの、少將といひし人、今もし世に居給ひなば、とても色をこのむぞ

ならば、内そとなしにこそ好むべき事なるをとて、さぞわらはれさせ給ひなかし

- 名のみ  
御名ばかりは也  
いひけたれ  
いひたてられをしけされ也  
かゝる  
かうくしたる也  
すきごと  
好色事也  
かるびたる  
かるくしくうはきなる也
- かくろへごと  
かくさせ給ひし也  
人のものいひさがなさま  
人の口には戸のたてられぬさがな  
まめたち  
またうごらしき御かほ也
- 世をばり  
世のとりまたを御遠慮ありて也  
なよひかに  
しよなくど也  
さあるうへからは也  
さるは  
さあるうへからは也  
いたく  
きつう也  
おかしきこと  
色めきたるをば也
- また中將などにより  
うちまじりけるまで

源氏の君、まだ中將などにておはしまし、時は、内裏住をのみ御座りよき事にせさせ給ひて、左大臣殿へはたえなくにのみさがらせ給ふを、今ははや御としもたけさせ給へば、禁裏にて、おほくの女中のなかなれば、しのびくに、かぎりしられず、みだれなづませ給ふかたなくもありての事やと、左大臣殿の御かたにては、皆々うたがはせ給ひしかども、

源氏の君は、さやうにしもあだしくうつり氣に、あさ夕見なれて、いふといなや早速なびきやすき好色は、このませ給はぬ天性のおむまれつきにて、さやうの事はかつてなげれども、まれには右の趣とは相違して、なびきがたきを無理やり心をつくし、小むつかしげなる戀のかたを、お心にとめさせ給ふが、御くせなれば、お下心はわうちやくなるかたなれども、おもてむき一とをりは實體に見えさせ給ふて、外よりのさげすみとはくひちがひたるに、さうかとおもへば又、さはあるまじきなされかたも、あひだくうちまじりける

うちにのみ

内程すみのみ也

さふらひよう

御ざりよき事に也

おほいどの

左大臣殿也

まかで給ふな

さがらせ給ふな也

さしし

さやうにしも也

あだめき

あだくしくうつりぎに也

めなれたる

見なれて也

うちつけの

さつそくなびきやすき也

すきんしき

好色也

御ほんじやうにて

天性のおむまれつきにて也

あながちに

無理屋りに也

引たがへ

相違して也

御心にとゞむる

お心にとめさせ給ふ也

あやにくにて

お下心はわうちやくなるかたなれどもおもてむき一とをりは實體にみえさせ給ふて也

さるまじき

さはあるまじき也

御ふるまひも

なされかたも也

なが雨はれまなきより

むつれきこえ給けるまで

比しも今はさみだれにて、長雨ふりつゞきつはれまなきに、禁裏の御物忌などさしついできて、御他出御遠慮のおりなれば、源氏の君はいと禁中に長居なさる程に、左大臣殿の御かたにてそれとおぼしつけられねば、かれこれ御不審もはれず、又はあまりなる御事やと、うらめしきものにおぼしたれども、その色香をばすこしも出させ給はで、萬端の事猶更かれこれとめづらしきさまに、御装束などは申すに及ばず、ふだんの御召物よりははじめ、御菓子、お夜食等までしたてと、のへさせ給ひて、御むすこの君達を、たい此禁中にてのお部屋桐つぼへ、かはるくつけをき申させ給ふて、御用むきをつとめさせまし給ふ、その中にも、御本妻なる大宮の御はらにて、お惣領なる、頭の中將は、源氏の君とはおいとこなるが、おなじ中にもしたしくなれかたはせ給ふお友だちにて、をぞけ事などもお心をきなく申させ給ひ、外のお兄弟たちよりは、わけてお心やすくなれくしくしなさせ給ふ、此頭の中將は、藏人の少將と申せし比より、右大臣殿の御賀にて、御秘藏おむめ子とそはせたまへば、右大臣殿は、何かとおいたはりふかくいとおしからせ給へども、此中將その御かたをば物むづかしげにおぼして、是も又かたのごとく、好色むきの

あだ人也、此中將おぬしのかたの部屋をば、さらしく結構にしつらひ給ひ、源氏の君の御出入なざるにつけてもうちつれだち晝夜にかぎらず、御學文もおおそびをも、もろともにせさせ給ひて、さのみたちをくれ給はず、どごがごこまでも御隔心がましき事なく、とぐろめなれさせ給へば、しせんと慇懃こうにもなくて、御たがひにお心の内をまかくしおほせず、うちわりてかたりあはせ給ひけり

うち

禁裏也

おほとには

左大臣殿の御かたにて也

おぼつかなく

御不審もはれず也

よろづ

萬端也

およそひ也

駿東など也

何くれぞ

かれこれぞ也

てうじ出

したてとゝのへさせ也

御とのゐ所

禁中にての御へや也

みやつかへなつとめ

御用むきをなつとめさせ也

みやばらの

御本妻なる大宮の御はら也

なかに

同じ中にて也

たはふてなも

などけ事なごも也

人よりは

外の御兄弟たちよりは也

ふるまひたり

しなさせ給ふ也

右のおとゞ

右大臣殿也

いたはりかしづき

御いたはりふかくいと御しがらせ

すみかは

その御かたをば也

ものうくして

物むつかしげにおほして也

すぎがましき

好色むきの也

まはゆくして

さらしくけつこうに也

君の

源氏の君の也

うちつれきこえ

うちつれだち也

ふるひる

晝夜にかぎらず也

おさく

さのみ也

いづくにても

どごがごこまでも也

まつはれ

とぐろめなれさせ也

なをつから

しせんも也

かしこま もなかす

いんぎんこうにもなく也

かくしあへず

かくしおほせず也

むつれきこえ

うちわりてかたりあはさせ也

つれくどふりくらしより

きこえ給ふつゝゐでにまで

つれくどふりくらしして、しつほりとしたる宵の雨に、おりふし殿上にもやうくと人ずくなにて、源氏の君のお部屋も、いつくよりは御用すくなく、お隙らしき心ちするに、あぶらひちかくよせさせ給ひ、歌書經書など見させ給ふつゝゐでに、おそばなるちがひだなの中より、いろくの紙にてかきたる、むすびぶみ封じ文の艶書どもを取出させたまふを、頭の中將は、いづかたたれのふみならんと、心ふかうゆかしがりて見たがり給へば、源氏の君大かたむきのさもなりぬべきを、すこしはみせはべらん、此内に、手跡も文體も、都合なるべきもぞあらんにとて引かくし給へば、頭の中將きのどくかりたまひ、その打とけなれしげなる文體のましりて、小はづかしげにおぼし給ふこそゆかしけれ、世間な

みの大ていむきなるふみは、數ならぬわれらなどがうへにても、それ／＼の程らひに應じて、かきかはしつゝ見はべらんものにぞさふらふ、あひたがひにうらみつらみのあるおり／＼のや、又はやくそくして、待かねがほなる夕ぐれなどのふみこそは見所もあらんに、それをのこさせ給ひては、さりとはお心やすき詮のなき事ぞと、恨みがほにの給ふ、もとより人にみせがたくて、深切にかくし給ふべきふみなどをば、かやうにをしひろげ、大まかなる棚などには、よもやうちゝらしてをかせ給ふべくもあらねば、さだめてさやうなるをば、ふかく取かくしてをかせ給ふなるべし、今こゝに有あはせたるは人のみてもさしてくるしからぬとおぼしめす、二の次なる心やすきふみなるべけれど、頭の中將にもどせかさせ給はんとのもたせふり也けり、さすがつよくかくし給ふべき、おあひだからにてもあらねば、かれこれとり出してみせ申させ給ふほどに、頭の中將かたはしより段々に見給ひて、此やうにも又さま／＼なる物どもこそはべりけれど、あて推量に、此ふみはそんなしやうそののならん、これはたれのふみにてはおはせぬかなど、問ひ給ふ中に、ひしどいひあつるもあり、又格別ちがふたるを、大かたそれならんなどとうたがひ給ふもあるを、源氏の君お心の内におかしとおぼせど、それがどうやらのやうにお言葉すくなに、それは大きにちがひたる事など、かれこれまぎらはせつゝ取かくし給ふて仰せけるは、

そなたこそおもしろきふみとも、たくさんにあつめをき給ふらん、すこし見せ給へ、さうありてのうへには、今ひとつの棚の内をも、うちあけて見せまいらせんと給へば、頭の中將申させ給ふは、わたくしかたのには、中を御らんじ所のあるべきふみは、一通も御座有がたくはべらんとて、卑下し給ふつゝ、頭の中將の給ふは

しめやかなる

じつほりとしたるなり

おさ／＼

やう／＼となり

御とのゑ所

源氏の君のおへやなり

れいよりは

いつ／＼よりはなり

のどやかなる

御用すくなくおひまらしきなり

おほとなぶら

油火なり

ふみども

歌書經書などなり

ちかきみづし

おそばなるちがひだななり

ふみしも

えんじよなり

引いて

取いださせ給ふなり

わりなくゆかしがれば

心ふかうゆかしがりて見さがり給へばなり

さりぬべき

さもありぬべきなり

かたわなるべきもこそ

不都合なるべきもぞなり

ゆるし給へば

引かへし給へばなり

かたはらいたしと

小はづかしげになり

をしなべたる

世間なみのなり

大かたのは

大ていむきなるなり

ほご／＼につけて

それ／＼のほどらひに應じて也

をのがじ

相たがひになり

えんすれば

うらみがほにの給ふなり

やんごとなく

人にみせがたくてなり

せちに

深切になり

おほぞうなる

かしひろげおほまかなるなり

みづし

棚なり

うちなきちらし

うちちらしてをかせなり

二のまぢの

二のつきなるなり

かく

此やうにも又なり

心あてに

あてずいりやうになり

それかかれか

此ふみはそんじようそれならんこ

れはたれのふみにてなり

もてはなれたる事をも

かくべつにちがうたるをなり

おもひよせて

大かたそれならんなどゝなり

こそすくなにて

おことばすくなになり

さかく

かれこれなり

そここそ

そなたこそなり

おほく

たくさんなり

つとへ

あつめなきなり

すこしみげや

すこしみせ給へなり

さてなん

さうありてうへにはなり

此づしも

今ひとつのたなの内をもなり

心よくひらくべき

うちあけてみせまいらせんなり

かたく

御座ありがたくなり

女のこれはしもとより

きゝにくき事おほかりまで

女のこれはといふて難非のつくまじきのは、あることかたき物かなど、此ころになりてやうやく合點ゆきさふらふ、眞實なるかたにはあらで、たゞうはべばかりなさけくしく、

かなぶみなどをさらく手ばしかく書なし、ふみをやりたるおりふしの返事に、しほらしげなる歌など、相應によみをこす程などの事は、随分よろしきもおほく見えはべれども、それも、實に手をよくかくも歌をよく讀も、取たて、吟味したる時、それにならずはづれまじく、すぐれたるはいとかたき事にさふらふ、又手かく事も歌よむ事も、わが心得たる事ばかりを自分了見にて、われこそすぐれたりと心じまんして、人をば何もしらぬものゝやうに、おとしめあなどるたちもありて、笑止なるなどもおほくはべり、又おやがゝりにて、秘藏がられあがめられて、未たのもしき窓の内に、奥ふかくそだてらるゝあひだは、みめかたちよくて其心はへも利發なるなど、たゞかたはしを音にのみきつたへて、心をうごかし戀ひしのお事もあり、又みめかたちよくて、そだちも大やうなるわかき娘の、また部屋ずみにて、世間のせわをもしらず、なににも外にまざるゝ事なき内は、物かき歌よみ、又は琴三味線ひきならひ、其外のちどしたる手ずさひをも、きゝどり法問どやらにてすき好みぬれば、師匠なしにもしせんと人まねには、何ぞ一しなもさもとらしくなしおぼゆる事のあるに、その親のもとへねんごろに出入して、常にその娘のていのみる人、縁ぐみなどを取もちがほに、媒口半分とやらにて、そのたらはぬかたをばをしかくしてはいはず、さやうの一しなにてもありぬべき事をば、とりつけ引つけてよささふにはな



しなすに、よもやそのやうにはあらじと、中積りの推量ばかりにては、などかはおもひ消しはべらん、それをまことかど心をつけて世間をみるに、大かたは見をとりするのみにてなんあるべきとて、おぬしの心にもおぼえのある事にや、あゝさてといひ給ふけしきもはづかしけなれば、源氏の君のお心の内にも、右はなしのごとくなる程にこそあらねど、ちとはおぼしあはず事やあるらん、にこゝとなされて、その一かどの事はさてをき、半かどもなきうろりとしたる人はあらんやとの給へば、頭の中將申させ給ふは、それほどならんうろりとしたるかたには、たれかはたまされよりはべらん、とる手もなくみだてなききはと、打あがりすぐれて優々としたるとは、敷おなじやうにすくなくぞはべらめ、しなくらゐたかき家に生まれぬる人は、たゞ内々に寵愛のみせられて、人に見ゆる事ををければ、よきもあしきもかくるゝ事おほく、しせんとやうすもすぐれたるやうにぞあるべき、是は上の品の事也、たゞ中の品とさだむるかたにこそ、その人の心々、面々むきゝの「一かどたてたるすぢもみえて、これはかうあり、かれはさうありと、善悪のわかるべき事かたゝおほからん、下の段といふ分際になりては、格別にをとりたるすぢにて、目にも耳にもたゝぬ事のみぞかしとて、心にのこす事なけなるけしきなるも、源氏の君は心ゆかしとおぼして仰せけるは、其品ゝはいかやうならんぞ、どうしたる所をか、上中下のみつの品に

はえらびわけてはをくべき、たとへば、元來の品たかき家に生まれながら、身はしづみおちぶれて、位ひきく人なみゝにもなきと、又身もどかろき人の、歴々の位にのぼりつゝ、われこそはと高慢がほに家の内をかざりまして、人にまけじをどらじとおもへる、此ふたつのさかひめをば、いかゝわけたるべきと問はせ給ふ處へ、左の馬のかみ、藤式部の悉ふたりつれだちて、御物いみのお伽にとてまいりたり、此馬の頭といふ男は、これも又世間すれたる好色ものにて、辨口の達したるものなるを、頭の中將、幸の所へまいりたりとまちとりて、右の品々を、勘辨しただめよとありて問答し給ふに、きゝにくき事どもぞおほかりける

なんつくまじき

なんひのつくまじきのはなり

かたくもあるかな

ある事かたきものかなとなり

やうゝなん

やうやくなり

見給へしか

合點ゆきさふらふなり

—紫文盤の囀—

はしりがき

かなぶみなどをさらゝと手ば

しかくかきなり

おりふしのいらへ

おりふしの返事になり

心得て

相應になり

それもなり

まことに

實になり

そのかたを

手をよくかくも歌をよくよむもなり

さりいでん

とりたてゝなり

えらびに

吟味したる時なり

もるまじきは  
はづれまじくなり  
をのがじま  
自分了見にてなり  
心をやりて  
心じまんしてなり  
かたはらいなき事  
笑止なるなどもなり  
おやなどたちそひ  
おやがよりにてなり  
もてあがめて  
ひさうがられあがめられてなり  
ほどは  
あひだばなり  
かたかどを  
かたはしをなり  
かたちおかしく  
みめかたちよくてなり  
おほどき  
大やうなるなり

はかなきすさひ  
ちよとしたる手すさひなり  
心をいも  
すきこのみぬればなり  
をのづから  
しぜんとなり  
ひとつ  
一しなもなり  
ゆへづけて  
さもとらしくなり  
しいづる  
なしおほゆるなり  
なれたるかたをば  
たらはぬかたをばなり  
いひかくし  
をしかくしていはすなり  
さてありぬべき事  
さやうの一しなにてもありぬへき  
事をばなり  
つくるひてまればいだし  
取つけ引つけてよささうにはなし  
なすにたり

それしかあらじと  
よもそのやうにはあらじさなり  
そらに  
申づもりのなり  
いかゞは  
なごかはなり  
をしはかり  
すいりやうばかりにてなり  
おもひくださん  
おもひけしはべらんなり  
見もてゆくに  
心をつけて世間をみるになり  
うめきたる  
あゝさてといひ給ふなり  
いとなべてはあられど  
右はなしのごとくなる程にこそあ  
らねどなり  
うちほゝみみて  
にこゝとなされてなり

かたかども  
半かさもなり  
さばかりならん  
それほどならんなり  
あたりには  
かたにはなり  
すかされ  
だまされなり  
とるかたなく  
とる手もなくなり  
くちおしききはと  
見だてなききはとなり  
いうなりとおほゆばかりすぐれたる  
とは  
うちあがりすぐれていうくさし  
たるとはなり  
かずひとしく  
敷おなじやうにすくなくぞなり  
しなたかく  
品くらゐたかき家なり  
もてかじづかれて  
てうあいのみせられてなり

じれんに  
しぜんとなり  
けはいこよなかるべし  
様子もすぐれたるやうにそあるべ  
きなり  
をのがじま  
面々むき／＼のなり  
たてたるおもむき  
一かどたてたるすぢも也  
下のきざみといふ  
しもの段といふなり  
きはなれば  
分際になりてはなり  
ことに  
かくべつになり  
くまなげなる  
心にのこす事なげなるなり  
いかに  
いかやうにならんぞなり  
いづれを  
どうしたる所をかなり

もとの  
元來のなり  
くらゐみじかく  
位ひきくなり  
人げなき  
人なみ／＼にもなきなり  
なほ人の  
身もさかるき人のなり  
かんだちめなごまで  
れき／＼の位になり  
われはがほ  
われこそはさかうまんがほになり  
人にをさらじ  
人にまげじをたらじとなり  
けぢめをば  
さかめをばなり  
こもらんとて  
おとぎにとてなり  
世のすきもの  
世間すれたる好色ものなり

ものよくいひこなれる  
辯口の達したるなり

わきまへ  
勘辨しなり

あらそふ  
問答し給なり

なりのほれどもより

中の品にぞをくべきまで

馬の頭申すはくぼき身のなりのぼりて時めげども、もどよりさあるべきすぢならぬは、世間の人のおもはくにも、さこそは申せ、かろくしきかたにおもひなされて種姓たゞしき人にくらべ見たる時は、なほ格別におもひおどされさふらふ、又元來は歴々のながれなれど、知行奉祿もすくなくて、勝手むきもふまはりになりつゝ、むかし榮華なりし事も、時代につれてうつりかはり、世上よりおもんじたりしひきもおとろへて羽のきかざる程になりくだりぬれば、心はもとよろづよりし時の心なれども、何かともに事たらぬがちなりゆき、諸事につけてわるびれたるしかたども、出くる事也、此二とをりを判断して見さふらは、中の品とさだめをきはべるべし

さあるべき  
さあるべきなり  
おもへる事も  
おもはくにもなり

さはいへど  
さこそは申せなり  
猶ことなり  
猶かくべつにおもひおとされなり

もとほ  
元來はなり  
やんごさなきすぢなれど  
歴々のながれなれどなり

世にふるたつき  
知行奉祿也

おぼえ  
世上よりおもんじなり

わろびたる事ども  
わろびれたるしかたどもなり

とき世うつるひて  
時代につれてうつりかはりなり

心はもとよろづよりし時の心なれどもなり  
ことほりて  
判断してなり

ずりやうといひてより

ころほひなりまで

又申すは、受領といひて、諸國の司となり、他國の事にかゝりあひて勤る身は、どれとても品は似たりくにてさだまりたる中にも、又時の盛衰にもより、分限にて甲乙の段々あれば、これらのかたには、中の品の内にて、ちと様子よきをもえらび出しぬべくぞあらん、今時も證議いたしたならば、間々これあるべき時節也

ずりやう  
受領なり  
ひとのくに  
他國なり  
かゝつらひいとなみて  
かゝりあひてつとむるなり

きざみく  
段々なり  
けしうはあらぬ  
様子よきなもなり  
えりいでつべき  
えらびだしぬべくなり

ころほひ  
時節なり

なま〜のかんだちめより  
おひ出るもあまたあるべしまで

又申すは、此ごろなりのぼりて、なまじぬなる上達部の歴々よりも、非参議の四位なるほどの、世上のはぶりも人がましく見だてあり、元來の種姓もいやしからぬが身のほごをも、よろづ心やすく苦勞なしたるは、さつぱりと奇麗なる風議にぞおもはれはべる、勝手むきの暮しも又不足なる事なきまゝに、ちと分限不相應なる事をも、さのみひかへ遠慮せず、衣服より諸道具にいたるまでりつばにして、寵愛せられたる娘などの、中々おとしめあなごりがたく、そだち出たるもあまたあるべし

なま〜の

なまじぬのなり

世のおぼえ

世の上のはぶりなり

くちおしからず

人がましく見だてありなり

もとのれざし

元來の種姓なり

やすらかに

心やすくなり

もてなじふるまひたる

なしたるはなり

かつらかなりや

さつぱりときれいななるなり

家の内たらはぬ事なごはたなかある

勝手むきのくらしも又ふきそくな

はぶかす  
ひかへ遠慮せずなり  
まばゆき  
りつばなり  
もてかしづける  
てうあいせられたるなり  
おひ出るも  
そだちいでたるなり

宮づかへに出たちてより  
中將にくむまで

又申すは、禁裏御奉公に出で、おもひよらず玉のこしにのるやうなる例もおほくぞさふらふなご、申せば源氏の君きこしめして御母御息所の御身の人よとおぼせど、そしらぬがほにて、とかくたゞ所帯富貴にして、にぎやかなるかたそよかるべきよと、いひまぎらはしてわらはせ給ふを、頭の中將は、色げなき律儀なる人のいひさふなる事を仰せらるゝ事や、其意を得ぬとてにくかり給ふ

みやづかへ

御奉公なり

おもひがけぬさいはいとりいづる

おもひよらず玉のこしにのるや

うなるなり

ためし

例なり

すべて

とかくたゞ也

にぎは、しきに

所帯富貴にしてにぎやかなるなり

こと人の

色げなきりちぎなる人のなり

いはんやうに

いひさふなる事をなり

心えず

其意を得ぬとてなり

もどのしな時よのより

いふかひなくおぼゆべしまで

又申すは、元來の品も時のはぶりも、かた〜ともに打そろひて、いはう様もなきかたな

るに、内證ないしょうのしかたやうす、何かにつけ不足ふそくならんは、とかくの批判ひはんに及およはず、何なにをして此やうにはそだち出いけんと顔かほが見みられて、ふがひなき事ことにぞおもはるべき

もこの

元來もとよりのなり

時ときのおぼえ

時ときのはぶりなり

うちあひ

うちそろひてなり

やんごさなき

いはうやうもなきなり

うち／＼の

内證ないしょうのなり

なくれたらんは

不足ふそくならんはなり

もてなしけはひ

しかたやうすなり

さらにもいはず

とかくのひはんになよばすなり

いふかひなく

ふがひなき事ことになり

おひいでけんご

そだちいでけんとなり

うちあひてすぐれより

打うちをきはべりぬまで

又申またまをすは、右みぎのごとくにて、内外ないがいともうちあひそろひつゝすぐれたらんは、これこそもとよりさうあるべき事ことよとおもはれ、其そのはづの道理だうりにおとしつけて、さのみめづらしき事こととおどろかしき心こころも有あまじ、これらはわたくしついでついでの批判ひはんに及およぶべきすぢならねば、上かみが上かみといふ品しなにして打うちをきはべりぬ

ここはり

道理だうりなり

さるべき事ことと

さうあるべき事ことよとなり

さて世よにありとより

心こころとまるわづなるまで

又申またまをすは、さのやうなるていにて、世よにあるよとも人にしられず、物ものさびしくあれはてたる、むぐらの門かどのおもひがけもなきあたりに、うつくしげなる人のとちこめられて居ゐたらんこそ、かぎりなくめづらしくはおもはれはべらぬ、どうしては又、こうした所ところにかやうにてありけん、おもひの外ほかなる事ことなれば、ふしぎなるまでに心こころのとまる事ことなるべき

おぼえて

おもはれてなり

なにかしが

わたくしついでついでのなり

さて

さのやうなるていにてなり

あはれたらん

あれはてたるなり

おもひの外ほかに

おもひがけもなきあたりになり

らふたげならん

うつくしげなるなり

とちられたらんこそ

とちこめられて居ゐたらんこそなり

いかで

どうしてはなり

かゝりけん

かうした所ところにかやうにてはありけんとなり

おもふよりたがへる事ことなん

おもひの外ほかなる事ことなればなり

あやしく

ふしぎなるまでになり

なべき

なるべきなり

父のとしおひより

ものもいはすまで

又申すは、てゝおやのとしはよりて、じむさげにふとり過、兄なるものゝにくげなるか  
 ほつきにて、此人々の子や妹ならば、ごちに似てもさぞ悪女にてぞあらんと、おもひやる  
 このましげのなきねやの内、そだち出しむすめの、われこそときつうじまんして、手か  
 き歌よみ、其外物の音など、繪かき花むすび等にも、人なみともいはんほどに、よしあ  
 りげにもしおぼえてたらん、その一しなのかたはしにても、おもひの外なる事なれば、な  
 ごか心にくからざらん、何の疵もなく、すぐれたりといふかたの吟味にこそは及ばざらめ、  
 さやうなる事のかたかごあるにては、すてをきかたき事なるをといふて、式部がかほを  
 見やれば、式部はわが妹どもの、よろしき取沙汰あるをおもひての給ふにやと、推量し心  
 得やしたりけん、ものもいはで、むづ／＼としてぞ居たりける

ち、  
て、おやなり

としおひ  
としはよりてなり

物むつかしげに  
じむさげになり  
せうとの  
兄なるものなり

おもひやりこそなる事なき  
おもひやるものましげのなきな  
いそいたく  
きつうなり

おもひあがり

心じまんしてなり

はかなくしいてたることわざ

手かき歌よみその外物のねなど繪

ゆへなからず

よしありげになり

かたかどにても

かたはしにてもなり

いかゞ

などかなり

おかしからざらん

心にくからざらんなり

えらびにこそ

吟味にこそなり

さるかたにて

さやうなる事のかたかごあるにて  
はなり

きこえ

さりきたなり

心うらん

心得やしたりけんなり

いでや上のしなとより

猶あくまじくみえ給まで

源氏の君は、御簾中の御うへをおぼしあはさせ給ふてにや、さても／＼上の品とおもふに  
 だに、心にあふたるはありがたげなる世を、まして中下の品はさぞあらんとおぼすなるべ  
 し、白きおひとへ物のやは／＼としたるに、御直衣ばかりをしどけなく紐までもとさすて  
 へ、ねころび／＼ける御すがた、ともし火のかげにてりあひて、いと／＼なみ／＼ならず、  
 うつくしう見えさせ給ふは、女になりかはりて見奉らまほしき程也けり、此御かたのおた  
 めに對しては、上か上の品をえらび出してあてがひ奉りても、まだ不足なるべきほどにぞ  
 みえさせ給ふ

いでや  
 さてもくなり  
 かたげなる  
 有がたげなるなり  
 みぞ  
 おひさへものなり  
 なよる  
 やはくこしたるなり

そひふし  
 れころびなり  
 ほかけ  
 さもしびのかけになり  
 めでたく  
 なみくならずなり  
 此御ためには  
 此御かたのおために對してはなり

えりいで、  
 えらび出してたり  
 あくましく  
 不足なるべきほどにぞなり

さま／＼の人のうへより

さたまりがたきなるべしまで

さま／＼の人のうへはさどもをかたりあはせつゝ、馬の頭申すは、世間の大概をよそ／＼にして見るには、すがたかたちより心だてにいたるまで、何にてもおほせべきとがはなきよとおもふ女も、妻となしてわが物ぞと、一生の程を添ひたのむべきをえらびたらんには、これほどおほき女の中にも、これこそよけれどえおもひさだむまじかりける、たとへば男がたにて申さば、公儀へつとめつゝ、しかとしたる世のおもしろもなるべき、眞實なる器量の人をとり出さん事は、中々かたかるべきかし、さはれど、よしはさやうなる人ありて、何ほど才智ありかしこき人なればとても、たゞひとりふたりの分別了簡ばかりにて、

世の政事取をこなふべき事にあらねば、上だちたる人は下よりあがまへたすけられ、下たる者は上たるかたのめぐみにしたがひなびきて、さかくに徳行のひろき人に、たがひに時宜あひしてつとむる事ならん、しかるにわたくしていの、手のひらほどなる家の内にてさへ、女あるじとなしてみるべき、其人ひとりをおもひめぐらすに、たらはぬがちならば、何かにつけあしかるべきのみならず、事によりふとして、大事ともなるべき事なにかた／＼おほければ、こゝがよしとおもへばかしこころはず、あちらをさもとらしとみれば、こちに又氣のどくなるすぢもまじりて、たゞすぢがふ事のみなれば、せめて大ていむきにて、それほどなれば、先堪忍ごろよと、おもふ人さへありぬべきはすくなきを、かれこれと申せば、何とやら物ごのみらしききこえさふらふが、さら／＼以て、好色めけるあだ心にて、人の善悪をおほく見あはせんとの、このみにては、さふらはねども、ひとへに一生涯そひはつべき、縁の妻とおもひさだめたきばかりにてこそさふらへ、おなじくはわが力をそへ、をしなをし引つくるふべき所もなく、諸事才勘にて、内外の事どもにうちまかせをくほどに、心にかなふやうなる女もやとえらびをめても、それも又おもふやうにはさだまりがたきなるべし

人のうへどもを  
 人のうはさどもをなり  
 おほかたのよにつけて  
 世間の大がいななり  
 おほかる  
 これほどおほきなり  
 おのこの  
 男がたにてなり  
 おほやけに  
 公儀へなり  
 つかうまつり  
 つさめつゝなり  
 はかしくしき  
 しかさしたるなり  
 世のかため  
 世のおもしなり  
 まことのうつはもの  
 眞實なる器量なり

されど  
 さばあれどなり  
 世の中をまつりごちしるべき  
 世の政事とりおこなふべきなり  
 ことひろきに  
 徳行のひろき人になり  
 仰つるふらん  
 たがひに時宜あひしてなり  
 せばき家の内  
 手のひらほごなるいへの内なり  
 あるじとすべき  
 女あるじとさなしてみるべきなり  
 とあれば  
 こゝがよしとおもへばなり  
 かゝり  
 かしこそろはすなり  
 あふさきるさにて  
 すりちがふ事のみなればなり

なのめに  
 大ていむきにてなり  
 さて  
 それほどなればなり  
 すき／＼しき心のすきひにて  
 好色めけるあだ心にてなり  
 人のありさま  
 人の善惡をなり  
 あまた  
 おほくなり  
 よるべと  
 縁のつまとなり  
 ちからいり  
 ちからをそへなり  
 えりそめつる  
 えらびそめてもなり

かならずしもより

所せくおもふ給へぬだにまで

馬の頭又申すは、ひつしりと、わがおもふ心のやうにかなはぬ妻女なりども、見そめなれ  
 そめしちぎりのほどをすてかたくおもひて、よそ心なく、此妻女ひとりにおもひとまる人  
 は、眞實なる心の人やとみえ、さやうにておもひとまる大切がらるゝ女の身までも、さだめ  
 てどこぞによき所ぞあるらめと、わき目からも奥ふかく、推量せらるゝ也、さはあれども、  
 世間の有様を見あつめはべるに、何といたしてか、心になふやうにおもひをよぶもはべ  
 らず、又これこそゆかしと存するもさふらはぬ也、御前がこの上なき品の御えらびには、  
 ましていかがやうのをむむきの人が、御相應なる御妻女とも申されはべらん、御身もちも  
 必まゝならば、世間のせわをも、事ひろくも御ぞんじなされぬには、勿論の事なり、わ  
 たくしごときのかろきものは、身もちもふりまはしやすく、さして遠慮會釋と申す事もな  
 く、所せばからず世間ひろく、方々どかけまはり心まかせなる身のうへにてだに、おもふ  
 やうなる事はなき世にこそさふらへど申す

かならずしも  
 ひつしりさなり  
 物まめやかなりとみえ  
 眞實なる心の人やともみえなり

さて  
 さやうにてなり  
 たもたる、  
 おもひ大切がらるゝなり

女のため  
 女の身までもなり  
 心にくく  
 おくふかくなり

— 紫文盤の囀 —



なしはからるゝ

すいりやうせらるゝなり

されど

さはあれどなり

何か

何といたしてかなり

君たちの

前がたのなり

いかばかりの

いかやうのおもむきのなり

たぐひ給はん

御相應なる御妻女ともなり

所せくおもふ給へぬだに

所せばからず世間ひろくなり

かたちきたなげなくなり

はじめのなんとすべしまで

又申すは、むまれつきのかたちきたなげにもなく、わかくさかりなる女の、自分の心だしなみに、何かの批判にもあはじとて、ちりも灰もつかぬやうにさつはりど身をもちなし、ふみをかけども大やうに、文體なども無調法らしくなきやうにと言葉をえらび、墨つきまでもおくふかきさまにおもはせぶりなれば、どうした人やらとゆかしさに、又たしかにあひ見たき事哉と、中たちをたのみてとり入れど、さしてもなき事を、様子ありげにもたせぶりするも氣のどくなるを、かれこれとして、やう／＼障子ごしなど、わづかにこゑのきこゆるあたりまで、しのびおほせていひよりぬれど、物いふ聲もはづかしげに、口の内にふくみて言葉すくなるは、色めきたる心の底を、いとよきたしなみかくす也けり、さあ

るほどに、なよ／＼と内氣なるを、まことにをなごらしき人やと見れば、あまりなさけ／＼らしきかたに引こめられて、とりよりの何かとしたひがほする人を、さすがあいさうなげにもえつきはなさで、しほらしやかにしなすほどに、つまる所は、ちよろりとあだ／＼しきかたになびきて、つゝ色めきたる心のげをあらはす、これぞ女の第一のひなんとすべし

わかやかなるほどの

わかくさかりなる女のなり

をのがじは

自分の心だしなみになり

おほとかに

大やうになり

ことえりをし

言葉をえらびなり

ほのかに心もとなくおほはせ

おくふかきさまにおほはせぶりな

ればなり

さやかに

たしかななり

見てし哉と

あひ見たき事かなさなり

すべなく

さしてもなき事をなり

またせ

もたせぶりなり

いきの下に引いれ

口の内にふくみてなり

ことすくな

ことばすくななり

もてかくす

たしなみかくすなり

なよひがに

なよ／＼とうちきなるをなり

女しと

なごらしき人やとなり

とりなせば

とりよりのなり

あだめく

あだ／＼しきかたになびきてなり

はじめのなんと

第一のひなんとなり

ことが中により

いか／＼はくちおしからぬまで

又申すは、かたのごとくなる心だて氣はへ、さま／＼のかはりめあるが中に、當分のしのびあひなどにはあらで、さだめたる妻どもみるべきほどなる女の、心ざしのあさ／＼しきは、夫の家の内どりはからふかたをば二の次にし、もつとも世間の事、物のあはれをもとくと心得すごす程にて、随分利發なれば、花紅葉月雪などのおりにふれたる、なさけ／＼しきうたよみなど、風流めけるにのみ心をひけて、たゞ身のまはりなりふりを引つくるふなど、いなかたへばかりすゝむ心なるほどに、さやうにはなくてよからん事をと見るのもあるに、又一かたの女は、あまり律義すぎて、夫を眞實に大切がる心のすぢをたてゝ、髪かたちなりふりをつくるはん事どもせず、髪のかみのちらけたるをも、つゝみ耳にはさみてをきがちに、むまれつきはすぐれざれども、たゞ一むきに所帯むきをかひ／＼しく、尻つまげぬばかりに身をうち入れて、取まかなふ事にのみ心をつくす女あるじは、勝手のためには、よかれども、此夫の朝夕の出入につけても、おもて向内證の事人の世わたり善惡ともに、目にもとまり耳にもきゝふらす事をも、うと／＼しきよその人にはわざ／＼にはなし出物がたりすべし事にもあらねば、したしきわが妻の、かやうのはなしをもきゝわけて、それはどうしたる事ぞ、これは又笑止な事やなども心得しらん、かたりもあはせばやとおもへど、右のやうなる氣はへの人は、中々どくときゝわくまじければ、是非もなき事やとおも

ふにつけては、おかしくもなり涙もしほるゝ事ぞあるべき、もしは何の益もなき事ながら、公用向に對してなげかはしき事もあるか、又は傍輩友だちの中のあいさつに、さりとほきよくもなきしかたやとららむるやうのわけなど腹だゝしき事もありて、心の内にのみ、むや／＼とおもひあまる事どものおほからんをも、しみ／＼ときゝわけて、げにあはれどもつともどもいひなだむべき妻ならねば、きかせ力もなしとおもへば、うちそむきわき見なごせらるゝにありし腹だゝしかりし相手のうへなごも、人はしらぬ事ながら、おもひ出してあざわらひなごもし、又わが身のうへの述懐めける事につけて、あはれやなどゝひとりごとをするを、かのつまもとよりうつかりひよんとしたるかたぎなれば、何のおかしき事があるやら何のつらき事があるやら、氣ちがひのやうな人がなごおもふたるかほにて心あさげにうちあふのきて、夫のかほをながめ居たらんは、何と見だてなくは御座りますまじきかと申す

こゝが中に  
さま／＼のかはりめあるが中に  
うしろみのかたは  
いへの内とりはからふかたをば  
はかなきつゝ  
花もみち月雪などのおりにふれた  
るなり  
なめなるまじき  
しりすぐし  
なさけあり  
なさけ／＼しき歌よみなどなり  
さだめたるつまをもみるべきなり  
心得すごすほどにてなり

おかしきにすゝめる  
 いなかたへばかりすゝむなり  
 まめくしきすぢ  
 眞實に大切がる心のすぢなり  
 みゝはさみがちに  
 びんのかみのちらけたるをもつる  
 耳にはさみてなきがらになり  
 びさうなき  
 むまれつきはすぐれざれどもなり  
 いへどうじの  
 女あるじはなり  
 ひとへにうちとけたるうしろ見ばか  
 りをして  
 一むきに所帯むきをかひんくしく  
 しりつまげぬばがりに身をうちい  
 れてとりまかなふなり  
 おほやけわたくし  
 おもてむき内しよの事なり  
 人のたゝすまぬ  
 人の世わたりなり  
 よきことあしきこと  
 善惡ともになり

うごき人に  
 うさくしきよその人にはなり  
 わざと  
 わざくになり  
 うちまればんやは  
 はなし出ものがたりすべき事にも  
 あらねばなり  
 ちかくてみん人の  
 したしきわがつかのなり  
 おもひしるべからんに  
 心得しらんになり  
 うちもふまれ  
 おかしくもなりなり  
 さしくみ  
 こぼるゝなり  
 あやなき  
 何のふきもなき事ながらなり  
 おほやけはらたしくて  
 用向又は傍輩友だちの中にはらた  
 しくしき事もありてなり

心ひとつにおもひあまる  
 心の内のみむやくとおもひあ  
 まるなり  
 なにかはきかせんさ  
 きかせ力もなしとなり  
 ひさりことするをなり  
 ひさりことするをなり  
 何事ぞなど  
 何のおかしき事があるやら何のつ  
 らき事があるやらなり  
 あはつかに  
 心あさげになり  
 さしあふぎ  
 うちあふきてなり  
 いかゞ  
 なにとなり  
 うちおしからぬ  
 見だてなくはなり

たゞひたぶるにより

猶くるしからんまで  
 又申すは、たゞ一向に、ほうなく大やうにてむくやかならん人を、事たらぬかたをばをし  
 へ、ゆきどいかなやうの所をも心をそへて、とかくと引つくりひてはなどかそひ見ざらむ、  
 あまりほうなすぎで、たとひあれにてはどうかあらんと、物ごと心もどなきやうの事はあ  
 りとも、をしへなをしたらば、何事もうちどゝのふべき心ちぞすべきを、げにとはさしむ  
 かひて、一所に居て見ん時には、それともほけくとしたるかたにて、事のゆきどい  
 ぬまでの事は、とがめべきにもあらず見ゆるすべけれども、いつかたへぞ遠だちはなれて居  
 る節などは、どうかしてと所用の事をもいひやるに、その事のさし引、又は何にてもなす  
 べき事の、當分の事にもせよ、しかとしたる事にもせよ、たゞむくやかに人よきばかりに  
 て、わが心からのみこみ合點してなしたすべきにてもなく、とくと了見のいたらざらん  
 は、念なくたのもしげなからん、これもひとつのがとも申すべきか、いか様に、前の二  
 とをりの女の身のうへよりは、猶又心ぐるしかるべからん

ひたふるに  
 一向に也  
 こめきて  
 ほうなく大やうにて也

やはらかならん  
 むくやかならん也  
 心もとなくとも  
 心もとなきやうの事はありとも也

なをし所ある  
 なしへなをしたらばなに事にもう  
 ちとゝのふべき也  
 げに  
 げにさほ也

さて  
それどもに也  
らうたきかたに  
ほけしとしたるかたにて也  
つみゆるしみるべきな  
とがめべきにもあらず見ゆるすべ  
けれども也  
たはなれては  
となだちはなれておるせつなどは  
もてつつけべきわざをやまで  
つねはすこしそばしくより  
もてつつけべきわざをやまで

さるべき事  
ごうかかうかと所用の事也  
しいてんわざ  
なすべき事也  
あだ事にも  
當分の事にもせよ也  
まめ事にも  
しかさしたる事にもせよ也  
わが心とおもひうる事なく  
わが心からのみこみがつてんして  
なはたすべきにてもなく也  
ふかきいたりならんは  
とくと了見のいたらざらんは也  
くちおしく  
れんなく也

又申すは、むまれつきかたちのすぐれぬ女は、ふだんはちと心にもあはず、へだてしくしきやうなるもごうやらしたるおりふしにふとしほらしき心ばへなど出ばへして、これも又すてられはせぬぞとおもふやうの事もありかしなごいひて、さすが奥そこなき物いひなる馬のかみも、此品々をしかとさためかねて、さてく入りくみむづかしき物やとて、きつううちあげみつ、今はたゞとにかくに、氏種姓よりはじめ、其身の品にもよらず、もつどもなりより顔かたちの善悪は、猶更申すにも及ばず、鈍にもなく、意地わるげなるかた

たにてさへなくは、たゞ一圖に眞實に、しづかならん心ざしの妻女をぞ、一生そひはつべきたのもし人にはおもひをくべかりける、此外は種姓もゆへありうしろだてもよしありて、伏藏なき心ばへのうちをひたらんをば、内ほりだしとよろこばしきかたにをもひ、よしはちとなごたらぬ事あらんをも、しめて毛を吹疵をもとめ、吟味をくはふべき事にもあらじ、たゞうしろ氣づかはしき事なく、心ゆるびなる所だにつよくは、うはべのあいさうは、しせんとつくべき事にぞさふらふをや

つれば  
ふだんは也  
そばしく  
へだてしくしき也  
心づきなき  
心にもあはず也  
くまなき  
おくそこなき也  
いたく  
きつう也  
うちなげく  
うちあぐみつ也  
さらにもいはい  
猶更申すにもよばず也  
くちおしくれちけがましきおほえだ  
になくは  
どんにもなくいちわるげなるかた  
ひとへに  
一づに也  
物まめやかに  
眞實に也  
よるべぞ  
さいじよなぞ也  
つるたのみ所には  
一生そひはつべきたのもし人には  
也  
此外は也  
ゆへよし  
すじやうもゆへありうしろだても  
よしありて也  
心ばへ  
伏藏なき心ばへ也  
すこしなくれたるかた  
ちさなどたらぬ事也  
あながちに  
しめて也

もごめ

けなふききすなもとめ也

うしろやすく

うしろきづかはしき事なく也

なまきは

あいまうは也

くはへじ

のどけき所だに

をのつからもてつけつべきわざ

吟味なくはふべき事にもあらじ也

心ゆるびなる所だに也

しぜんとつくべき事にそ也

えんに物はちしてより

心をかれじやはまで

又申すは、内氣にて心ばへやさしげに見ゆる女の、物はづかしまゆるが、うらみいふべき事をも、しらぬがほに随分堪忍づよく、うはべをは色にも出さず。何事もかまはぬていつくろひなし、口へは出さで、心の内におもひあまる時は、以の外あらけなきいひをきをし、あはれめきたる歌などよみをき、思出になるべきかたみなどをとゞめをきて、ふかき山陰や、世間とをき海づらなどに、こつそりとかくれむすやうになりはべる、わたくし幼少にてはべりし時、女房などのむかしはなしの物の本などよみしに、かやうなるをもむきの所をきゝては、いとあはれになくして、さてく心ふかき女哉と、なみだをもながしきふらひし、たゞ今にておもひあはすればかるくしくわざとのこしらへものゝやうにてよからぬしかたぞおもはれさふらふ、心ざしふかく大切がる男を置て、よしはたとひ目のまへに、つらしとおもふやうの事ありども、夫の深切なる心をもしらぬやうに、何事

ぞや逃かくれて、人には肝をつぶさせ、さらば男の心を引みんとするならんづれども、つゝ末ながきわかれとなりて、物をもひのもどくなるは、さうなくともすむ事を、あきまなきしかた也、さうありて、かの出ゆきしきにて、げにまことに、そのおぼしめし御もつどもぞや、お心ふかき事やなど、ほめたてられて、おちやうぎにのり、いよくわれとわがでに道理をつけ、腹たゝしさもそひつゝ、あつはれよくこそかうはしたれど、自慢心のすゝみぬれば、さうはといふて、ちよろりと髪をも切りぬるぞかし、おもひたつはじめは、心もさつはりとしたるやうにて、小ばらだゝしき世の中へは、又ど立かへりかゝるべきとも、おもはで、をこなひすましたる顔なる處へかねて心やすきしる人のたづね来て、なうくあらかなしの事や、家出させ給ふさへあるに、まだわかき御身そらにて、かうまでは又などかおぼしたちにけるよなどいひ、又一向に、きこえぬしかたぞともいひうらみもせず、今にもおもひはなれもせぬ、夫の、此ていに成たりときつつけて、おりくおもひ出つゝ、涙をもおどせば、その男のそばにてつかはるゝ女房や、まへく召つかひしばゝなどの尋ね来て、殿御のお心は、そこのおぼしめしとはちがひて、今も猶ひた物に懸ひしたはせ給ふて、あいらしくおはする物を、あつたら御身をかうはならせ給ふ事などいふに、かのはさみしひたい髪をさぐりつゝ、面目なく心ぼそくもなりて、なかぬば

かりにまみをしばめつゝ、随分堪忍して、見れども、涙のこぼれそめたれば、おりふしごと  
 とにえおもひきりかねて、後悔千萬なる心のおこるをば、いかな慈悲ふかきお佛も、かへ  
 つて、比興なる心底やと、つばき吐せさせ給ふべければ、世の中に濁りにしみたりし大俗  
 の身の時よりも、此生道心は浮びかぬのみならず、かへりては三悪道にも流轉すべくぞ  
 おもはるゝ、たどひたえせぬ宿縁ふかくて、此うへにても夫のたづね出してつれかへり、  
 厄にもなさずして添ひたりとも、よくもくかうはふりすてたりしよと、夫の心に當分  
 らそれをおもひたしたらば、うらめしきふしとあらざらんや、あしくともよくとも相そ  
 ひはてゝ、どうしたる節にもかうあるきざみをも、そのまゝにて見過したらんこそは、  
 ちぎりふかく、あいらしき事ならん、右のやうなる女をば、男の心には、あの氣だてにて  
 は、又もや此やうなる事をも仕出さんかど心もとなくおもひ、女の心には又、夫のかくね  
 んごろらしくし給へども、下心には何ぞかおもひ居給ふらんとおもふにぞ、兩方どもに一  
 生涯の間たがひにうたがはしく、心を加ずにはあらし物をや

えんに  
 内氣にて心ばへやさしげにみゆる  
 物ばちして  
 物ばつかしまゆするが也  
 見しらぬさま  
 しらぬがほに也  
 しのびて  
 かんに入づよく也  
 うへはつれなく  
 うはべをば色にもいだしす也  
 みさほつくり  
 何事もかまはぬていにつくろひな  
 し也

いはんかたなく  
 もつての外也  
 あらきこそのは  
 あらけなきいひをきをし也  
 あはれなる  
 あはれめきたる也  
 しのばるべき  
 おもひでにもなるべき也  
 世ばなれたる  
 世間となき也  
 はいかくれぬかし  
 こつそりとかくれすむ也  
 わらにははべりし  
 幼少にてはべりし也  
 物がたりよみし  
 むかしばなしの物の本などよみし  
 也  
 缺さらひたる  
 わざとのこしらへものゝやうにて  
 也  
 人の心を  
 夫の深切なる心をも也  
 見しらぬやうに  
 しらぬやうに也  
 人をまどはし  
 人にはきもなつぶさせ也  
 心をもみんと  
 男の心を引みんさ也  
 ながき世の物おもひとなる  
 未ながきわかれとなりて物おもひ  
 のもさなる  
 やがて  
 ちよろりさ也  
 あまになりぬかし  
 かみをもきりぬるぞかし也  
 心もすめるやうにて  
 心もさつぱりとしたるやうにて也  
 よに  
 世の中へ也  
 かへりみすべくも  
 たちかへりかまはるべきとも也  
 いで  
 なふく也  
 あな  
 あら也  
 かくはた  
 かうまで又也  
 あひしれる人來さふらひ  
 かれて心やすきしり人のたづねき  
 て也  
 ひたすらに  
 一向に也  
 うしともおもひはなれぬ  
 きこえぬしかたぞともいひうらみ  
 もせず今にもおもひはなれもせ  
 ぬ也  
 おとこ  
 夫也  
 つかふ人  
 男のそばにてつかはるゝ女房也  
 ふるごたちなど  
 まへへくめしつかひしはなど也  
 君の  
 そのこの也  
 あはれなりけるものを  
 あいらしくおはするものを也

あたら  
あつたら也  
あへなく  
面目なく也  
うちひそみぬかし  
なかぬばかりにまみをしほめつゝ  
也  
しのぶれと  
すいぶんかんにんしてみれども也  
えれんじえず  
えおもひきりかれて也  
こやしき事とおほかめる  
後悔千萬なる也  
中々  
かへつて也

心ぎたなしと  
ひげふなる心底やさ也  
にこりにしめるほどよりも  
にこりにしみたりし大俗の身のと  
きよりも也  
なまうがびにては  
なま道心はうかびかぬのみなら  
す也  
あしき道にもかまよひぬべく  
三悪道にもるてんすべく也  
すくせ  
宿縁也  
あさからで  
ふかくて也  
たづねたりたらんも  
そひたりとも也

やがて  
當分から也  
そのおもひ出  
それをおもひだしたらば也  
さあらんわりもかゝらんきさみをも  
どうかしたる節にもかうあるきさ  
みをも也  
あはれならめ  
あいらしき事ならん也  
われも人も  
兩方ともに也  
うしろめたく  
うたがはしく也

又なのめにより

たえぬべきわざ也まで

又申すは、又あひそひ年比をへて後、ちとあき心つき、半々に見すて、外へ心のうつる  
かたあらん男を恨みて、そのけしきを色にも出し、はらだちて離別せんなどは又、畢竟わ

がまゝなる心にて、我をたてがほも仔細らしくぞきこえん、よし夫の心はうつろふかたあ  
りども、見そめあひそめし、そのむかしの心ざしをいとおしとおもはゞ、いふてもわれは  
本妻なる物をど、そのかたをたてにとりて、もどより見すてらるべきはづもなしと、何事  
も堪忍してありぬべき事ぞ、此やうなるごしめきのあひだが大事の分別どころ也、よちと  
したらば中たえぬべき事也

なのめにうつろふかた  
半々に見すて、外へ心のうつるか  
た也  
けしきばみ  
色にもいだしはらだちて也  
そむかん  
りべつせん也

はた  
又也  
なごがましかりなん  
がたてがほなる也  
さるかたのよすがに  
そのかたをたてにとりて也

さやうならん  
此やうなる也  
たじろきに  
ごしめきのあひだが也  
わざなり  
事なり也

すべてよろづの事より

中將うなづくまで

又申すは、惣じてよろづの事かごひしなく、たどひ男のかたには不届ありて、かくし忍ぶ  
をきこえぬ事とおもひ、心の内には恨みはらだしくども、顔の色をやはらげつゝ、その  
事のすちをも、ちどはしりたるていにして、何となくさやうにはなきはづぞなご、しど

くどいひほのめかし、うらめしとおもふしありども、にくぶりにもなく、男の心にあ  
 たらぬやうにさらくどいひなごせば、それにつけてはおごとも、あはれや尤やどいたみ  
 入る心もまさりぬべし、おほくは男の心も、その女のいひかたしかたによりておさまりも  
 すべし、しかるに右のごとくなる男を、何ともしやう事もなき事よごなまざどりがほに、  
 あまりかいしきかまはぬやうにしなし、ちこはいふてもみるべき事なれども、何をいふて  
 も、かへるのつらに水をかくるやうなれば、いらぬものよごてうちゆるし、そちのまゝよ  
 と見はなしたるも、かの男の心には、やかましくめんたうなる事なければ、やうく心や  
 すやおもひ、よそ外の目にも、大やうにねだみ心のなき人やと様には見ゆれども、さう  
 ばかりにしてゆかば、あげくには、しせんと男にかるしめらるべき事にぞおもはればべる  
 かし、これはたゞ、つながぬ舟のおのれが心まかせにうかれたりよひて、よるべきためぬ  
 やうなるしかたを、ぬくくど男の心次第にしてをかんは、あるまなき事にこそよふらへ、  
 さうでは御座りませぬかといへば、頭の中將もつどもとてうなづき給ふ

すべて  
 惣じて也  
 なだらかに  
 かどひしなく也  
 はんすべき事をば  
 うらみはらだしくとも也  
 見しれるさまに  
 ちこはしりたるていに也  
 にくからず  
 にくふりにもなく也  
 かすめなきは  
 男の心にあたらぬやうにさらく  
 といひなごせば也

わが心も  
 おとこの心も也  
 みる人から  
 女のいひかたしかたによりて也  
 むけに  
 かいしきに也  
 うちゆるべ  
 うちゆるし也  
 みはなしたるも  
 そちのまゝよとみはなしたるも也  
 らうたきやうなれど  
 大やうにねだみ心のなき人やと様  
 には也  
 をのづから  
 しぜんと也  
 かるきかたにぞ  
 かるしめらるべき也  
 おほ也  
 おもはれ也  
 うきたるためし  
 うかれたまよひて也  
 あやなし  
 云きもなき也  
 さははべらぬる  
 さうては御座りませぬか也

さしあたりてより  
 あへしらひる給へりまで

頭の中將の給ひけるは、右はなしのをもむきをさしあたりておもふに、かたち心ばへとも  
 におもしろき所あり、心ざしやさしくあいらしとおもふにつけて、氣にも入り他事なくお  
 もふ女のあらんに、その女の心には男の身に何やらひが事もあるかのやうにおもひて、さ  
 りどはたのもしげなき人やとうたがふ事あらんこそちよとしたる事のやうなれども大事な  
 るべけれ、もつともこちの心にはあやまちなくて、何をいな事をいふやらど、しらぬがほ  
 に見すごさば、女も得心し、おもひかへしてもなごか見なをさざらんとはおもへど、それ  
 ととも又、男のかたにちとは不届のなきと、口奇麗にばかりはいはれじなれば、さすが何く



はぬがほもしがたからんほどに、うたがひ通さるゝのみぞおほからん、たゞにもかくにも、男のかたにはたがふ事あらんども、心ながく見こらへんより外に、まさる心はあるまじかりけりとして、下心には、お妹姫君は、此さだめによくかなひ給ふよとおぼし給へば、源氏の君ははや合點なされて、きかぬがほせさせ給はんとてにや、そらねいりして御あいさつもなされ給はぬを頭の中將、ふといひだして何とやら手もちなく、心氣なる事にぞおほしける、馬の頭は、物さだめの頭取也といふたやうに、物しり顔して引ひろがりて居たり、頭の中將、此判斷どもをきくはてんとおぼしたれば、折角にあへしらひてぞおほし給ふ

おかしさ

おもしろき所あり也

心にいらん人

氣にもいりたじなくおもふ女也

ひいらき

引ひろがりて也

さしなほしてもなとかみざらん

のどやかに

うられふりて

おもひかへしてもなとかみみなさ

心ながく也

そられいりして也

あはれとも

物さだめのはかせ

ことばり

やさしくあいらしとおもふ也

物さだめの頭取なりといふたやう

判斷也

さしもあらじ

見しのばん

ことばませ給はぬを

ちこはふさびきのなきと口ぎれに

君の

御あいさつもなされたまはぬを也

はかりはいはれじ也

源氏の君の也

心いれて

さうんしく

手もちなく也

心やましと

心氣なる事にぞ也

よろづの事により

どいめやなんありけるまで

馬の頭申次は、惣じて物の道理をば、よろづの事によそへておほさせ給へ、先木細工いたすものゝ何やかや諸道具を作る事、時にどりたるもてあそび物は何によらず、なりかたちは、大きくもちいさくも、高くもひきくも、せばくも廣くも、相應に心にまかせて作り出すに、定寸尺のきまなりなき物は、ゆがみくねりておどけめきたるも、いかさまにかうもあるべきものよと、時につけ好みに應じてかたちをかへ當世風なるに目うつりて、興ありと見ゆるもあり、しかるを、寸尺恰好のさし定りたる模様ものぞとて、大事とする實法に美麗なるかざりの御道具を、何の難非もなく作り出す事は、中々無功者なる細工人の手ぎはにては、ゆきとやく事にさふらはず、至極なる上手の作りたるは、様子かくべつにきはだちて見えわかれさふらふ、又繪所に相つとむる繪師ども、上手ときこゆるはおほき中に、墨繪は別して、えらび見るにも、段々あるものなれども、さらに又勝れ劣りのさかひ目は、ちやくとは中々みえわかれさるものにさふらふ、かくはあれどその内にも、人の終

に見及ばぬ蓬萊山や、あら海にすむすまじき魚のすがた、唐土にすむといふはげしき獸のかたち、目に見えぬ鬼のかほなどの、きもつぶらしき程にかき出したる物は、其畫工の心にまかせて、筆勢見事に一きは人の目をおどろかすもさだめて實には似もせまじけれど、それにて間にあひこと濟さふらふが、つねていの山のすがた水のながれ、目のまへなる人の家居のありさま、げにもかうこそあれとみるに、そのあたりにかきそへたる草木等にいたるまで、もつともらしく筆やはらかに、つまりくまでのかたちをこまやかにかきませ、なんどりとしたる山のけしきの木ぶかくしげり、人里はなれたる遠近のていなどを、こくうすくかさねなし、人げちかき垣根の内などをば、そこくの心くばり、さし定りたる地ざりくまざりまで、上手は筆勢かくべつにて、初心なる繪師は及ばぬところおほくこそさふらへ、又手をかくにも、ふかき筆道のならひはなく、こゝかしこの點ながく、ふでがろにさらくとはしりがき、どこともなう器用はだにかきなせるは、見たる所は字形もだてなる風にもえて、ちよと見にはどこやら能者めきたれども、猶まことの筆法のすぢを、こまかにかき得たる手は、うはべの筆は墨色きえがちにもみゆれど、たゞ今一ところへ取ならべ、よせあはせてくらへものにして見れば、猶實法なるかたになん心はよりける、かやうのさしてもなき手ずさひのうへにてだに、かくこそさふらへ、まして人の心の、

時にあたりて心ばへ見せがほなる、うはづらのなさけくしきばかりは、たのみになるまじきものにぞおもはれさふらふ、過さりしまへくの事、何とやら好色がましき事にはさふらひしかども、おなぐさみにはなし奉らんとてちかく居よれば、源氏の君もお目をさまさせ給ふ、頭の中將はこの外信向させたまひ、ほうづえをつきて、馬の頭にむかひておはし給ふ、たゞ辯舌たらふたる法師の、世間の道理を説きかせ場のこゝちするも、畢竟はおかしきものなれど、かやうにうちくつろぎたるせつは、かくしつゝむべきをも相たがひに、えひかへこらへおほせぬ事になんありける

おぼせ

おぼさせ給へ也

木の道のたくみ

木細工いたすもの也

よろづのもの

踏道具也

りんしのもてあそびもの

時にとりたるもてあそびもの也

そのものとあともさだまらぬは

定寸尺のきまりなきものは也

そばつき

ゆがみくれり也

ざればみたるも

などけめきたるも也

げにかうもしつべかりけると

いかさまにかうもあるべきものよ

と也

さまなかへ

かたちなかへ也

今めかしき

當世風なるに也

おかしきもあり

興ありとみゆるも有也

まことにうるはしき人のでうどのか

ぎりに實法にびれいなるかざりの御道具

也

さだまれるやうあるものな

寸尺かつかうのさだまりたるもや

うもの也

なんなくしいづる

難非もなくつくりにだす也

まことのものゝ上手は

至極なる上手の也

さまことに  
 やうすかくべつに也  
 すみがき  
 すみ系也  
 つぎ／＼に  
 段々也  
 なとりまさる  
 すぐれなとりの也  
 けぢめ  
 さかひめ也  
 ふとしも  
 ちやくとは也  
 かくれど  
 かくはあれど也  
 いかれる  
 すさまじき也  
 からくに  
 唐土也  
 おどろ／＼しく  
 きもつぶらしき程に也

つくりたる  
 かきいだしたる也  
 じちには  
 まことには也  
 にざらめど  
 似もせまじけれども也  
 さてありぬべし  
 それにて間にあひ事すみ也  
 よのつれの  
 つれていの也  
 山のたゞすまる  
 山のすがた也  
 目にちかき  
 目のまへなる也  
 なつかしく  
 もつともらしく也  
 やばらびたる  
 ふてやばらかに也  
 かたなどを  
 かたちな也

しづかに  
 こまやかに也  
 すくよかならぬ  
 なんどりとしたる也  
 世ばなれて  
 人里はなれたる也  
 たゞみなし  
 かされなし也  
 けぢかき  
 人げちかき也  
 まがきの内  
 かきれの内也  
 その心しらひ  
 そこの心くばり也  
 をきてなど  
 さしきだまりたるちどりくまどり  
 まで也  
 いきほひこに  
 兼勢かくべつ也  
 わるものは  
 初心なるふしは也

そこはかとなく  
 どことなう也  
 けしきばめるは  
 器用はだにかきなせる也  
 うちみるに  
 見たる所は也  
 かど／＼しく  
 字なりもだてなる風にも  
 けしきだらたれど  
 どこやら能書めきたれど也  
 今一度  
 只今ひと所へ也  
 じちになん  
 實法なるかたになん也  
 はかなき  
 さしてもなき也

けしきはめらん  
 心ばへ見せがほなる也  
 みるめのなきけ  
 うはづらのなきけ／＼しき也  
 そのはじめの事  
 過ぎりしまへ／＼の事也  
 すきん／＼しくとも  
 好色がましき事にはさふらひしか  
 ども也  
 いみじく  
 ことの外也  
 しんじて  
 信向せさせ也  
 つらつえ  
 ほうづえ也  
 のりのし  
 法師也

世のことはりととききかせん所  
 世間の道理をさききかせば也  
 かつは  
 畢竟は也  
 かるつあては  
 かやうにうちくつろぎたるせつ也  
 をの／＼  
 相たがひに也  
 むつことも  
 かくしつゝむべき事も也  
 しのびとゞめす  
 ひかへこらへおほせぬ也

はやうまだより  
 いひはやし給ふまで

馬の頭申すは、まへかたわたくし、まだ官位ひきくはべりし時、不便にぞんせし女はべ

りき、右品みぎしなさだめのかたにて申せしやうに、かたちなどいよくもさふらはざりしかば、わかき時ときにて色いろこのみさふらふ心こころには、此人このひとを、一生いっしょうそひはつべきとまりの妻つまにともおもひさだめはべらず、たより所ところとはぞんじながら、ごこやら心さひしさに、とにもかくにもまぎれありきはべりにしを、かの女おんなりんきぶかくさふらひしかば、なをさらわたくしの心こころにあはず、此やうならでおとなしやかならばとおもひつゝ過とほしはべるに、あまりに見ゆるしもなくうたがひはべりしも、うるさくはぞんじゝかども、わたくしのかく數かずならぬ身みを見はなさずに、何なにを目めあてには此やうにしもおもふらんとおりくは心がりにもさふらひし程ほどに、しせんとそれにひかれて、わたくしの心もおちつくやうになんはべりし、此女このおんなの心こころ入れは、もとより心たらはで氣きのつかぬ事ことにも、たゞわたくしがためにさへなる事ことならば、いかやうの事ことをしてなりとも無なき手てをも出すやうにいたし、其身そのみの無調むてう法ぽうらしき心こころをも、ふがひなきものに見さがされぬやうにとおもひたしなみつゝ、とにもかくにも、眞實しんじつ心こころに家いえの内うちの事こともどりはからひ、つゆほごにても、わたくしの心こころにたがふ事ことなくもがなとおもひしほごに、ちとおもひぶりのすぎたるかたとはぞんじけれど、さかくたゞわたくしになびきて、縦たてへも横よこへもいふなりにいたし、見よくもあらぬかたちをも、わたくしにうとまれ見みかざられてはと心こころふかくおもひつゝろひ、此かたちを他人たにんにみられては、つ

らよごしなりと夫おつとにおもはれやせんと、遠慮えんりょしはづかしがりて、萬端ばんたんにつけ、ふだんたゞしくかたく身みをもちなしつゝ、なれなじむまゝに、心こころもうちあがりたるかたにて、随分ずいぶんよき氣きはへにてはべりしかども、たゞ此りんきのひとつなん、奥齒おくはにもものゝはさまりたるやうにはべりし、其そのじぶん私存わたくしぜんじさふらふやう、此ごとくにひしどわが心にそむかず、わらうしたならば見すてられやせんと、あぶなかりをちたる人ひとなれば、何なにとぞこゝ程ほどの事ことをしてをぞしたならば、此りんき心こころもちとはうすらぎ、わる意地口いぢぐちのかたもやむ事こともやとおもひさふらふまゝに、りんきするが實じつに心こころうき事こととおもふふりをして、中なかをもたかひさふなるけしきに見せたらば、是こゝほどわれをしたふ心こころなれば、さだめておもひこりて心こころもなをりやせんとおもひさふらひて、わざと情なさけなくつれなきていを見せはべりしかば案あんのごとくかの女おんな、例れいのどをりにはらだち恨うらみみさふらふほごに、かくおそろしげなるかほつきならば、此年月このとしつきいひかはせしちぎりはふかくども、中なかをたかひて又またとふつゝあひ見申まをすさじ、それどもにこれをかざりとおもひ給たまは、かう執念しつねんふかく物ものうたがひを、そちの心こころはいにし給たまへ、もし又行末ゆくすゑながくそひみんとおもひ給たまは、よしはわがかたにつらき事ことありども、おもひこらへて、恪氣くつきなども大たいていにし給たまへ、かゝるうとましけなる心こころだにうせたらば、われも又何なにしによそ心こころをもちはべらん、一圖いちずに大切たいせつにぞおもふべき、わが身みの上うへも人ひとかま

しく、官位などもすゝみちとおどなし並にもならば、尤わき心もたず、妾などのやうなるものもをかて、そなたひとりをもまもりつめて、又ならぶ人なくいたさんよなど、口がしこくすかしたて、なんでもよき分別を出したりとおもひて利運げに我づよくいひこめはべるに、かの女つもりの外にて、すこし打わらひつゝいひけるは、よくもくへらくど口をき、給ふよな、内外の事につけてよろづ見だてもなく、物不自由に貧乏らしき世帯をも、心ながく見過しつゝ、その人数ならん世もあらんかと待たなんかたは、いつの何時ならん行末とをき事にておひもかけねばあまりの事に氣苦勞にもあらず、たゞうつらくどそひ來りたるに、それをばそれとおもはで、つらき心ばかりを持給へども、それをも堪忍して過せしに、此うへにも、そなたの心のなをらんおろを見とゞけんと、いつをいつまで年月をかさねべきあてごもなきたのみは、中々心苦勞なるべければ、たがひに離別すべき時節到來にもなんあるとて、ねたましげにいひはべりしほどに、その時はわたくしも實にむつとはらたしくなりて、にくげなる悪口ごもをいひつのはべるに女もたちたる氣のおさめられぬ首尾にて、われらが小ゆびを引よせてくひつきはべりし程に、わたくしもぎやうくしくいひ恨みて、此やうなる疵をさへつけられたれば、いよ／＼世間へまじはるにも外聞わろく、其上そなたに恥しめられたる官位のひきくも、猶更すゝむべき

にもあらねば、何かにつけて人めかしき世にもあはじ、出家遁世の身ともなりぬべきなどいひをどしてさらばくけふこそはかぎりなれとて、かの小指をかゝめて出ゆくとして手をおりてあひみし事をかぞふれば

これひとつやは君がうきふし

此歌は此年月そなたにそひきたりし内の事を、手をおりてかぞへみるに、種々さまくのうらめしき事どもおほければ今此ゆびひとつくひきられたるばかりの、はらだちにはなきぞといふ心歎、ゆびをくひたるにつけて、手をおりてとも、うきふしともそへたる也

えうらみ給はいなごいひければ、女もさすがあはれとやおもひけんうちなきて

うきふしを心ひとつにかぞへ來て

こや君が手をわかるべきおろ

此歌は、此年月そなたのうきふしをば、口へだしていひこそせれ、心ひとつにかぞへてみては、かすくの事なれども、こらへく／＼て來りしが、けふといふ今日かうしたる事のできたるは、そなたの手をはなれて、りべつすべき時節ぞきたらん、せひなき事ぞいふ心歎、こやはこれや也

などゝたがひにいひあひて、かへり出はべりしかど、實には心かはるべき事とおもひはべらずながら、日數ふるまで文をもつかはさず、うかれ心にかけまはりてありきはべるに、

十一月内裏にて、加茂の臨時のまつりの調樂に参内して、夜ふけ退出しはべるに、つようみぞれふりけるが、つれだちし人々もむき／＼へわかれゆく所にておもひめぐらせば、猶おちつくべき家路とおもはんかたは又なかりけり、内裏の役所は旅寝同前にて、ひとりねも小さびしく興なかるべし、此ごろちといひよりたりし宿のあたりはまたなじみなければ、なれ／＼しくうちとけぶりもしがたくて、うしろざむくやとぞんせられしかば、かの女のいか／＼おもふなるらんと様子も見がてら、ふりそふ雪をうち拂ひつゝまかりこして、今さらなるなかに人めわろく小はづかしがりけれど、さはありとも今宵は、日頃のうらみもとけなんとおもひはべりしに、ともし火ほのかに壁ぎはへよせて、ふだん着の着ふるして、綿あつにふくれかへりたるを火燧にかけて、のふれんなどもうちあげつゝ、こよひの程にもや、私の來たらんかと待けるやうすぞと見うけしまゝに、さればこそとすこし心をこりせられて、案内いたしけれど、かの女は居はべらず、召つかひのおなごどもばかり留守をして居るに、主人はいづくにぞと問ひはれば、此夜さやおや人のかたへゆかせ給ひぬるところたへはべりき、やさしげなる歌などをよまず、わびことめけるふみにてもをかす、たゞ引こもり見かぎりたるやうのしかたにて、なまけなかりしかば手もちなき心ちして、その夜はかへりはべりしがつく／＼とおもひめぐらせば、まへ／＼かの女の小意地わるく

心やはらぎのなかりしも、われにうとまれたきとおもふかたの心やありけん、わがひがみにておもひはべれど、さして又さういたしたる心ばへとも見えさふらはざりしが、かのたづねゆきし夜のてい、何とも心得がたかりしゆへ、さやうにもおもひはべりしに、おもひの外につゝ中たえたるやうになりはべりぬ、それに其夜のていを見れば、かのこたつにかけし着物も、つねよりは心をつけたりし色あひ、あたゝめをきしかた、さだめてわれをまつ心にや、かうこそありたきものよとおもはれ、まへ／＼なまけなげにはいひちらしたりしかども、さすがにわが見すてたる後まで、おもひやりふかく心にかへ、世話にせし必ざしをみては、さはありとも、おもひすてたえはつべきはづにはあらじとおもひさふらひて、中をなをりたきよしをいひ通じはべりしに、さして取つかれぬやうのあいさつにてもなく、又たづねうろたへさせんと、かくれ忍ふにてもあらず、恩がましげもなうこたへをしてはべりしは、たゞまへかたありしをりのまゝにて、あた／＼しき心ならば、たゞひ中をなをりたればとても、行末かけてそひはつる事はえなるまじ、心をあらためて末ながくそひ給はん丁見ならば、お目にかゝるべしなごゝいひこしはべりしを、さうはいふたりども、實には中々えおもひはなればせまじよとぞんじ、とかくかのりんきのわる心は、此うへどもにも、もみくゝなればおり／＼は火もつきやすかるべき物なるほどに、先しば

しの内はきかぬがほしてこらさばやとおもひて、いかにもそのとをりにあらためんども申さで、つよくはりあひて見せし間に、此事をきつう苦にいたしはべりしやらん、おもひなげきつゝふら／＼と煩らひ出して、つゝの相はてはべりにしとてかたづまりたる心の人には、おどけ事もいひにくく、こはじやれはいたすまじきものどぞんじさふらふ、ひとへにたのみにいたすべきとおもふかたをば、外心なく、そればかりを大切に守りてありぬべき物どなん、今になりては、わが身のふどいきなりしをとりあはせて、おもひ出られさふらふ、此女は、ちよとしたる當分の儀は勿論、いかやうのしかどしたる大切なる事にも、いひあはせ内談などいたすにも、相應に丁見をもつけ、龍田姫といふてもきたなまけはしはべるまじ、染物などをも見事にいたしはべりき七夕の手にもをどらじと申すべきか、縫はりしたる事まで人なみよりは手きゝにてさふらひし、みめかたちこそわろくはべりしが必ざしもたのもしく、氣はへもやさしくさふらひしうへに、左様の事どもまで似つかはしくいたして、中々調法なる女にてはべりし物をとて、いとあはれにおもひ出たる風情也けり、頭の中將、その七夕によそへていは、たちぬふかたをばれしのべて、ゆく末ながきちぎりにこそあやからせたきものなれ、げにそのたつ田姫の手その錦には又ます事もあるまじかりしを、何のいふにもたらぬ花紅葉などのうへにてたに、もどうつくしきはづの物な

れども、その時節の色あひあしくつきまなきやうなるは、はつきりともみえぬ物にて、露ほどの見だてもなく、うつくしといひし名さへ消ゆく事なるに、それほどに、しほらしく染色などせし女のならるは、ちか比おしき事や、それゆへ何事もおもふやうには成かたき世ぞと、善惡ともにさだめかねたるぞやと、馬の頭か物かたりをいひそだてさせ給ふ

- |                 |            |          |
|-----------------|------------|----------|
| はやう             | よるべきは      | ゆるしなく    |
| まへかた也           | たより所とは也    | 見ゆるしもなく也 |
| けらうに            | さう／＼しくて    | 見もはなたで   |
| 官位ひきく也          | 心さびしさに也    | 見はなすに也   |
| あはれさおもふ         | さかく        | など       |
| ふびんにぞんぜし也       | とにもかくにも也   | 何を目あてに也  |
| きこえさせつるやうに      | ものはんじをいたく  | かくしも     |
| 品さだめのかたにて申せしやうに | りんきぶかく也    | 此やうにしも也  |
| いとまほにもはべらざりし    | 心づきなう      | 心くるしき    |
| かたちなどいとよくもさふらはさ | 心にあはず也     | 心が／＼りにも也 |
| りじ也             | かしらで       | 心おさめらるゝ  |
| すき心ちには          | 此やうならで也    | 心もおちつく也  |
| 色このみさふらふ心ちには也   | おひちかならましかば | あるやう     |
| おもひとゞめ          | おとなしやかならば也 | こゝろいれは也  |
| おもひさだめ也         |            |          |

おもひいたらざりける事にも  
心たらばて氣のつかぬ事にも也  
いかで  
いかやうの事をしてなりとも也  
此人のためには  
わたくしがためにさへなる事なら  
ば也  
□れたるすぢの心を  
無調法らしき心をも也  
くちおしくは  
ふがひなきものにも也  
見えじと  
見さがされぬやうにと也  
はげみつゝ  
たしなみつゝ也  
とにかくに  
とにもかくにも也  
ものまめやかに  
眞實心にも也  
うしろみ  
家の内の事とりはからひ也

すゝめるかたと  
おもひぶりの過たるかたとは也  
なよびゆき  
たてへもよこへもいふなりにいた  
し也  
見にくきかたちをも  
見よくあらぬかたちをも也  
此人に  
わたくしに也  
見やうさまれんと  
うまとまれ見かざられてはと也  
わりなく  
心ふかく也  
うとき人に  
他人に也  
おてぶせにや  
つらよこしなりと也  
はゞかり  
遠慮して也  
見えほに  
ふだんたゞしくかたく也

もてつけて  
身をもちなし也  
見なるまゝに  
なれなじむまゝに也  
けしうはあらず  
心もうちあかりたるかたにて也  
そのかみ  
そのじぶん也  
かう  
此ごとくに也  
あながちに  
ひしき也  
したがひ  
わが心にそむかず也  
いかで  
何ぞぞ也  
こるばかりのわざして  
こるゝほどのわざをして也  
此かたも  
此りんき心もなり

よろしくもなり  
うすらぎ也  
さがなきも  
かるいち口のかたも也  
うしなごもおもひて  
心うしおもふふりをして也  
たえぬべきけしきならば  
中をもたがひたふるけしきにみせ  
たらば也  
かばかり  
これほど也  
こささらに  
わざと也  
えんするに  
うらみさふらふほどに也  
おぞましくは  
おそろしげなるかほつきならば也  
いみじき  
此年月いひかはせし也  
たえて  
中なたがひて也

わりなき  
執念ふかく也  
ゆくさき  
ゆくすゑ也  
ねんじて  
おもひこらへて也  
なのため  
大體に也  
あはんとなん  
大切にぞ也  
人なみ／＼にも  
人がましく官位などもすゝみ也  
すこしおさなびん  
ちとおさなしなみにも也  
かしたつる  
すかしたて也  
我たけく  
がつよく也  
いひけし  
いひこめ也

ものげなき  
びんぼうらしき也  
いとどかに  
いつの何時ならん行末さなき事に  
て也  
心やましくもあらず  
氣ぐらふにもあらず也  
しのびて  
かんにんして也  
おもひなをらん  
心のなをらん也  
見つけんと  
見とゞけんさ也  
あいなのだのみは  
あてどもなきたのみは也  
くるしくなん  
心ぐらうなる也  
かたみに  
たがひに也  
そむきれべき  
りべつすべき也



きざみ 時節出来也  
 れたげに ねたましげに也  
 いひはげます いひつのもり也  
 おさめぬすぢにて おさめられぬしゆびにて也  
 をよび 小ゆび也  
 おどろくしく ぎやうくしく也  
 かこちて いひうちみて也  
 かゝる 此やうなる也  
 まじらひをすべきにもあらず 世間へまじはるにも外聞わるく也  
 はづかしめ給ふめる はちしめられたる也  
 つかさくらぬ 官位也  
 いさゞしく 猶更也  
 何につけてかは 何かにつけて也  
 人めかん 人がましき世にもあはじ也  
 世をそむきぬべき身なめり 出家とんせいの身ともなりぬべき也  
 まかてぬ 出ゆく也  
 いひしろひ たがひにいひあひて也  
 まことに 實には也  
 せうそこ ふみ也  
 あくがれ うかれ心にも  
 まかりありく かけまはりてありき也  
 いみじう つよう也  
 これかれ つれだちし人々也  
 まかりあがりし所 向くへわかれゆく所也  
 うちわたり 内裏の役所也  
 すさまじかるべく 小まびしく興なかるべし也  
 けしきばめるあたりは 此ごろちといひよりたりし宿のあたりは也  
 そゞろざむく やとろざむくやま也  
 けしき やうす也  
 まかで まかりこして也

なまわろく なまなかに人目わろく也  
 つめくはるれど 小はづかしかりけれど也  
 さりととも さはありとも也  
 かべにそむけ かべきはへよせて也  
 なへたるきぬ ふだんぎの着ふるして也  
 あつごえたる わたあつにふくれかへりたる也  
 おほいなるこ こたつ也  
 ひきあぐべきものゝかたひら のふれん也  
 こよびばかりや こよひのほどにもや也  
 さうじみはなし かの女は居はべらず也  
 さるべき女房どもばかり めしつかひのおなごどもばかり也  
 とまりて 留守して也  
 おやの家に おや人のかたへ也  
 えんなる やさしげなる也  
 けしきばめる わびごとめける也  
 せうそこ ふみ也  
 ひうやごもりに 引こもり見かぎりたるやうのしかたにて也  
 あへなき 手もちなき也  
 さがなく 小いちわろく也  
 ゆるしなかりしも 心やはらきのなかりしも也  
 うとみれと うとまれたきさ也  
 さしも さういたしたる心はへとも也  
 心やましきまゝに 心得がたかりしゆへ也  
 さしも さういたしたる心はへとも也  
 きるべきもの 着物也  
 心ごめたる 心をつけたりし也  
 しざま あたゝめなきしかた也  
 あらまほしくて かうこそありたき事よき也  
 うしろみたりし 心にかけてせわにせし也  
 さりととも さはありとも也

おもひはなつやうはあらじと  
おもひすてたえはつべきはづには  
あらじと也  
さかくいひはべりしを  
申をなかりたきよしをいひ通じは  
べりしに也  
そむきもせず  
さりつかれぬやうあいまつにても  
るゝ也  
いらへ  
こたへ也  
えなん見すぐすまじ  
そひはつる事はえなるまじく也  
のどかに  
末ながく也  
おもひならば  
了見ならば也  
あひみるべき  
お目にかゝるべし也  
さりとも  
さうはいふたりさも也  
しか  
そのとほりに也

いたく  
つよく也  
つなびきて  
はりあひて也  
いたく  
きつう也  
はかなくなり  
相けて也  
たはふれにつゝなん  
をどけ事もいひにくゝこはじやれ  
はいたすまじき物と也  
さばかりにて  
そればかりを也  
はかなきあだ事をも  
ちよとしたる當分の儀也  
まことの大事をも  
しかとしたる大切な事にて也  
かひなからず  
相應に了見をもつけ也  
つたなからず  
きたなまけはしはべるまじ也

そのかたもぐして  
さやうの事どもまで似つかはしく  
いたして也  
うるさくなん  
調法なる也  
のどめて  
さしのべて也  
あへまし  
あやからせたき也  
しくものあらじ  
ます事もあるまじかりしを也  
はかなき  
何のいふにもたらぬ也  
つきなくはかしくしからぬは  
つきもるやうなるははつきりさも  
みえぬものにて也  
はへなく  
見だてもなく也  
さるにより  
それゆへ也  
いひはやし  
いひそだて也

さて又おなじ比より

まかりたえにしかまで

馬の頭又申すは、さて又おなじ比かよひ申せしかたさふらひしが、此女は、人の品も、右の女にくらべ物にして見るにはよほどたちまさり、心ばへまことによしありげにもみえぬべく、歌をもよみ、假名文などもさらりと似つかはしうかき、琴和琴のたぐひをひくつまをともしほらしく、手つき口つき、かた／＼どもにどこがごこまで、あふなげなきものに見きゝさふらひし、見たる所も、何のふくみたる事もなさふにはべりしかば、先はかの意地わる女をば、畢竟のおちつき所とはいはしをきて、此女のかたへも、時々かくれしのびてかよひはべりしほどは、是にますかたあらじと心もとまりてはべりし、かのいちわる女うせて後、ふびんやどは存じなからも、しやうもなし、去者は日々にならんとしとやらん、過にしをおもふはせんもなき事よとて、此女のかたへちよく／＼とまかりこしつゝ、なじみもふかくなるまゝに、何となくちと色めき、うたがははしきていの事も見えはべるほどに、やさしくこのましげなる事は、目にもつかぬ所出来て、見ざめいたしはれば行末かけてうちたのむべくともみせかけず、ごこともなうとをさぐるやうなるしかたをのみ見せはべりし内に、さだめて外に心かはせる、かくし夫をこしらへたるにぞはべりけん、十月の事

にてさうらひしが、月影のおもしろかりける夜、内裏より退出しはべれば、ある殿上人に道にて行あひはべるほどに、その車にあひ乗りて、咄し／＼かへりさふらふに、わたくしは大納言のもとへゆきてとまりはべらんと申せしに、此人のいふやう、今夜やくそくの宿あり、さだめて待て居るらんもどうじややらとさきのどくなれば、立よりはべらんといひ給ひけるほどに、ごこの事やらとおもひはべりし、此女の家は又、此道すぢなりけるほどに、あれはて、破損に及びし壁のくづれ目より、池の水かげみえて、月さへやごるすみかを、沙汰なしにうち過んも、さすがに残念なる事に存せしまゝに、われらはちど此邊に、たちよりたき所さぶらふのよしを申して、車よりおりてわかればべりつゝ、かの女の宿へのぞきはべれば、此殿上人、かの女へかね／＼心をはしてかよひしにや、今宵もやくそくにてこそありけめ、此人きつうなりふりを引つくりひうかれ心になりて、門ちかき廊下の縁ばなに腰をかけて、庭の菊もおもしろくうつろひわたり、風にまけじと紅葉のちりみだるゝを打そへて、しばし月をみるていなご、げにあはれとみえたる景氣なるに、殿上人ふところより笛を取だし吹ならして、やごりはすべしかげもよし、みま／＼さもよしなご、口むだ事のやうに、跡先そらはでうたふを、此女、はじめよりよくなる和琴をしらべと、のへて居たりしが、かの笛の音にしほらしくかきあはせたりし、その音ものつしりと上手

めきたり、律のしらべは、秋の季をふくみて、女の手にて物やはらかにかきならしたるが、藤ごしにきこえたるも、わつさりとしたるひびきなれば、清くすみわたりて、秋かど見まがふ月影には、冬の夜なれど、時節不相應にもあらず、かの殿上人、きつう感じたる様子にて、すだれぎはまであゆみよりて、庭のみぢにこそ、人のふみわけたる跡はみえねど、それもどうある事やらしれぬよと、ちとせかせぶりにいひつゝ、庭の菊をおりて

琴の音も月もえならぬ宿ながら

つれなき人をひきやとめける

此歌は、琴の音も月かげも、菊の花もうちそらふて、どうもいはうやうもなき宿ながら、そなたの心はあさあさしくて、いづかたのたれならん、つれなき人のあるらんを、此すぐれたる夜のけいきに、宵からその琴をひきあはせ、風流をつくしてだましとめんとはし給ふらんれども、その人ははなをはじきて、き／＼うげもせぬさう也、われこそかゝる夜さむむをいさばで、とひまいらするぞなど、ねたませぶりにいふたる心歎、えならぬはどうもいはうやうもなき也

かういふを、恩がましきやうにわろくき／＼なし給ふやなご、いひて、今一こそ所望にこそさふらへ、かのつれなし人は、何ほとおもひ給ふてもき／＼たがりもせまし、今き／＼はやすわが聞時に、秘曲の手を残り給ふなよといひ／＼、しつこげにじやれか／＼れば、女は何の

つがもなき事をと、きつう聲をつくりひて

木枯しに吹あはすめる笛の音を

ひきどくむべき言の葉そなき

此歌は、そなたは、われを實に問ひ給はんとおぼすお心ぞとは見うけはべらす、此がらしの風にうかれ出て吹あはせ給ふまでの、ふえのれとこそおもひさふらへかしつれなき心のお人なれば、どうしたるお下心もあるやらしらず、申々われらづれの手ぎはにてはひきとめまいらすべき、ことのはこそさふらはれといふ心歎、ことのは御琴をそへたる也

ど、たがひに口なぶりなど、心やすげになれしくいひかはすを、わたくしの片陰に立ぎして、にくき事やおもふをばしらで、又箏の琴を、盤渉調にしらべて、はでなる物から、えこせぬ音をかきならしたるつまをとも、一かど上手めきてはきこゆれど、心入れのあだしくしきにぞ、ごこやら興さましき心ちなんしはべりし、たゞ時々しのびあひてかたらう奉公の身なる女などは、づんどじやれ過たればとて、それは當分の出合までにてさして世話にならぬ事なる程に、其どほりにてみるばかりは、興あり、おもしろき人やとおもふまでにてありぬべし、切々ならずとも、右の女のやうなる所へおもひかよひつゝ、行末かけてわすれず、見すてまじき縁のつまごたのまんには、さりどはたのもしげなく、

るせがして過たりやと心をかれて、其夜のしかたにかこつけて、つゝに中絶はべりしか

ゆへありと

よしありげに也

うちよみ

歌をもよみ也

はしりがき

かなぶみなどもさらしくも也

かひよくつまをと

琴わごんのたぐひをひくつまをと

も也

たさしくしからず

あぶなげなきものに也

みるめ

見たる所も也

事もなく

ふくみたる事もなきさうに也

さかなものを

かのいちわる女をば也

うちつけたるかたにて

おちつき所とはいはしたきて也

—紫文盤の囀—

かくろへ

かくれしのびて也

こよなく

これにますかたはあらじと也

此人

かのいちわる女也

いかゞはせん

しやう様もなし也

あはれながらも

ふびんやとはぞんじながらも也

かひなくて

せんじなき事よとて也

しばしく

ちよいくと也

なるまゝに

なじみもふかくなるまゝに也

まばゆく

色めきうたがはしきていの事もみ

し也

えんに

やさしく也

かれんゝにのみ

とをさくるやうなるしかたをのみ也

しのびてつかはせる人ぞ

外に心かはせるかくし夫をこしらへたるにぞ也

かなな月

十月也

うちより

内裏より也

まかて

退出也

うへ人

殿上人也

きあひて

ゆきあひはべる也

あやしく

どうじややら也

一四七

心ぐるしき  
きのどくなれば也  
はた  
又也  
よぎぬ道  
此道すぢ也  
もとより  
かれんくも  
此おとこ  
此人也  
いたく  
きつう也  
すゞろぎて  
うかれ心になりて也  
らうの  
廊下の也  
すのこだつもの  
えんばな也  
しりかけて  
こしなかけて也

とばかり  
こしなかけて也  
さばかり  
しばし也  
きへほる  
まけじと也  
つゞしりうたふ  
口むだ事のやうにあとさきそろは  
す也  
うるはしく  
しほらしく也  
けしうはあらず  
のつしりと上手めき也  
すの内より  
すだれこしに也  
今めきたる物のこゑ  
わつさりしたるひゞき也  
おりつきなからず  
時節不相應にもあらず也  
いたく  
きつう也

めで  
感じたる也  
すのもとに  
すだきはまで也  
れたます  
ちとせかせぶりに也  
わろかめり  
わろくきまなし給ふや也  
のこし給ふそ  
いたく  
しつこげに也  
あされかゝれば  
じやれかゝれば也  
いたう  
きつう也  
なまめきはす  
たがひに口なぶりなど心やすげ  
になれしくいひかはす也  
なまめかしく  
はでなる物から也

かひひきたる  
かきならしたる也  
かどなきにはあられど  
一かど上手めきてはきこゆれど也  
まげゆき心ち  
興ざましき心ち也  
宮つかへ人  
奉公の身也  
あくまで  
づんど也

さればみ過たるに  
じやれすぎたれば  
さても  
そのとなりにて也  
みるかぎりは  
見るばかりは也  
おかしくも  
興ありおもしろき人やさも也  
時々にてし  
せつ／＼ならずさも也

さる所にて  
右の女のやうなる所へ也  
わすれぬすがと  
行末かけてわすれす見すてましき  
縁のつまさ也  
さしすぐひたりと  
みせがして過たりやと也  
ことつけて  
かこつけて也

此ふたつの事をより  
うちわらひおはさうすまで

又申すは、右のりんきせしど、あだめきたりしとの、二とをりの事をおもひあはするに、わかき時のうは氣なりし心にだに、猶さやうの出すぎたる事は、一圓合點にのらず、たのもしげなきものにぞんじはべりき、今より後、次第に年たけさふらふにしたがひては、ましてさやうのみおもははべらん、御前がたには、お心のまゝに、おらばおちぬべき、萩の露ひろは消なんと見ゆる、玉ざのうへの霞などのやうに、いとやさしく物やはら

かに、なびきやすきを御らんじなれさせ給ふ色ごとのみこそ、おもしろくもおぼしめさるらめ、當分こそさはありとも、今ゆくさき七ヶ年餘も過し時分には、おぼしめしらせ給ひなん、慮外ながら、わたくしいのいやしき口にての御異見ながらも、好色の心ふかく、たはくしからん女には、お心をかせ給へ、時のうかれ心にまかせ、了簡ちがひにて、ひよつとそれにかゝりあはん人は、あはうらしきあだ名をもたつべきものにてさふらふと、をしへ申しける、頭の中將は、なる程もつともの事やどうなづき給ふ、源氏の君は、にがわらひせさせ給ひながらも、げにはさうあるべき事とおぼすなるべけれど、ごちにつけても人ぎゝわろく、あまり名たてがましき物がたりどもかなと、仰せ給ひてわらはせおはすべし

此ふたつの事

りんきせしとあだめきたりしとの

はんには  
いさやましく也

もていてたる事は

あへかなる

物やはらかにびきやすき也

出過たる事は也

あやし

すきんしきのみこそ

色事をのみこそ也

一間がつてんにのらす也

おかしく

今さりとも  
當分こそさはありとも今ゆくさき也  
なとせあまりのほど  
七ヶ年餘も過し時分也  
なにがしが  
わたくしいの也  
いさめ  
御異見也

さやうにのみ也

おもしろく也

すきたはあらん  
好色の心ふかくたはくしからん也

いましむ  
なしへ申しける也

あやまちして

きみ  
源氏の君也

了見ちがひにて也

かたみみて

みん人の

にがわらひせさせ給ひ也

かたくななる

さる事とは

あはうらしき也

さうあるべき事とは也

いつかたにつけて  
もどちにつけても也  
人わろく

人ぎゝわろく也  
はしたなかりける  
あまり名たてがましき也

は、き木末

中將ながしはより

みなわらひ給ひぬまで

頭の中將、われらは又、愚癡らしき物語せんとて、さるかたに、こつそりと見そめたりし女のありしが、その時きりに、當座なぐさみまでの丁管なれば、さして末ながくあひ見るべきものとおもはざりしかど、いつとなくなれゆくまゝに、不便もまさりておぼえしかば、たえくながら、忘れがたく捨がたきものにおもひたりしを、それほどになりぬれば、女もひとへにうちたのむ様體にもみえたりし、かくもたれかゝる心につけては、さだめて事により、うらめしとおもひし事もありなんと、わが心ながらおもひあたるおりくもはべりしかども、女はそれをも氣のつかぬがほにて、われらかたより久しくおどづれせぬをも、かう可なりがけに、兪略なる事とおもはで、たゞ朝夕にあひそひなじみたる、夫婦あいさつのやうにみえはれば、われらもごこともなく、世話に仕内とおもひしかは、永くもあひみんものよとうちとけ、心やすくせし事などもありきかし、此女は、おやもなくたよるかたなくて、諸事いご心ぼそけなるにつけても、さあらば此人こそは力に

もと、何かにつけて、われらを深切におもひしていかはゆらしげなりし、かくたがひの心もうちとけて、行末とをきちざりにおもひこみたりしほどに、何の心がりなる事もなければ、心ゆるやかにおもひて、久しくまかりこさやりし頃、此事どうしてか、右大臣の内かたへきこえたりけん、そのかたより、さま／＼となさけなげにうたてしき事どもを、さる手よりよりて、内意をいせ給ひたりけるよし、それをも其砌はゆめ／＼しりはべらず、後にこそき／＼はべりし、さやうの難儀なる事のあらんとはしらず、心底にはわすれざれども、かれこれ取まぎれて、をとづれもせで久しくなりはべりしに、かのかたよりのうたて事に、たてをつくべきほどの氣もなき、やはらかなるかたぎの女にて、それを苦勞にし、ひつしりとおもひほれて心ぼそくやありけん、おさなき娘もひとりありしを、此養育などを、何としたる物ぞとおもひわづらひてにや、ある時なでしこの花をおりてをこせたりしと咄しきして、涙ぐみ給ひたり、源氏のきみ、さて其文の言葉は、いかやうなりしぞと問はせ給へば、頭の中將、それはどうてありしや、しかとはおぼえてはべらねど、さしてかはりたる文體もなかりしが、

山がつかきほあるともおり／＼に

あはれはかけよなでしこの露

此歌は、そなたには御本妻にひかされ給ひて、今はこゝもとへはさなくとせさせ給ふ、われらつれ山かつ同然の身のすみはべるかされなば、あれはつるなまかまはで、見すてさせ給ふは御もつともなれども、此なでしこなば、見すて給ふべきはつにもなければ、おりの心ざしをばかけさせ給ひて、あはれとおぼすべき事なるに、さりとはむごきお心ざしかなとらみたる心歎、これら山がつなわが身になすらへ、なでしこをむすめにしたとへて、心ざしをかけてあはれみやしなふ事を露の花をめぐむにそへたる也、あるともは、あるとも也、心ざしのすみあれたるをいふ。

といふ歌をかきてをこせしにぞ、おもひ出しまゝにまかりこしたりしかば、例のごとくおくそこもなき物ながら、何とやらん物おもひすがたにて、あれたる庭の露しげきをながめて蟲の音にまけじと涙ぐみたりしけしき、むかし物語の繪などにかきし保めきて、あはれにおもひはべりしかば、

咲まじる花はいづれとわかねども

猶ごこなつにしく物ぞなき

此歌は、あはれはかけよなでしこのとの給ひし、そのむすめとそなたとは、咲まじる花のごとくなるを、ならべて見ればどれをどうとわけてみるべき事にはあられども、なをそのなでしこの事はなしをきて、ごこなつなるそなたこそ、いとおしう大切ににおもひはべるよさいふ心歎、いもさわかねるとごこなつのはなといへる本歌によりて、妻とごこなつとそへたる也、しくもぞなきとは、まさる物ぞなきといふ心、

なでしこなる娘の事をば二の次にして、まづ塵をだにすへじといへるとごこなつこそなど、其母なる者の機嫌をとりたれば、かの女

打はらふ袖も露けき床夏に

あらし吹そふ秋も來にけり

此歌は、そなたのお心のかはらせ給ふにつけてなみだのつゆにしほればべるを、何ほどおもひてもあまなき事なとおもひかへして、ひた物うちはらひくいたせども、なをさらつゆのなきそふうへに、右大臣殿の御かたよりは、さまざまとあらけなき事どものかさなりて來たりさふらふは、そのごこなつに、あらしの吹そふ心ちにはぞはべる、これとても、そなたのお心にあきけの來たりしゆへぞとおもへば、うらめしうこそさふらへといふ心歎、右大臣殿の御かたよりのうたごなを嵐ふきそふそへたる也、

ど、何ともなうあはれげにいひなして、さすが打見たる所は、きこえぬしかたやなど、眞實に恨みたる様子にも見えす涙をもらしおごしても、はづかしさふにまぎらはしかくして、われらがつらき心根を推量もしたるやらと、われに見えられん事を、心ふかく笑止げにおもひたりしてにみえしかば、まづは心やすきかたにて、又をとづれもどをくしくせし内に、いづかたへかゆきはべりつらん、いつのまにやら跡かたもなく、かきけすやうにてにげうせはべりし、いまだ存生にてありなば、かねくさへ、たのみにいたす一家親類



などもなかりしほどに、さぞ不自山なる世すぎにて、流浪しておりはべらん、もとよりふ  
 びんに存せしほどに、われらが倉略なるをも言葉にも出して恨み、とかくおもひまつはる  
 風情にも見えたらば、われらもおもひあたりて、かくこらへかねにげかくるやうに、難儀  
 なる目には及ぼさやらまし、あり来りしやうにこの外とをくしくもせで、妾様體にも  
 しなしかこひをき、行末ながく目をもかくるやうのしかたもはべりなましものを、又かの  
 娘もかはゆらしくわれらをしたひはべりしかば、何とぞたづね出したやと心がけしかども、  
 今にそのあり所をさへえき、出しはべらず、これこそさきにしたまひつる、はかなきかた  
 のためしならん、かの女のまぢくとして、われらをつらしくとうらみけんをばしらすで、  
 あはれくとおもひたえざりしも、何のやくたいもなき片思なりけらし、今になりては、  
 わがかたにはいつとなく、次第にわすれゆく時分になりたるを、かの女は又えおもひはな  
 れずに、おりくは定て、人のとがぞといひおほせべき事にもあらねば、ひとりむねをこ  
 がす夕べもあらんとおもはればべる、これぞえ堪忍性なくて、たのもしげなきかたなりけ  
 るとの給ふ、馬の頭申すは、しかればかのわる意地者と申せし女も、今になりては、かの  
 指をくひつきしが、おもひ出となりて、わすれがたきものは存じらるれど、其節にさし  
 あたりてみしには、嫉妬ふかきも難儀なる事なれば、わるうしたならばあきはつる事もは

べりなんや、又かの琴の音をすゝめそよのかして、木枯しの歌よみつゝ、襟もとにつきし  
 女のわけへだてせし心も、欲のふかきよりは、好色のふかきつみはおもかるべし、今此御  
 物がたりの女も、何とやらん餘所心ありて、人にさそはれかくれたるにてもあらんかと、  
 ちとは心もどなき所あるうたがひもそふべければ、どれをどうよしともわろしども、つま  
 る所はおもひさだめられぬぞ、世の中といふものはたゞかやうにとりくむきくにて、  
 くらべものにしてもわけがたかるべき、此さまくのよきかたのさだめを、取そろへもち  
 て、どうともかうとも難非つけべき、ものだねのまじらぬ人はどこにかはあらん、吉祥天  
 女をおもひかけんとすれば、佛法めき抹香くさくて、くすみたらんこそ又心氣なるべけれ  
 ど申せば、皆わらはせ給ひぬ、

ながしは  
 われらは也  
 しれもの  
 ぐちらしき也  
 しのびて  
 こつそりと也  
 さてもみつべかりしけはひ  
 その時きりに宮座なくさみまで也

ながらふべき物さしも  
 末ながくあひみるべきもつとも也  
 あはれおほえしかば  
 ふびんもまさりておぼえしかば也  
 さばかりになれば  
 それほどになりぬれば也  
 けしきも  
 やうだいにも也

たのむにつけては  
 もたれかゝる心につけては也  
 おほゆる  
 おもひあたる也  
 みしらぬやうにて  
 氣のつかぬがほにて也  
 とだえなも  
 をとつれせぬなも也

たまさかなる  
 可なりがけにそりやくなる也  
 たてつけたる有様に  
 あひそひなじみたる夫婦あいまつ  
 のやうに也  
 心ぐるしかりし  
 せわにし内さも也  
 なのめわたる事など  
 うちさげ心やすくせし事など也  
 さらば  
 さあらば也  
 ことにふれて  
 何かにつけて也  
 らうたげなりし  
 かはゆらしげなりし也  
 のどけきに  
 行末とをき也  
 をだしくて  
 心ゆるやかにおもひて也  
 まからざりし  
 まかりこさざりし也

この見給ふるわたりより  
 右大臣の内かたへきこえたりけん  
 そのかたより也  
 うたてある  
 うたてしき也  
 たより  
 手より也  
 かすめいせたりける  
 内意をいせ給ひたりける也  
 さるうき事や  
 さやうの難儀なる事の也  
 心には  
 心底には也  
 せうそこ  
 をとつれ也  
 むげに  
 ひつしりと也  
 いさや  
 しかとはおぼえはべられど也  
 ことなる事もなかりしや  
 さしてかはりたるぶんていもなか  
 りしが也

まかりたりし  
 まかりこしたりし也  
 うらもなきものから  
 おくそこなきものながら也  
 きほえる  
 まげじこ也  
 さしなきて  
 二の次にして也  
 おやの心をとる  
 母なるものよきげんをさりたれば  
 也  
 はかなげに  
 何ともなうあはれげに也  
 まめしく  
 眞實に也  
 おもひしりけりと  
 すいりやうもしたるやうと也  
 わりなく  
 心ふかく也  
 くるしきものと  
 笑止げに也

とだえなき  
 をとづれもさなくしく也  
 かきけちてうせにしか  
 かきけすやうにてにげうせ也  
 世にあらば  
 存生にてありなば也  
 はかなきよにぞ  
 不自由なる世すぎにて也  
 さすらふらん  
 ららうしておりはべらん也  
 あはれともおもひし  
 不便とぞんせし也  
 わづらはしげに  
 そりやくなるをもことばにもいだ  
 してうらみ也  
 おもひまつはすけしき  
 おもひまつはる風情也  
 あこがらさざらまし  
 こらへかれにげかくる、やうの難  
 儀なる目にはなほさざらまし也

こよなき  
 ことの外也  
 さだえをりす  
 さなくしくもせて也  
 さるものになして  
 てかけやうだいにもこなしかこえ  
 なき也  
 ながくみるやうも  
 行末なく目をもかくるやうの也  
 かのなでしこの  
 かのむすめも也  
 らうたく  
 かはゆらしくも也  
 いかで  
 何ぞぞ也  
 おもひ給ふるを  
 心がけしかごも也  
 つれなくて  
 まぢくとして也  
 やくなき  
 やくたいもなき也

やうしく  
 いつさなくしだいに也  
 かねはた  
 かの女はした也  
 人やりならぬ  
 人のさがぞさいひおほせべき事に  
 もあらねば也  
 たもつまじく  
 かんに入性なくて也  
 されば  
 しかれば也  
 かのさがなも  
 かのわるいちもの也  
 おもひであるかたに  
 ゆびをくひつきしがおもひでとな  
 りて也  
 わづらわしく  
 難儀なる事也  
 ようせずば  
 わるうしたならば也  
 めぎたき  
 めきはつる也

かどくしき  
わけへだてせし也  
すきたる  
好色の也  
此  
今此御ものがたりの也  
いづれと  
どれなどう也  
つるに  
つまる所は也

おもひきだめすなりぬる  
おもひきだめられぬぞ也  
かくぞ  
たゞかやうに也  
くらべくるしかるべし  
くらべものにしてもわけがなかる  
べき也  
なりぐし  
さりそるへ也  
なんすべき  
難非つけべき也

くさはひまぜぬ  
物だれのまじらぬ也  
いづこにかは  
とこにかは也  
くすしからん  
くすみたらん也  
ほうげづき  
佛法めきまつかしくさくて也  
わびしかりぬべけれ  
心氣なるべけれ也

式部がところにぞより

さふらひなんやとておりぬまで

式部が方にこそ、何ぞかはりたる色事はあらん、すこしづゝかたり申せと、みなくせめさせ給ふに、式部うけたまはり、下が下のすちには、なんとやうなる事かおき、所はべらんどいへども、頭の中將まがほになり給ひてじやれ事にてはなきぞ、はやくくせつかせ給へば、さてくこまりはてたる事や、何事をか取いだしておはなし申しあげんと、あたまをかきくしばし思案して、げにくおもひつけたる事さふらふとて申しけるは、わ

たし、また文章の生にてはべりし時、利發なる女のさまを見申したりし、先程馬の頭の申させ給へるやうに公儀むきの事をもいひあはせ、私用のかた所帯むきよりはじめ、人づきあひ等までの、さだめをくべきすぢを了管せん事なども、とくとのみこみて、才智のほどは、生物じりの學者はづかしく、和漢の才に達して、たれにても口を明するものにてははべらざりし、その女の事をよく存せし始めは、わたくし事、ある儒者の許へ學問のためにかよひはべる程に、亭主のむすめどもおほくありときさふらひて、ちよとしたる事のつゝるでに、かれこれいひよりてあひはべりしを、其親きつつけて、ある時わたくしまかりこしはべりし節、かのおやさかづきを持出て申すやうは、わが二の道をよむをきけて、富家の娘は嫁し易し、嫁する事はやうして夫を輕しむ、貧家のむすめは嫁し難し、嫁する事遅くして姑に孝あり、といふ事を教へ事しつゝ、さかづき事をいたさせはべりしかども、あまり氣にあひたる女にてもはべらざりしかば、さのみ心をゆるしても行かよひはべらず、しかれども、かの親のねん頭にせし心ざしの過分さも、もだしがたく存せしゆへ、さすがに貧着してすごしはべりしほごに、かの女もしほらしく、わたくしを大切がりはべりて、夜の目ざめの寝物がたりにまで、學文情を出し身に才智をもつけて、御奉公をもつとめよと申して、そのかたにつきたる、道々しき事を教へなどいたし、又取やりの文なども、



さゝがにのふるまひしるき夕ぐれに

ひるますぐせといふがあやなさ

此歌は、わかせこがくべきよひなりと、夕ぐれのくものしかたをだにうれしがりし人もあるにかくたづねて來たる、晝間ひるまなまへすぐせといひておひ出し給ふは、さりとほきよくもなき心やさ、うらみし心歎、さゝがにはくも蜘蛛也、ふるまひはしかた也、あやなさは、きよくもなきといふ事、晝間を弄ひさそへたる也

とよみて、お下心に、どうしるかこつけ事もぞやおはすらんと、いひもはたさず、かけたしてにげければ、女追かけて

あふ事の夜をしへだてぬ中ならば

ひるまもなかまばゆからまし

此歌は、此ほどはひた物夜をへだて、久々御こしもなければ、何とやらんきやくしんにおもはれさふらふゆへ、此くさきにほひも心をかればべる也、夜々のへだてもなく御こしさふらはゞ、ひるまじやとても、なにしに涼えんりよしいたす事はあるまじきをうさくしくせさせ給ふにつけて、此くさみはづかしうおもひさふらふゆへ、かくは申したる也といふ心歎、まばゆきははづかしげなる也

さすが口ばやなる返歌にてはべりきと、ねばりくくと咄しければ、君だちきこしめして、あらし、にくやとおぼして、それはうそならんとわらはせ給ひ、どこにかそのやうな女が

あらん、それはたゞまことに氣づかひげのなき鬼とむかひ居たらん心ちならめ、さてくむごらしくいひそしる事やと、つまはじきをなされて、言語道断のはなしや、そのやうなるげびたる事ないひそ、よいかんなるうそばかりつきてと、口々に式部をにくみ給ひ、今そつときよからんはなしをせよとせめさせ給ふに、式部は、これより外にめづらしき事はさふらひなんやとてむつくさとして居たり

所にそ

かたにこそ也

けしきある事

かはりたる色事也

たてう事か

なんとやらなる事

まるやかに

眞がほになり給ひて也

をそしと

はやくく〜と也

せめ給へば

せめつかせ給へば也

—紫文蚤の囀—

とり申さん

とりいだしておはなし申しあげん

とおもひめぐらすに

しあんして也

かしこき

利發なる也

ためし

さま也

おほやけ事

公儀むきの事也

わたくしさま

私用のかた也

世にすまふべき

所帯むきよりはじめ人づきあひ等

まで也

心をきてな

さだめなくべきすぢな也

おもひめぐらんかたも

りようけんせん事なども

いたりふかく

とくとのみこみて也

さえのきは

才智のほど也

なま〜の

なま物じりの也

はかせ  
學者也  
すべて  
たれにても也  
あるじ  
亭主也  
はかなきつめて  
ちよとしたる事のつめでに也  
うたふを  
よむを也  
きこえこち  
をしへ事し也  
おさく  
さのみ也  
うちさけても  
心をゆるしても也  
まからず  
行かよひはべらす也  
はばかりて  
もだしがたく也

かゝつらひ  
とんぢやくして也  
あはれに  
しほらしく也  
おもひうしろみ  
大切がり也  
さえつき  
才智をもつけて也  
おほやけにつかふまつるべき  
御奉公をもつとめ也  
きよげに  
きれいに也  
せふそこぶみ  
とりやりのふみ也  
むべしく  
もつともらしく也  
まかりたえて  
中たえんにもつかまつりがなく  
しとして  
師匠にいたして也

こしおれぶみ  
腰折の詩文也  
なつかしく  
そひなじむべき也  
むさいの人  
無器用なるわたくし也  
なまわろからんふるまひ  
無調法らしきてい也  
みえんに  
見かざればべらんも也  
まいて  
まして也  
君たちの  
御前かたの也  
さしも  
此女のやうに也  
はかんしく  
何にかけてもくからず也  
したゝかな  
文才弘大なる也

御うしろ見は  
御簾中などをば也  
はかなし  
心たはらず也  
くちおしと  
見だてなしと也  
かつ  
ひつきやう也  
見つゝも  
見うけつゝも也  
心につき  
わが心にかなひ也  
すくせ  
宿縁也  
おかしかりける  
おもしろかりける也  
すかひ給  
すかさせ給ふ也  
心はえながら  
合點はしながら也

はなのあたりをこめきて  
小ばなをひくめかせて也  
ものゝたよりに  
所用の事ありてまかりこしつゝ  
でに也  
つねのうちさけ居たるかたにははべ  
らで  
まへつれの居さしきにはおひ  
はべらす也  
心やましき  
下心ありげに也  
物こしにて  
しやうじをへだてて也  
ふすぶるにやと  
ふすべて見るにやと也  
おこがましきも  
しさいらしき事ども也  
さかし人  
かしこ女也  
はた  
又也  
ものえんじ  
物うちみはらだつ也

世の  
世間の也  
おもひとりて  
了簡いたせしかば也  
はやりかにて  
おもくれすさらくとして也  
月ころ  
一兩月このかた也  
ふびやう  
ふくつういたし也  
おもきに  
よほどおもり也  
たへかれ  
じゆつなさに也  
ごくれちのさうやく  
藤也  
ぶくして  
たべきふらへば也  
いと  
ことのほか也

まのあたりならずとも  
お目にはかゝられども也  
さるべからん  
相應の也  
さうじらは  
雑々用事あらば也  
いとあはれに  
いとよさいなげに也  
むべしく  
さもさらしく也  
いらへ  
返答也  
うけたまわりぬ  
もつともこそ也  
此かうせん時に  
此くさみのうせたらんじぶんに也  
たかやかに  
たかんと也  
いさおし  
いたしく也

はた  
又也  
すべなくて  
はなもちなられば也  
いかなる  
どうぞしたる也  
なひて  
なひかけて也  
しづくと  
ればりくと也  
そらこさて  
それはうそならんと也  
さる  
そのやうな也  
おいらかになにとこそ  
まことに氣づかひげのすくなきを  
にせ也  
むくつけき事  
むごらしくいひしる事を也  
あばめ  
そのやうな下卑たる事ないひそ也

おりぬ  
居たり也  
おいらかになにとして  
まことに氣づかひにをにこそ也  
さうしくや  
あいさうなしとや也  
たちより給へ  
御こし給へと也  
きよすぐさん  
きよすてにしてかへらんも也  
たちやすらふべきに  
たちさまるべき事にも也  
はなやかに  
はんなりと也  
にげめをつかひて  
にげしりをかまへて也  
ことつけそや  
かこつけ事もぞや也  
くちとくなどは  
口ばやなる也

あさましと  
あらしにくやと也  
いづこの  
ごごにか也

いはんかたなしと  
言語道断也  
すこしよろしからん  
今そつときよからん

すべておとこも女もより  
あかし給ひつまで

馬の頭申すは、たゞ今の式部の物がたりにつけても、惣じて男も女も、をろかなるものゝくせにて、何にてもすこししりはつりたる事を、心の内にふくみもちてをる事ならず、残りなくすきといひ出し仕出してわが器量のたけを、人に見せしらせんとおもへるぞ笑止なる、三史といふて、史記、前漢書、後漢書、五經と名づけて、毛詩、尚書、周易、左傳、禮記などの、道々しきかたを、聰明にしりたりがほならんこそ、あまりあいらしげもたうとげもなからめ、女じやといへばとても、世間の事公私につけて、などかはいしきしらすをよばずばかりにしもあらん、わざ／＼ならひまなばねども、何ぞしたる事のうへ、どこそのはづれ／＼にても、ちと一かどある人の耳にも目にもかゝりて、女中にはめづらしど、我をおらるゝやうの事もしせんとおほかるべし、さあるほどにといふて、物しりだてに、真名字を筆かろげにすらくとかき出し、それほどになしともよかるべき、女どしの

中へつかはすかなふみにも、かのかたき文字を半分過も、四角八面にかきませたるは、さきにてみる人の、あらうたてしや、何といふ事やら會てよめぬとて氣のどくがるべければ、たゞ假名にてしなやかに、さらりとかきたらばよからん物と見ゆるかし、そのかく人の心には、さやうにむつかしげなる物としもおもはざるらめど、をのづからこはくしき聲によみなされなどして、無學の人のこまるやうに、わざとかましくするにやとこそおもはるれ、これは、歴々の御中にもおほき事ぞかし、又おれこそちと歌よむぞと、心じまんにおもへる人の、すぐさま歌にからめられて、古詩や古歌の内などの、目をさき古事などを、歌にもふみにも、はじめから取こみつゝ、さしてもなきおろく、人の機嫌のほどをもはからず、よみかけたるこそいかゞしき事なれ、それを小むつかしとて、返しせねば心なきやう也、又返しをもえせざらん人は面目なからん、年始などのさしだまりて、さあるべき節會の時分は、もとよりわれ人心いそがしきに、別して、五月五日端午の節句、参内する朝などは、帝の出御はやければ、それよりまへにといそぐほどに、何のあやめのよしあしも、手にも心にもつかで、どつはかははとするさきへたちて、風情たゞならぬ根を引かけて讀をくり、九月九日重陽の宴に、御前へさしあぐる詩の、難き心を案じほれて、心ひまなきおりに、菊の露などを、かこつけよせたる歌などをよみかくるなどは、つきもなき心

いそぎの節にさしあはせ、よしはさやうならぬおりにてもあれよ、後に見るには、げにをのづからおもしろくもあはれにもあるへかりける歌にてからが、其時節にはつがもなき事をと、耳にも目にもどまらぬ事などを、人のいそがしきをもかへりみず、われおもしろの人かしましとやらんにて、何の丁簡なしによみかけたるは、かへつて未熟なるやうにぞ見ゆるかし、歌のみにかざらず、萬端の用事などをいひあはせんにつけても、われは懇切ぶりに、心ばせを見せんとする事ならんづれどもさきの人の心びまなからん節などはその人のおもはくにも、此砌には何事なれば心なきしかたや、よしさあるにてもかさねての事にはせでなど、おもふべき事なるを、さやうの時節をさしはからふ分別もなく、いひたり仕たりする心にては、結句由緒めきねん頃ぶりならざらんが、手のつかぬかたにて、わき／＼より見きく所もやすらかなるべき事ぞ、惣して心にいかほどしりたる事をもしらすかほにし、いひ出たき事をも、十の物ならば、一つ二つのふしをもひかへて、残りおほきほどにてなんあるべかりけりなど、申すにつけても、源氏の君は、たゞ藤つばの御有様のみ、お心の内におぼしつけさせ給ひ、あの御かたは、御みめかたちよりお心ばへまで、萬端につきたらはぬ事もまします、又出すぎさせ給ふ事もおはさで、どこかどこまで、よくもそろはせ給ひける哉、又とはありがたき御かたやとおぼしめすにつけても、御むね



ふたがりつゝ、ゆかしきものにぞおぼし給ふ、けふのお物がたりどものよしあし、いづれをかうとさだめきはむるともなく、あげくのはてには、らちもなき色はなしなどになりて、夜をあかさせ給ふ

すべて

そうじて也

わるものは

なろかなるものゝくせにて也

わづかに

すこし也

しれるかたの事を

しりはへりたる事な也

いとおしけれ

せうしなる也

あきらかにさとしあかさんこそ

聰明にしりたり顔ならんこそ也

あいきやうなからめ

あいらしげもたうとけもなからめ也

世にある事の

世間の事也

おほやけわたくし

公私也

むげに

かいしき也

いたらずしも

をよぼすばかりにし也

すこしも

ちさ也

がごあらん人の

一かどある人の也

じれんに

しせんぞ也

さるまゝには

さあるほどにといふて也

まんな

真名字也

はしりがきて

筆かろげにすらくも也

さるまじき

それほどになしともよかるべき也

ごち

どし也

女ぶみに

かなぶみに也

なかばすきて

半分すぎ也

かきすくめたる

四かく入めんにかきませたるは也

あなうたて

あらうたてしや也

たなやか

しなやかにさらりと也

さしも

さやうにむつかしげなるものとし

も也

こそさらびたり

わざとがましく也

上らうの中

歴々の御中也

やがて

すぐさま也

まつばれ

からめられて也

おかしきふるこそ

古詩や古歌の内などの目ごなきふ

ること也

すさまじき

さしてもなき也

ものしき

いかゞしき也

なまげなし

心なきやうなり也

はしたなからん

めんぼくなからん也

さるべき

さあるべき也

まつきのせち

五月五日たんの節句也

まいる

参内也

おもひしづめられぬ

手にも心にもつかて也

えならぬ

たゞならぬ也

九月のえん

九月九日重陽のえん也

おもひめぐらし

あんじほれて也

いとまなき

心びなき也

つきなき

つきもなき也

いとなみに

心いそぎのせつに也

さうらても

さやうならぬおりにても也

おかしくも

おもしろくも也

あべかりける

あるべかりける也

そのおりに

その時節には也

つきなく

つがもなき也

をしばからず

何の了簡なしに也

中々

かへつて也

心をくれて

みじゆるなるやうにぞ也

よろづの事

萬端の用事など也

さてもと

さあるにても也

おもひわかぬばかりの心  
 さしはからふ分別もなく也  
 なさけだゝざらん  
 れんごるぶりならざらんが也  
 すべて  
 そうじて也  
 すぐすべくなん  
 のこりおほきほどにて也  
 たらす  
 たらはぬ也  
 ものし給ひけるかなと  
 よくもそろはせ給ひけるかな也

いつかたによりはつともなく  
 いづれをかうとさだめきはむると  
 もなく也  
 はては  
 あけくのはてには也  
 などかは  
 何事なれば也  
 おりから時々  
 時節を也  
 よしばみ  
 由緒めき也  
 めやすかるべき  
 見きく所もやすらかなるべき也

いはまほしからんこと  
 いひいでたき事也  
 人ひとりの  
 桐つぼの女御をさして云  
 さしすきたる  
 出すきさせ也  
 あやしきことども  
 らちもなき色ばなし也

からうじてより

いとおしきなるべしまで

いつはるゝ事やらとおもひし長雨も、今朝はやうく晴あかりて日和になりぬ、源氏の君、此やうにのみべんくんと、内裏のお部屋にはかりこもりおはしますをも、左大臣殿の氣のどくがらせ給はんお心のほども、いたくしやおぼしたちて、左大臣殿の御かたへおこしなされけり、その姫君の奥むき萬端のやうす、めしつかはせ給ふ女房などの作法等

まで、きつとしてけたかく、輕はづみにそけたる所まじらず、猶これこそ、夕べ人々のすてがたきものにどりいだして定めたりし、眞實心の妻女と、たのまれぬべき御かたぞと、は源氏の君おぼしたれど、女君の、あまりりつはにしやんとなされし御有様にて、うちとけたる例のおすきのじやれ事もなされがたく、物を一言仰せ給ふも、どこやらはづかしげに、しつほりと仕過させ給へるを、源氏の君は、何のおはなしじほもなければ、お心さびしさに、中納言の君中づかさのおもとなどて、十人なみよりはちとすぐれたる器量の、わかき女房たちに、をどけ事などの給ひつゝ、さても暑き事やとて帯ときひろげてくつろがせ給ふ、その御有様を見奉るもかたじけなしと、皆女房たちはおもひあへりけり、左大臣殿は、源氏の君めづらしぶりにて、お部屋へ入らせられたりときかせ給ひて、早速お見まひにまいらせ給ふが、うちとけすがたにて、取ひるげたるていにておはしませば、左大臣殿はさしひかへさせ給ひ、御几帳をへたて、御物がたりせさせ給ふを、源氏の君は氣づまりやとおぼして、もはやよい程にしてかへり給はでと仰せられぬばかりに、やれくあつやとて、お顔をしかめさせ給へは、女房たちはおかしがりて笑ふを、源氏の君、あらかしなましと小ごゑにの給ひて、脇息によりかゝりておはしますも、大臣たる人へ對してのおあへしらひには、あまりお心やすぶり過たる事にて、外の人のなるまじき御しなしなれや、

日もくるゝほどに、今宵は天一神、内裏よりふたがりてはべりけりと申す、源氏の君も、まことにさうぞかしと仰せける、これはいつも忌せ給ふかたなれば也、二條の院もおなじ方角にて、今俄には何かたへたがへんやうもなし、其上夜前の夜ばなしが過て、ねふさもねふし、頭痛などもしてじゆつなきになど、まぎらはして、お寢間へ入らせ給ふに、忌せ給ふべき事を押事なされさふらふは、いとあしき事也とたれかれが申しつゝ、紀伊守にてお心やすくまいりつかへ奉る人の中川の近邊に家居せしが、此庭をこしらへ、水のながれをせき入れて、ことの外涼しきかけの所にてはべる、これへ御たがへなされてしかるべきやと申しあげけるに、源氏の君きこしめし、なるほどそこあたりぞよからん、氣むきもすぐれぬに、車の下り上りもめんどうなれば、牛のまゝ引入れべき所にこそとの給ふ、常々もしのびの御方たがへ所は、さためてあちこちにあまたあるべけれど、左大臣どの御かたへ、久しく程をへてたまゝ御こしなされしに、方ふたがりたりとて、又引たがへ外へと仰せられんはいかに忌せ給ふ方なればとて、さすがにさやうにもなされがたく、其御かたぐのおぼし給はん處もいたゝしとおぼしめししゆへ、かれこれとしぶらせ給ふやうにはせさせ給ふが、たれかれの申すを、幸になされしなるべし

からうじて

やうくにも

日のけしきもなれり

日よりなりぬ也

かくのみ

此やうにのみ也

大との

左大臣殿也

いさおし

いたゝしやと也

まかて給へり

御こしなされけり也

大かたのけしき人のけはひ

萬端のやうすめしつかはせ給ふ女房などの作法等まで也

けざやかに

きつとして也

みだれたるところ

かるはづみにそけたる所也

まめ人には

眞實心の妻女と也

— 案文體の釋 —

うるはしき

りつはにしやとなされし也

さげがたく

うちとけたるじやれこともなされがたく也

おもひしつまり

しつぱりとし過させ也

さうくしく

お心さびしさに也

なしたべたらぬ

十人なみよりはちさすぐれたる器量也

たはふれこと

なとけこそ也

あつさにみだれ給へる

あつきことやとて帯ときひろげてくつろがせ給ふ也

みるかひありと

見奉るもかたじけなしと也

おと

左大臣殿也

わたり給ひて

お見まひにまいらせ也

にかみ給へば

おかほなしがめさせ給へば也

あなかま

あらかしもし也

やすらかなる

お心やすぶり過たる也

御ふるまひなりや

御しなしなれや也

くらくなるほどに

日もくるゝほどに也

なかつみ

天一神也

うちよりは

内裏より也

さかし

まことにさうぞかし也

例も

いつも也

すちにて

方角にて也

いとなやましきにとて  
 じゆつなきに也  
 おほとのごもれり  
 おれまへいらせ給ふ也  
 これかれ  
 たれかれ也  
 したしく  
 お心やすく也

わたりなる  
 近邊に也  
 いと  
 なるほど也  
 よかなり  
 よからん也  
 なやましきに  
 氣むきもすぐれぬる也

うしながら  
 牛のまゝ也  
 わたり給ひるに  
 御こしなされしに也  
 いとおしき  
 いとくしと也  
 かたふたげて  
 方ふたがりたりとて也

紀伊守に仰せごことより

いそぎありく程まで

紀伊守へ右の趣仰せごことあり、きのかみ御意をうけたまはり、かしこまり奉るのよし申しあげつれども、お次の間へしりぞき出ていふやうは、此ほどは父伊與介か家に、ちとつゝしむ事はべりて、かの内の女ども大勢、わたくしの宅へまかりこし逗留いたして、座敷ども、居ふたげさふらふ元來せばき家居にてさふらへば、無禮なる事どもやはべらんと、めいわくがりてお次の人々へいふを、源氏の君きかせ給ひ、その人ぢかき所こそうれしかるべけれ、女どをき旅寝は物さびしき心ちすべきを、座敷のせばき分はくるしからず、たゞその女中の居給ふ、几帳のうしろにこそ寝めとの給ふ、おそばの人々もげによき御座所

ならんとて、紀伊守が宅へ早速人をはしらせ、をしつけ御越なさるゝほどに、掃除等をも早々せよといひつかはす、随分御沙汰なしくゝとて、わざと表むきにきつとなき所をと仰せられて、いそぎて出させ給ふほどに、左大臣殿へは仰せ通せられず、御供にも、御近習のおこゝろやすき分ばかり召つれおはします、紀伊守、これは急なる儀にて、掃除もいたしあはせまじきをとて心氣かれども、御供の人々きゝ入れねば、紀伊守は、とつはかはとしておさきへ罷歸り、奥むき近き東おもてなる、座敷を掃除しあげさせん、にはかの事なれば、とりあへず御座のまをしつらふたり、流水の心ばへなど、納涼のかたにおもしろくしなし、田舎の家めきたる柴垣しはたして、坪の内の木草も、そこく氣をつけたる植やう也、風涼しくて、それともきゝしらぬ、むしのこゑくして、螢しげく飛びまがふも、おもしろき時節也、御供の人々廊架の縁の下より流れ出たる、泉水にのぞき居て酒をのむ、亭主も、何がおさかなよかれのこれのさかけまはりて、こゆるぎのいそがしかる

しぞきて  
 しりぞきいでゝ也  
 なめけなり  
 無禮なる也  
 物おそろしき  
 物さびしき也  
 まかりうつれる  
 まかりこしとらうりういたし也  
 したになげくを  
 なめいわくがりてお次の人々へい  
 おましごころ  
 御座所也

いさしのびて  
御きたなしくさて也  
ことさらに  
わざと也  
ことよくしからぬ  
表むきにきつとなき所を也  
おと  
左大臣殿也  
きこし給はず  
仰せ通せられず也  
むつまじきかぎり  
御近習のお心やすき分ばかり也  
かみ  
紀伊守也  
にはかにと  
急なる儀にて也

わぶれど  
心氣がれど也  
しんでんの東おもて  
奥むきちかき東おもて也  
はらひあげさせ  
さうじあげさせて也  
かりそめ  
さりあへず也  
水の心ばへ  
流水の心ばへ也  
さるかたにおかしくす  
すみのかたにおもしろく也  
いなか家だつ  
いなかの家めきたる也  
せんざい  
つぼの内也

そこはかとなき  
それともきしらぬ也  
心どめて  
氣をつけたる也  
おしきほど  
おもしろき時節也  
わたどの  
廊架也  
あるじ  
亭主也  
いづみ  
泉水也

君はのどやかにより

見をとりやしなにかしとおぼすまで

源氏の君は優々となかめおはしまして、此ほど雨夜のさだめに、中の品にとり出していい

しは、此なみならんかしとおぼし出づ、此伊與介が妻は、中納言なる人のむすめにて、又中納言、此娘の器量自慢にて、禁裏へ御奉公のぞみを心がけ居るほどの事なれば、うちあがりたるむまれつきのよしを、源氏の君はかねてきゝをかせ給ふほどに、ゆかしきものにおぼして、きゝ耳をたてさせ給ふに、此西おもてにぞ、人の居るやうだいにて、着物のをとなどさはくとして、わかき女にくからぬ聲どもきこへ、さすがに忍びやかにくつくとわらひなどする様體も、わざときかせがましくぞありける、格子のあげてありたるを、きのかみ見つけて、御前よりまつすぐに見ゆるを心なき事よとて、小ごといひくおろさせたりし、そのかうしの内に火をともしたりければ障子の紙に、女の影ぼうしどものうつりて見へたるに、源氏の君障子のきはへそろりとよらせたまひて、見ゆるやとおぼして、のぞかんとせさせ給へどすきまもなかりければ、しばし立聞させ給ふに、女房ども、此まぢかきおりにあつまり居たるなるべし、きゝやきていふことどもをきかせ給へば、おぬしの御身のうへをいふならん、見奉る處は、きつうまたうどらしき御かほにてまします、好色ふかくおはしますよしなれど、左大臣殿の姫君と御縁邊すみたりしこそ、ちどはや過たるお所帯持にて、わきありきもなされにくく、さぞお心さびしからん、さはあれども、まもりてのひまはなけれど、ぬす人のひまありとやらんにて、どうやらしたる

透間を見あはさせ給ふては、よくこそくどかくれしのびて、うかれあるかせ給ふげななどいふにも、源氏の君は、藤つばの女御への密通の事をおぼすのとお心にかゝりて、先御むなさはぎなされつゝかやうのつゐでも、人のいひもらさんをきつければ何としたりるものぞとおぼしたるに、その外にはかはりつるはなしもきこいねば、まづうれしやとおぼしてきゝさし給ふに、桃園の式部卿の宮の姫君へ、朝がほをしんせられし時の御歌の事などを、ちとあそこゝとちがへてかたるもきこえたり、源氏の君は、さてく何の遠慮もなげに、歌咄しなどする事かな、かうきゝたるころはおくゆかしけれど、見をとりする事もぞあらんとおぼす

のどやかに  
いうくと也  
けはい  
様體也  
おもひあがれるけしき  
うちあがりたるむまれつき也  
きぬのなとなひ  
着物のななど也  
みゝとゞめ  
きゝみゝなたてさせ也

はちくと  
さはくと也  
ことさらび  
わざさかせがましく也  
かみ  
きのかみ也  
むつかりて  
小こといひくと也  
すきかけ  
かけほうじ也

さうじ  
障子也  
もりたり  
うつりてみえたる也  
やをら  
そろりと也  
ひましなければ  
すきまもなかりければ也  
きゝ給ふに  
たちきゝさせ給ふに也

ちかきもや  
まぢかきおもや也  
つどひ  
あつまり也  
うちさゝめき  
さゝやき也  
わが  
おぬしの也  
いたう  
きつう也  
まめたちて  
またうどらしき也

かみいできてより  
おりあへざらんとさこゆまで

まだき  
はや過くる也  
やんこなきよすかさだまり給へり  
こなる事なければ  
左大臣殿の姫君と御縁邊すみ也  
さうんしあめれ  
お心さびしからん也  
されど  
さはあれど也  
さるべきくま  
どうやらしけるすきま也  
おぼす事のみ  
藤つばの女御へのみつづの文を  
おぼすのみ也

むれつづれ  
むなさはぎ也  
その外にはかはりたるはなしきか  
れげ也  
ほゝゆかめて  
あそこゝとちがへて也  
すしがち  
歌はなしなとする也  
くつろぎがましく  
何のふんりよもなげに也

紀伊守出来たりて懸燈臺おほくともしそへ、あふら火かきたてなごして御菓子をさしあげたり、源氏の君仰せけるは、催馬樂の吾家に、とばり帳をもたれたるを、大君きませむこにせんとあるが、こゝにもとばり帳まではたれつるが、どうじやぞむこにせんといふたる、そのかたの心あてもなくては、興もなきちそうぶりならんどの給ひば紀伊守かしこまりつ

、此さいばらのつゞきに、おさかなに何よけんとはさふらへども、相應の女の存じあても御座なく、何かよくさふらはんども、え申しあげかねさふらふとて、めいわくさふなるかほにてぞ居たりける、源氏の君、さらばやすませ給はんとて、座敷のかたはしにすつらひたるお寝間へいらせ給ひ、ちよと寝ころばせ給ふやうにて、御やすみなさるゝほどに、御供の人々も、みな寝じたくをしたりけり、亭主の子ども、きれいにそだちしちらくらと見ゆる其内に、殿上にてまへへ御らんじて見しらせ給ふもあり、伊與介が子ども有りて、かれこれあまたある中に、様子のつしりときれいにみゆる、十二三はかりなるもあり、源氏の君、それがどうぞと紀伊守に問はせ給へば、それかれはわたくしの世倅、並に弟にてさふらふ、此十二三なる者は故右衛門の督が末の子にて、父右衛門の督、殊の外不便かりはべりけるを、此子のまだおさなき時に、父にをくれはべりて、姉なるものゝ縁につれて、伊與介が厄介にいたし、只今かくて罷有りさふらふ、才智などもつき申すべきやうに、器用はだにむまれつき無調法らしくもされなきにより、殿上のまじらひなどもいたさせたく存しよりては罷在ながら、かれこれ取まぎれ早速にもえぞんじたちさふらはずと申しあぐる、源氏の君、さてへはれの事や、姉といふは其方の繼母よなど仰せければ紀伊守、さやうに御座候と申す、源氏の君、その方が年にあはせては、似つかはしくもなき、わか

さ母おやをまうけたりな、まへへ其繼母のうはさをば、帝にもさしめしをかせ給ふて、御奉公にさしあげたきよしを、右衛門の督かねてうかいひ奏したりしが、右衛門の督うせにし後、何のさたもなきがいかりなりしなど、いつぞやも仰せさせ給ひし、世こそさだめなき物よなど、いとおとなしがほにの給ふ、紀伊守うけたまはりて申すやう、存じがけもなく、伊與介がかくのどをりむかへどりさふらひし、御意のごとく、世の中と申すものは、さやうにのみにて、今もむかしもさだまりたる事ぞはべらぬ、なかんづく女の身のうへは、たより所なきなん哀れにさふらふなど、申しあげん、いひさしたるを、源氏の君仰せけるは、何と其人をば、伊與介は大切がるや、さぞいとおし君となんおもふらんなど仰せければ、紀伊守、なにといたしてか、さやうの籠抹なる儀にては御座なくたい内證の主人のやうにこそ、あかまへ大切がりあつかひさふらふなる、よい年をつかまつりてさてへ似あはざる色ふかきいたしかたと、わたくしをはじめ、承引つかまつられぬ事にぞんじさうらふなど、申す、源氏の君仰せらるゝは、さはありとも、そちなごの若さかり相應の、當世風に好色めかはんは、心をゆるしおろしたて、心やすぶりに手ばなしはせまじ、かの伊與介は、年こそよいたれ今時のわかいものまさりに氣だて一ふしありて、色のかたには、風流なる心のおやぢなるものをやなど、御物がたりなされつゝ、其女中は

いづかたにぞとおたづねなさる、紀伊守<sup>きののかみ</sup>うけたまはり皆下<sup>みなした</sup>の屋へおりよと申しつけはべりぬるが、まだかれこれといたしえおりあへ申さで、よりあひ咄<sup>はな</sup>してぞ居<sup>ゐ</sup>はべるやらんと申しあぐる

かみ

きのかみ也

とうろ

かけさうだい也

かゝげ

かきたて也

御くだ物

御菓子也

まいれり

さしあげたり也

いかにぞは

どうじやぞ也

さるかたの心もなくてはそのかたの心あてもなくては也

めざましき

興もなき也

あるじあらんと

ちそうぶりならんと也

はしつかたのおましに

座敷のかたはしのしつらへたるお

ねまへ也

下なりやうにて

ちよとれころほせ給ふやうにて也

おほさのごもれば

御やすみなさるゝ也

しづまりぬ

れじたくをしたり也

あるじ

亭主也

おかしげにて

きれいにそだちし也

御らんじなれたり

御らんじて見しらせ給ふ也

けはひ

やうす也

あてはかにて

のつしりまきれいに也

いづれがいづれ

どれかどうそ

いとかなしくはへりける

ここの外ふびんがりはへりけり也

よすがに

縁につれて也

ざえなぞも

才智なども也

けしうは

無調法らしくも也

おもふ給ひかけながらぞんじよりてはまかりありながら也

すがくしう

早速也

まうとの

其方の也

のちのおや

繼母也

さなんはべる

さやうに御座候也

にげなき

似つかはしくもなき也

うへ

みかど也

みやづかへ

御奉公也

いだしたてんと

さしあげたきよし也

もらしそせし

うかゞひ奏し也

およなけ

おさなしがほ也

ふいに

ぞんじがけもなく也

かくてもし

かくのまなりむかへとり也

さのみにて

さやうにのみにて也

なかについても

なかんづく也

すくせ

身のうへ也

うかびたる

たより所なき也

きこえさす

いひさしたるを也

かしづくや

大せつかるや也

君と

いさおし君さし

いかゞは

何といたしてか也

わたくしのしうとこそ

内證の主人のやうに也

すきくしき事と

色ふかきいたしかたと也

なにがしよればじめて

わたくしをはじめて也

うけひき

承引也

まうとたちの

そちなごの也

今めきたらん

當世風に好色めかん也

よしありて

氣だて一ふしありて也

さりとも

さはありとも也

つきんくしう

わかさかり相應の也

かのすけは

かのいよのすけは也

けしきばめるをや

色のかたには風流なる也



ゑひすゝみてより

まいらんとはべるといふまで

おそばの人々みな酔とろけて縁がはなごにねそべりつゝしづまれば紀伊の守も御いとま給はりてぞまかり出ける、源氏の君は、さすがにとけくともねさせ給はず、物さびしくて、むだねする事やおぼさるゝに、御目もさめきりて、此北の障子のあちらに、人の居たるやうすのきこゆるを、此かたにや、伊與介が妻のかくれて居るならん、ゆかしやと御心といめて、そろりとおき出させ給ひ、立ち、せさせ給へば宵にきこしめし、右衛門の督がむすこの聲にて、もうしや／＼物うけたまはる、どこにおはしますぞと、ほそ／＼としたるころのあいらしげなるにていへば、姉君き／＼つけてこゝにぞねたるよ、お客人はおよりぬるか、そのおはしますあたりへは、どうやらまじかさふにおもひつるを、されどもよほど遠かりけるよといふも、ねてゐたる聲にて、しどけなきが、おどうこのころに、いとよく似たれば、さてこそあねなりけりときかせ給ふ、かの子いふやう、あなたはひさしの間にお御寝なりぬる、をどにき／＼つる御有様をはじめて見奉りけり、まことになみ／＼ならぬ御事也けりと、小ごゑにいへば、姉君、ひるならばのぞきて見奉らんものをとねふたげにいひて、ねまきの内へかほを引入れたる聲すれば、源氏の君は、とてももの事にて、もそつ

と心をどいめても問ひきけがし、とくごころなりともきくべきにも、残念やおぼす、かの子がいふやう、われらはかたはずれにねはべらん、あらくらしやとて油火かきたてなどする様子也、あね君は此障子口のすちかひたるあたりにねたるていにて、召つかひの女房に、中將といふがあるかして、中將はどこにぞ、どうやら人どなる心ちして、さびしく物おそろしきにといふを、次の間に人々ふしたるがこたへたるは、中將のおもとは、さきほど下の屋に、湯をつかひておりさふらふが、只今にまいらんと申したりしといふ

ゑひすゝみて

ゑひとかけて也

すの

こゑんかわ也

ふしつゝ

ねそべりつゝ也

ありつる子

管にきゝ給ひし右衛門の督のむすこ也

とけても

ものけ給はるか

もうしや／＼ものうけたまはる也

いたづらふし

むだれ也

いづくに

とこに也

さうじ

しやうじ也

かれたるこゑ

ほそ／＼としたるこゑ也

あなたに

あちらに也

おかしきにて

あいらしげなるにて也

けはひ

あたるやうす也

まろうと

お客人也

こなたや

此かたにや也

れ給ひぬるか

およりぬるか也

かくいふ人

伊與介か妻也

いかに

どうやら也

あはれやと  
 仰かしやと也  
 ちかからんと  
 まちかさうに也  
 やたら  
 そろりと也  
 けどなかりけり  
 よほどとをよしたりし也  
 れそりけるこふ  
 れてゐたるこふ也  
 似がよひたれば  
 似たれば也  
 いもうとと  
 あねなりけりと也  
 おほとのもりぬる  
 御疑なりぬる也

げにこそ  
 まことに也  
 めてたかりけれ  
 なみくならぬ御事也  
 みそかに  
 小こふに也  
 れたう  
 まことの事にさて也  
 あぢきなく  
 残念やと也  
 まろは  
 われらは遠  
 はした  
 かたはづれに也  
 あな  
 あら也

一九〇  
 火かげなど  
 油火かきたてなど也  
 さうじ口  
 障子口也  
 いづにぞ  
 どこにぞ也  
 人けさなけ  
 人とななる也  
 なけしのしもに  
 次の間に也  
 いらへ  
 こたへ也  
 仰におりて  
 仰をつかひておりさふらう也

珍書刊行會叢書 第五冊 不製許

大正四年十二月廿五日印刷  
 大正四年十二月廿一日發行  
 非賣品

東京市京橋區柳町二番地  
 編輯兼發行人 川上邦基  
 東京市神田區西小川町二丁目六番地  
 印刷人 森川修  
 東京市神田區西小川町二丁目六番地  
 印刷所 大精社

發行所 珍書刊行會

東京市京橋區柳町二番地  
 電話東京三〇三三番  
 郵政東京四七八五番

終